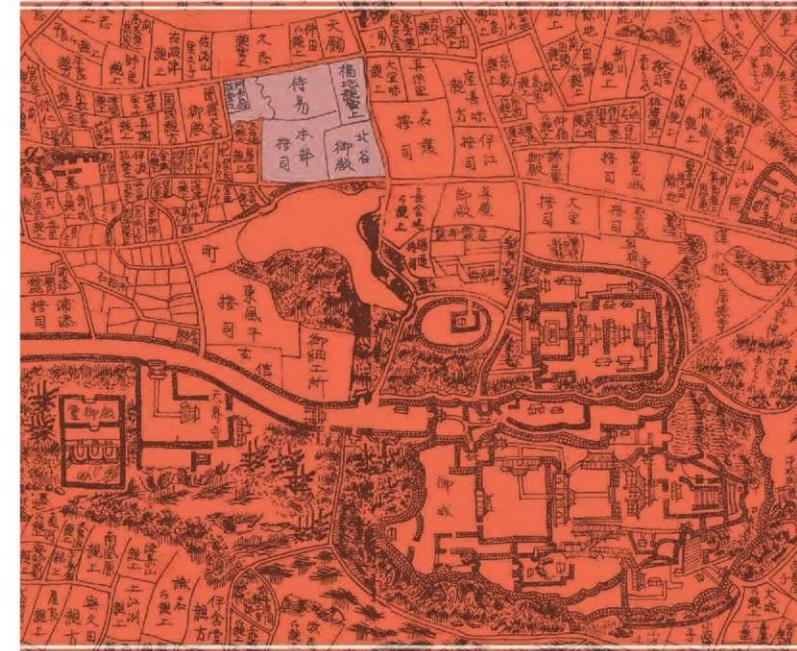


# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(8) —

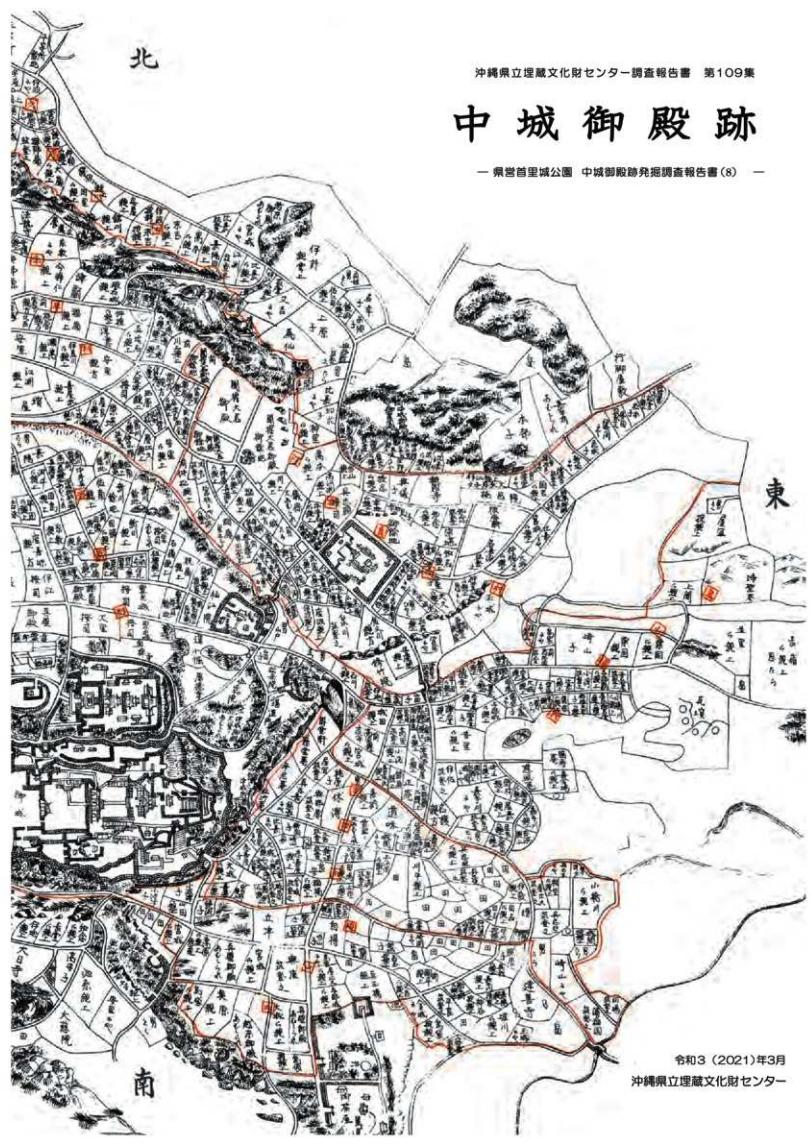


令和3(2021)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(8) —



令和3（2021）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(8) —

令和3(2021)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市公園課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 27（2015）～29（2017）・令和元（2019）年度に行った中城御殿跡の遺構確認調査の成果をまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されました。明治 3（1870）年に今回の調査対象となった大中町に新たに造営が開始され、明治 8（1875）年に移転します。そして、明治 12（1879）年の琉球処分を経て、昭和 20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地にありました。

沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査は県営首里城公園整備の一環として、平成 19（2007）年度より遺構確認調査として開始しており、今回報告を行う調査では、上之御殿と呼ばれる、中城御殿西の標高の高い地区に位置する離れを中心として調査区を設けて行いました。

調査によって、上之御殿南の庭園や大岩の拌所周囲に残存する階段跡、西端の石牆、さらに中城御殿以前のものと考えられるごみ捨て場といった遺構が良好な状態で遺されていることがわかりました。また、上之御殿の調査以外にも、龍潭線（県道 29 号線）の道路拡幅による正面石牆の移設工事に伴って、石牆付近の調査も行っており、石牆の根石や、その下層の配石遺構などが見つかっています。調査に伴い、中国や日本各地で焼かれた陶磁器類が多数出土しているほか、戦後の造成時に埋められたガラス瓶などの現代遺物といった、中城御殿以前から戦時中の焼失、戦後の利用状況を示す遺物が多数得られています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県における琉球王府時代末期から戦後の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について感心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

令和 3（2021）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 瑞慶覧 勝利



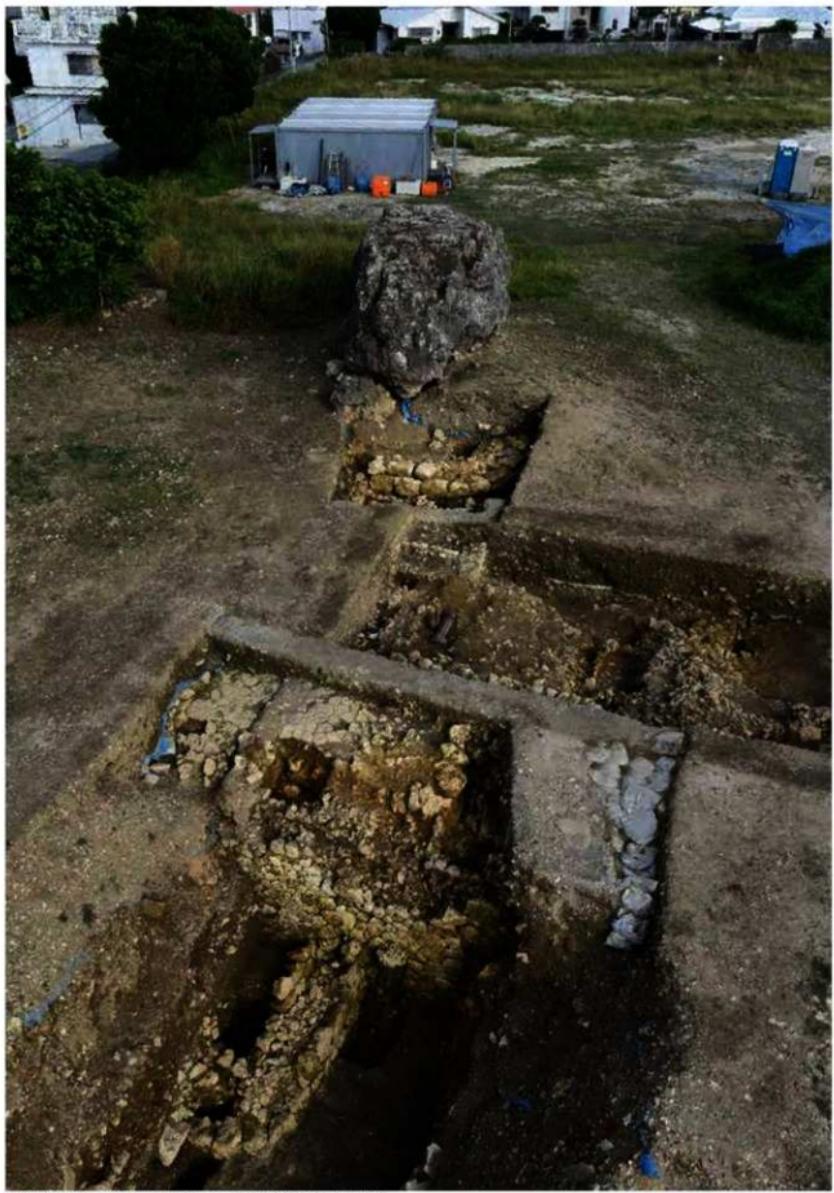


1. 庭園跡（上空北西から）



2. 庭園跡（上空北から）

巻頭図版 1



西側石龜周辺 トレンチ5・10 西側・12 遺構検出状況（上空西から）

巻頭図版 2



1. トレンチ 1 計石造構築状況（南東から）



2. 西側石牆周辺 トレンチ 2（西から）

巻頭図版 3



1. 西側石牆周辺 トレンチ 5・10 西側・12 遺構検出状況（上空南から）



2. 西側石牆周辺 トレンチ 5 近景（南から）



1. 庭園・西側石牆周辺 トレンチ 8 遺構検出状況（上空北西から）



2. 庭園・西側石牆周辺 トレンチ 8 遺構検出状況近景（南から）

巻頭図版 5



1. 拝所周辺 トレンチ 10 造構検出状況（上空東から）



2. 拝所周辺 トレンチ 10 造構検出状況（東から）

## 例　言

- 1 本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 27（2015）～29（2017）・令和元（2019）年度に実施した発掘調査成果を令和元（2019）年度および令和2（2020）年度に資料整理を行い、まとめたものである。
- 2 本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は沖縄県教育文化財課が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
- 4 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図を使用した。
- 5 本書に掲載した中城御殿屋根伏図（第3図）や間取り復元図（第4・5図）は、中城御殿跡地整備検討委員会資料〔沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課提供〕を用いた。
- 6 本報告書に掲載した白黒の航空写真（第53図）は、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室所蔵の1945年4月2日米軍撮影（CV20-103-63）中城御殿周辺を複写した。
- 7 本報告書の編集は調査体制で記した方々の協力のもと田村薫が行い、各章の執筆は下記のとおり行った。
- 田村薫：第1・2章、第3章第1節～第3節、第5章  
奥平大貴：第3章第4節1・3・4・6・8  
久場大輝：第3章第4節9・13・14・17～20  
島袋桃子：第3章第4節7・10・11・16  
國吉ななせ：第3章第4節2・5・12・15  
バリノ・サーヴェイ株式会社：第4章
- 8 本報告書に掲載された出土遺物の写真撮影は伊禮若奈、與儀曉裕が行った。
- 9 本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、沖縄県立博物館・美術館の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。
- 10 各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめて掲載した。
- 11 発掘調査で得られた出土遺物及び実測図、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 12 各年度単位で設定したトレンチ名を、本報告書では次表のとおり統一して表記する。

本報告書記載 トレンチ名	調査時 トレンチ名	遺物注記	本報告書記載 トレンチ名	調査時 トレンチ名	遺物注記
トレンチ1	平成27年度石闕地区	ナガ'155H○層	トレンチ8	平成28年度トレンチ1	ナガ'161H○層
トレンチ2	平成27年度トレンチ3	ナガ'153H○層	トレンチ9	平成29年度トレンチ2	ナガ'172H○層
トレンチ3	平成27年度トレンチ4	ナガ'154H○層		平成27年度トレンチ1	ナガ'151H○層
トレンチ4	平成29年度トレンチ1	ナガ'171H○層	トレンチ10	令和元年度トレンチ2	ナガ'192H石アミ1
トレンチ5	令和元年度トレンチ1	ナガ'191H○層		ナガ'192H石團い2	
トレンチ6	平成29年度トレンチ3・4	ナガ'173H○層	トレンチ11	平成29年度トレンチ5	ナガ'174H○層
トレンチ7	平成27年度トレンチ2	ナガ'152H○層	トレンチ12	令和元年度トレンチ2	ナガ'192H○層
	令和元年度SG2	ナガ'19SG2○層			

# 目次

序

巻頭図版

例言

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 発掘作業の経過	3
第4節 整理作業の経過	4

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7

## 第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 調査区の設定	14
第2節 層序	17
第3節 遺構	
1 南側石牆周辺	27
2 西側石牆周辺	27
3 北側石牆周辺	29
4 庭園周辺	30
5 拝所周辺	30
6 上之御殿建物周辺	31
7 その他遺構	31
第4節 遺物	
1 中国産青磁	60
2 中国産白磁	60
3 中国産青花	60
4 中国・タイ産褐釉陶器	60
5 その他の輸入陶磁器	60
6 本土産陶磁器	60
7 沖縄産施釉陶器	60
8 初期沖縄産無釉陶器	60
9 沖縄産無釉陶器	61
10 陶質土器	61
11 瓦質土器	61
12 土器	61
13 煙管	61
14 金属製品	61

15 円盤状製品 .....	61
16 骨製品・土製品 .....	61
17 ガラス製品・ガラス玉 .....	62
18 石製品・石器・石造製品 .....	62
19 瓦・埠 .....	62
20 錢貨 .....	62
<b>第4章 自然科学分析</b>	
第1節 試料 .....	118
第2節 分析方法 .....	118
第3節 結果 .....	118
第4節 考察 .....	119
<b>第5章 総括 .....</b> 123	
引用・参考文献 .....	130
報告書抄録 .....	135

## 挿図目次

第1図	沖縄本島の位置図	8
第2図	中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡	9
第3図	中城御殿屋根伏図	11
第4図	中城御殿間取り復元図1	11
第5図	中城御殿間取り復元図2	12
第6図	トレンチ設定全体図	16
第7図	トレンチ設定拡大図	16
第8図	上之御殿層序概要1	18
第9図	上之御殿層序概要2	19
第10図	中城御殿層序模式図	20
第11図	層序図1	21
第12図	層序図2	22
第13図	層序図3	23
第14図	中城御殿全体図	32
第15図	調査区全体図	34
第16図	南側石牆周辺平面図	36
第17図	南側石牆周辺立面・立断面・断面図	37
第18図	西側石牆周辺平面図1	39
第19図	西側石牆周辺平面図2	40
第20図	西側石牆周辺立面図	41
第21図	西側石牆周辺立断面・断面図	42
第22図	北側石牆周辺平面図	46
第23図	北側石牆周辺立面・立断面図	47
第24図	庭園周辺平面図	48
第25図	庭園周辺立面・断面図	49
第26図	洋所周辺平面図	52
第27図	洋所周辺立面・断面・壁面図	53
第28図	上之御殿建物周辺平面図	56
第29図	上之御殿建物周辺立断面・断面図	57
第30図	中国産青磁、中国産白磁、中国産青花1	75
第31図	中国産青花2	76
第32図	中国産青花3	77
第33図	中国・タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器1	78
第34図	その他の輸入陶磁器2、本土産陶磁器1	79
第35図	本土産陶磁器2	80
第36図	本土産陶磁器3	81
第37図	沖縄産施釉陶器1	82
第38図	沖縄産施釉陶器2	83
第39図	沖縄産施釉陶器3	84
第40図	初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器1	85

第41図	初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器2	86
第42図	初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器3	87
第43図	陶質土器、瓦質土器、土器	88
第44図	煙管、金属製品1	89
第45図	金属製品2、円盤状製品1	90
第46図	円盤状製品2、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉	91
第47図	石製品、瓦1	92
第48図	瓦2	93
第49図	瓦3	94
第50図	瓦4、埴	95
第51図	錢貨	96
第52図	花粉化石群集	121
第53図	上之御殿遺構図と戦前航空写真の合成	129

## 図版目次

図版1	作業経過写真1	5
図版2	作業経過写真2	6
図版3	中城御殿跡正門付近	10
図版4	建設中の琉球政府立博物館	10
図版5	トレンチ設定状況	15
図版6	層序図版1	24
図版7	層序図版2	25
図版8	層序図版3	26
図版9	南側石牆周辺遺構	38
図版10	西側石牆周辺遺構1	43
図版11	西側石牆周辺遺構2	44
図版12	西側石牆周辺遺構3	45
図版13	北側石牆周辺遺構	47
図版14	庭園周辺遺構1	50
図版15	庭園周辺遺構2	51
図版16	拝所周辺遺構1	54
図版17	拝所周辺遺構2	55
図版18	上之御殿周辺遺構1	58
図版19	上之御殿周辺遺構2	59
図版20	中国産青磁、中国産白磁、中国産青花1	97
図版21	中国産青花2	98
図版22	中国産青花3、中国産褐釉陶器1	99
図版23	中国産褐釉陶器2、タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器	100
図版24	本土産陶磁器1	101
図版25	本土産陶磁器2	102

図版 26 沖縄産施釉陶器 1	103
図版 27 沖縄産施釉陶器 2	104
図版 28 沖縄産施釉陶器 3	105
図版 29 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 1	106
図版 30 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 2	107
図版 31 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 3	108
図版 32 陶質土器、瓦質土器、土器	109
図版 33 煙管、金属製品 1	110
図版 34 金属製品 2	111
図版 35 円盤状製品、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉	112
図版 36 石製品、瓦 1	113
図版 37 瓦 2	114
図版 38 瓦 3	115
図版 39 瓦 4、埠	116
図版 40 錢貨	117
図版 41 花粉化石・寄生虫卵	122
図版 42 大型植物遺体	122
図版 43 遺構検出状況 1	127
図版 44 遺構検出状況 2	128

## 表目次

第1表 中城御殿跡関連年表	13
第2表 主要層序一覧	20
第3表 遺物観察一覧	63
第4表 花粉分析・寄生虫卵分析結果	120
第5表 微細物分析結果	121

# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦によりその殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和31（1956）年に園比屋武御嶽を嚆矢として整備を開始する。その後、同委員会は昭和45（1970）年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和47（1972）年に本土復帰を果たす。その一環で同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、總理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。その調査成果により、今日まで多くの建造物が復元を見ることができ、一般に公開されている。

今回報告する中城御殿跡の遺構確認調査は、昭和63（1988）年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした調査で、平成19（2007）年度から沖縄県土木建築部より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施している。

調査にあたっては、予算分任元である沖縄県土木建築部都市公園課に対して予算要求を行い、調査開始後には文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化財課へ着手報告を行った（平成27年6月3日付 埋文第188号・平成28年1月6日付 埋文第595号・平成28年11月8日付 埋文第512号・平成29年8月21日付 埋文326号・令和元年7月11日付 埋文第338号）。

また、調査終了後には終了報告を行うとともに（平成27年12月25日付 埋文第578号・平成28年1月6日付 埋文第595号・平成28年11月18日付 埋文第534号・平成30年3月9日付 埋文第

658号・令和元年12月9日付 埋文第695号）、発見された埋蔵文化財（出土品）の内訳・数量の報告を行った（平成27年12月22日付 埋文第568号・平成28年1月6日付 埋文第595号・平成28年11月18日付 埋文第535号・平成30年3月9日付 埋文第657号・令和元年12月6日付 埋文第694号）。

## 第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成27（2015）～29（2017）年度及び令和元（2019）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、令和元（2019）年度及び令和2（2020）年度に実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

### 平成27（2015）年度（発掘調査）

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 諸見里明

事業所管 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章

記念物班 班長 金城亀信、主任専門員 長嶺均

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地英輝

副参事 盛本勲

調査班 主任専門員 山本正昭、羽方誠、

専門員（臨任）新垣有一郎

発掘調査作業 文化財調査嘱託員

田村薰

発掘調査作業員

具志榮建、新本保明、池原進徳、川満昭男、

久銘次均、城間正司、高橋正幸、仲村悦子、

新本淳、比嘉美幸、渡邊愛依、渡邊瑞茂

### 平成28（2016）年度（発掘調査）

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 平敷昭人

事業所管 沖縄県教育庁文化財課

課長 萩尾俊章  
記念物班 班長 上地博、指導主事 神村智子  
事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 金城亀信  
副参事 濱口寿夫  
調査班 班長 仲座久宜、主任専門員 山本昭、  
主任 宮城淳一、専門員 田村薫  
発掘調査作業 文化財調査嘱託員  
久場大暉、仲嶺真太、外間裕一  
業務委託関係 株式会社島田組

平成29(2017)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 平敷昭人  
事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 萩尾俊章  
記念物班 班長 上地博、主任専門員 羽方誠  
事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 金城亀信  
調査班 班長 仲座久宜、主任 宮城淳一、  
専門員 田村薫  
発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員  
平良悟、高原彬浩、仲嶺真太  
発掘調査作業員  
新垣良雄、古我知勇、砂辺光義、平良猛、  
玉寄守朗、知念和伸、安村重保、山本裕二、  
山内昌敏、新垣智也

令和元(2019)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 平敷昭人  
事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 濱口寿夫  
記念物班 班長 仲座久宜、主任専門員 羽方誠、  
主任 宮城淳一  
事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 城田久嗣  
副参事 真栄田義光  
調査班 班長 中山晋、主任 田村薫、  
専門員 奥平大貴  
発掘調査作業 史跡・埋蔵文化財調査員  
久場大暉、國吉ななせ、島袋桃子、根間翔吾、

高原彬浩、平良悟

発掘調査作業員

新垣良雄、石川達貴、親川あや子、新本淳、  
西山久、樋口光子、平安山良子、宮城親正、  
安村重保、米田稔  
資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員  
市川里恵、大城友理華、大村由美子、  
崎原美智子、島千香子、島袋久美子、知花香織、  
津多恵、當真香、富平砂綾子、仲村綾乃、  
比嘉美智子、宮城初枝

令和2(2020)年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 金城弘昌  
事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 諸見友重  
記念物班 班長 仲座久宜、主任専門員 新垣力  
事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 瑞慶覧勝利  
副参事 真栄田義光  
調査班 班長 中山晋、主任 田村薫、  
専門員 奥平大貴  
資料整理作業 史跡・埋蔵文化財調査員  
久場大暉、國吉ななせ、島袋桃子  
資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員  
市川里恵、大城友理華、大村由美子、島千香子、  
多々良亜矢子、津多恵、當真香、仲村綾乃、  
比嘉美智子、與儀曉裕

## 第3節 発掘作業の経過

### 平成27年度

平成27（2015）年度の調査は、上之御殿に埋蔵する遺構を確認することを目的として6月1日から12月18日まで調査を実施した。

まず、6月1日に現場事務所周辺の草刈り及びユニットハウスの設置、使用道具類の搬入作業などを行い、その後6月11日まで、調査区周辺の草刈り作業を実施し、現場作業開始の準備を終えた。その間、トレーナー設定のための測量および磁気探査による異常点の確認も並行して行った（図版1-1）。

6月12日より重機による表土掘削を行った後に発掘調査作業員による人力掘削を開始し、調査区内の遺構検出作業を進めていった（図版1-2）。

8月に入り、南部土木事務所の街路事業の一環として行われている龍潭線（県道29号線）の道路拡幅工事の一環として、中城御殿跡の正面石積みを北側へ移設する工事が行われることとなった。その工事に伴い、石積みの移設先の発掘調査を実施することとなり、石牆地区として新たに調査区を設定し、8月27日から10月9日の期間、人力による遺構検出を実施した（図版1-3）。

平成27年度の調査では、上之御殿地区の調査では洋所に付随する階段の根石と考えられる石列や庭園内の池のほか、上之御殿西に位置する石牆などを確認した（図版1-4、2-12）。石牆地区の調査では、平成4（1992）年の県立博物館調査時に検出した石積み1の根石や、その下層にあった、根固めと考えられる配石遺構などを確認した。遺構の記録は写真撮影及び実測による図面作成にて行った。

調査終了後には、土嚢およびブルーシートによる遺構保護を行った上で、土砂を搬入し埋め戻しを行った。

### 平成28年度

平成28（2016）年度の調査は、上之御殿庭園周辺の遺構検出を目的として調査を行った。株式会社島田組と平成28年6月29日から平成29（2017）

年3月17日までの約9か月間「平成28年度首里城公園発掘調査に伴う支援業務委託（人力掘削）」の契約を締結し、10月12日から11月11日まで調査を実施した。

中城御殿跡の調査を行う前に、首里城公園発掘調査として真珠道跡の調査を8月から行い、現場事務所を中城御殿跡地に設置していたため、中城御殿の調査開始時には、その現場事務所を引き続き使用した。

調査区周辺の草刈り作業は10月7日から10月11日まで実施し、その間、調査区設定のための測量も行った。10月12日には不発弾確認のための磁気探査を行うと共に、重機で表土の除去作業を行った。平成27（2015）年度に検出した石牆の延長線上に調査区を設定し、重機による掘削を実施したが、石牆は見つからず、現代造成土が深く堆積する状況にあったため、実際はより東側に埋蔵されていると想定された。

10月17日から庭園池部分の人力掘削を開始し、庭園に残る遺構の検出作業を進めていった。結果、平成27年度に検出した池や、池に繋がる石列などの遺構が発見され、庭園周辺の遺構が良好な状態で残存していることが判明した（図版2-10）。

調査終了後は、前年度同様土嚢による保護を行ったが、次年度に引き続き同地区を調査する予定のため、埋め戻しは実施せずに、耐光性のシートによる保護を行って調査を終了した。

### 平成29年度

平成29（2017）年度の調査は、上之御殿の西側石牆と庭園遺構の検出を目的とし、平成29年8月2日から平成30（2018）年2月28日まで実施した。平成28（2016）年度の調査時に、石牆が想定より東側に存在する可能性が考えられたため、平成28年度調査時に検出した石列の延長線上の南北にトレーナーを設定した。

現場事務所および現場機材の搬入は7月3日にを行い、同日より草刈り作業を実施した。その後、人力による掘削を順次開始し、平成27（2015）・28年度に調査を行った部分までを再検出した。前年度までの調査状況を復元した後に、8月1日よ

り庭園部分と石牆想定部の磁気探査を実施し、未調査部分の人力掘削に着手した。庭園部分は前年度までの調査によりおよその深度が判明していたため人力掘削のみで検出が可能だったが、石牆想定部はどの程度の深さから遺構が検出されるか不明だったため、当初は重機掘削を行わず、人力によって慎重に掘削を進めた。掘削開始より1か月半ほど経過した頃から、石牆の一部と見られる石積みが検出され始め、石積みが真下から積みあがっている状況が確認できた（図版1-5）。

調査終盤には、記録作業として通常の写真撮影のほか、高所作業車による上空からの写真撮影や、オルソ合成した写真を使用した現地測量などを実施した。

石牆の根石も残っているものと思われたが、調査区の掘削深度が2mを超え、崩落する危険があったため、根石部分の調査は安全策を考慮した上で次年度に行うことを決定し、調査を終了した。調査終了後は土嚢及び白砂による保護を行い、次年度に重機で掘り起こせるよう、目印としてブルーシートを被せ、埋め戻した。

#### 令和元年度

令和元（2019）年度は、平成29（2017）年度に検出した石牆の根石および、上之御殿の建物跡に関連する遺構を確認するため、令和元年6月25日から12月4日の期間、トレーナーを2つ設定し、調査を行った。6月25日から現場事務所の設置・現場機材の搬入を行い、発掘調査作業員は7月1日より作業を開始し、7月7日まで調査区周辺の草刈りを実施した。草刈り作業終了後、人力にて平成29年度の埋土を掘削し、遺構検出地点を確認した後に、重機で平成29年度の調査深度まで掘削を行った。重機掘削及び埋め戻しについては、株式会社島田組と「首里城公園発掘調査に伴う重機掘削等業務委託」の契約を締結し実施した。その後人力による掘削で、石牆の根石部分の検出を行った。

調査の結果、石牆に直交して繋がる石積が、根石と同じ高さから検出された（図版1-7）。

石牆付近のトレーナーの掘削と並行して、戦前の航空写真によって上之御殿の建物が位置していた

と考えられる地点にもトレーナーを設定し、7月30日より掘削を行った。庭園や拝所の標高より、地表面より1m内の深度に遺構が残存していると想定し、掘削を行ったところ、戦後に建てられたと見られるコンクリートの基礎が打設されており、大部分が破壊されている状況にあった。この建物は博物館当時も文化課の資料室として使用され、博物館閉館後に撤去されたものであり、その一部が残存したと考えられる。

上之御殿の遺構は大部分が破壊されているものの、一部に当時のものと見られる石敷き遺構と、併設するモルタルの平場を検出した。また、中城御殿以前の按司屋敷のものと考えられる石組遺構も検出している。

掘削終了後は高所作業車による写真撮影を10月23日に行い、その後地表での写真撮影及び実測作業を実施した。実測作業は11月8日まで行い、実測作業の終了した個所から順次土嚢及びブルーシートによる遺構保護を行い、埋め戻しをして調査を終了した（図版2-15・16）。

## 第4節 整理作業の経過

調査報告書の刊行に向け、令和元（2019）年度および令和2（2020）年度に資料整理作業を実施した。現場の雨天時に出土遺物の洗浄作業を行っていたが、すべてを終えることはできなかつたため、資料整理作業は遺物の洗浄から開始した。その後、調査区の層序および遺構関係の整理をした上で、注記作業を行った。注記終了後は、順次接合・図化対象遺物の抜取・図化・トレース・図版作成・写真撮影を行った。現場からは遺構よりサンプリングした土壤サンプルを持ち帰っていたため、そのサンプルの花粉分析・微細物分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。

これら作業と並行して、遺構図・土層図等のトレース後、現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆のち編集後、随意契約により印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行する手順をとった。



1. 磁気探査作業（トレンチ 10）



2. 重機掘削作業（トレンチ 10）



3. 配石 1 検出作業（トレンチ 1）



4. 石牆 1 検出作業（トレンチ 2）



5. 石牆 1 検出作業（トレンチ 4）



6. 石牆 1 検出作業（トレンチ 4）



7. 石積み 3・4 検出作業（トレンチ 5）



8. インターンシップ生による遺構検出作業（トレンチ 6）

図版 1 作業経過写真 1



9. 庭園周辺清掃作業（トレンチ7）



10. 漢字2検出作業（トレンチ8）



11. 石列2検出作業（トレンチ8）



12. 石積み6検出作業（トレンチ10）



13. 方形石組1検出作業（トレンチ12）



14. 遺物洗浄作業



15. 土囊による造構保護作業（トレンチ5）



16. 重機による埋め戻し作業（トレンチ5）

図版2 作業経過写真2

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内（現首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は明治3（1870）年に現在の首里大中町に移転することが決まる。ここでは今回の調査対象となる移転後の環境について記すことにする。

中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯 $26^{\circ}13'15''$ 、東経 $127^{\circ}43'05''$ 、標高約100mの台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町1丁目1番1～3にあたる。

この基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世（180-160万年前～1万年前）に区分される琉球石灰岩で、敷地西側の上之御殿が存在した地区においては、拝所及び庭園でその露頭が確認できる。またその下位には、鮮新世（500万年前～160万年前）から中新世（2,300万年前～500万年前）に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）の面でとめられ、両者の境界から泉として湧き出すことになる。この湧水を利用した井泉・樋川は、現在も首里の各地に点在するほか、中城御殿の古写真においても確認でき、今日も豊富な湧水量を誇っている。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高い形状をなすが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡すことはできない。しかし、上之御殿が建つ西側は石牆で区画され小高くなってしまっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島

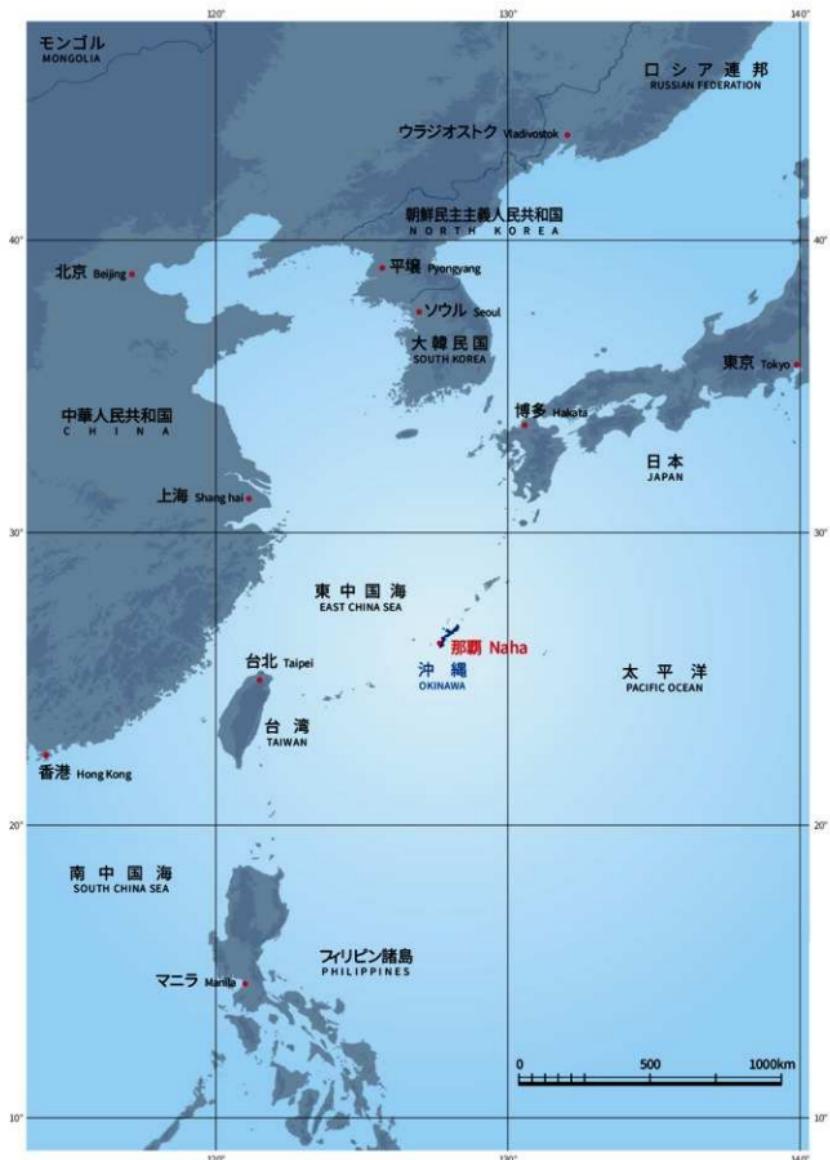
影を望むことができる。

この立地に鑑み、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ岳及びナガーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713年、蔡温はこの立地に鑑み、「恭しく玉陵を觀るに、国都の高處に発祖し、最も好し」（球陽688号球陽研究会編1974）と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ岳は発粗としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせるこにより、国王の安泰を願ったのである（都築昌子2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも藏風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

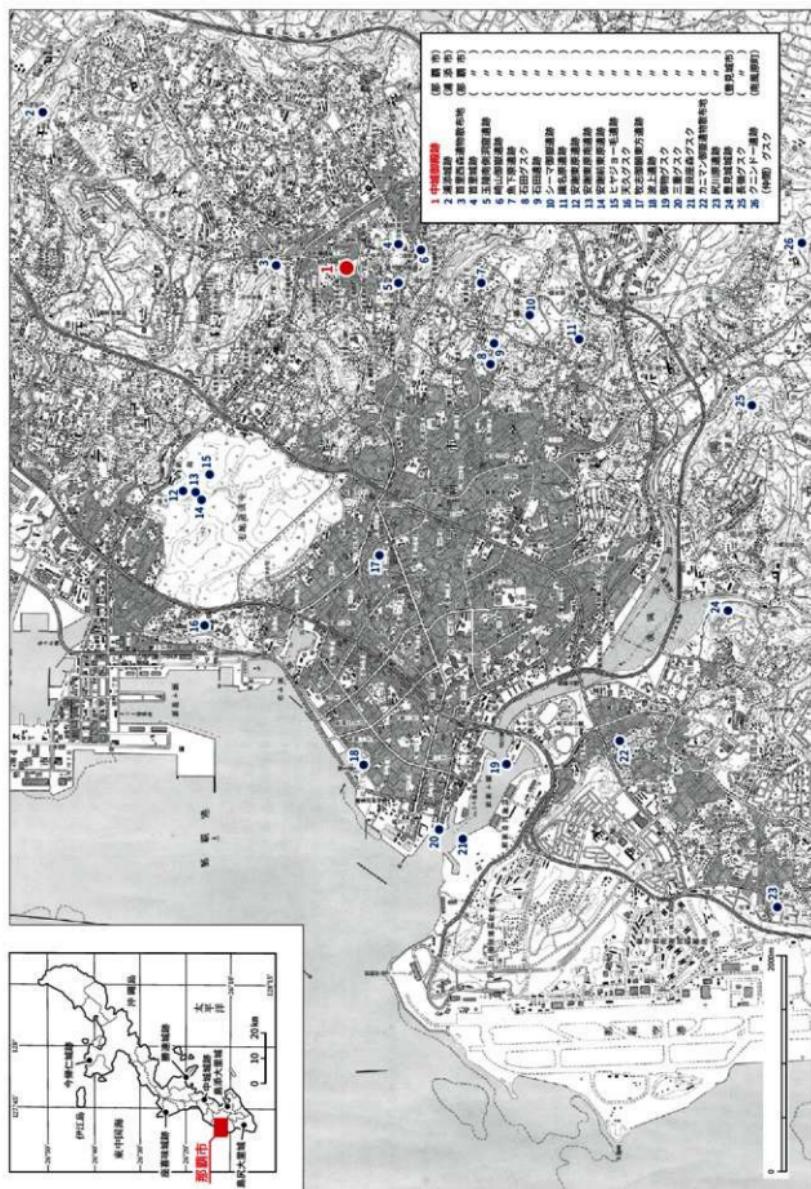
今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、明治元（1868）年に久米村の地理師である与儀親雲上ら3人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされ（球陽2206号球陽研究会編1974）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

### 第2節 歴史的環境

中城御殿は、国王の世子殿として、当初は尚豐王代（在位1621～1640年）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された（第1表）。その後、明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治3（1870）年に着工、明治7（1874）年3月に竣工し、尚典は明治8（1875）年に移転



第1図 沖縄本島の位置図



第2図 中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡

した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

中城御殿の敷地は 3,408 坪 (11,246 m<sup>2</sup>) で、そのエリアは東西に大きく二分することができる。東側は主要な建物が群立する約 2,400 坪の区域で、20 棟以上の建造物が密接して軒を連ねていた。これに対し、西側は約 1,000 坪の区域で、巨木が鬱蒼と茂る中に上之御殿が 1 棟建ち、周辺は自然の岩盤を利用した庭園や、大岩を取り囲むように石造の螺旋階段を設置した拌所のほか、御射場と称される弓場が存在した。

そして、明治 12 (1879) 年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占拠される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時に中城御殿に移り住むことになるが、明治 18 (1885) 年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿所蔵の宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなどの避難措置を執った。しかし、昭和 20 (1945) 年 4 月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難した宝物類は残されていなかったため、建物とともに焼失したか、米軍により戦利品として持ち去られたことが考えられる（その一部は昭和 22 年にフィリピンから、昭和 28 年にアメリカから返還）。その後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる（沖縄県立博物

館 1996）。それまでの間、御殿は尚家の屋敷（尚侯爵邸）として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされる。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するため、琉球政府により買い上げられる。そして昭和 40 (1965) 年から翌年にかけ、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され（図版 4）、昭和 47 (1972) 年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から 20 年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。復元に先立ち平成 3 (1991) 年度、平成 4 (1992) 年度、平成 6 (1994) 年度の 3 次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積み根石や石組遺構、ピット等の遺構を検出し、平成 4 (1992) 年に正面及び東側石牆の復元整備が行われた（沖縄県立博物館 1993、1994、1995）。その後、博物館は開館から 40 年が過ぎ、施設の老朽化及び収蔵機能の低下に伴い新館への移転が計画され、平成 18 (2006) 年 3 月に休館、平成 19 (2007) 年 3 月に閉館・移転し、同年 11 月 3 日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成 21 (2009) 年の解体工事により撤去された。博物館移転後は、平成 19 (2007) 年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るために遺構確認調査が行われ、現在に至る。



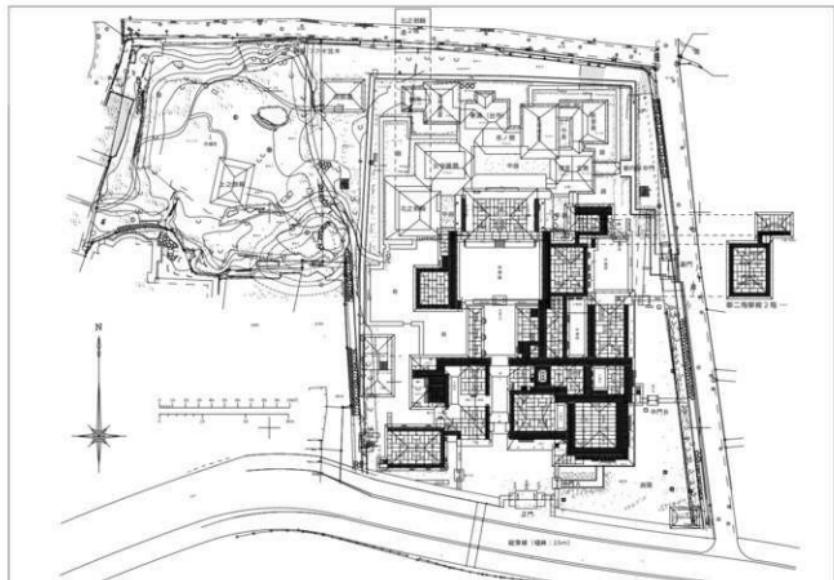
図版 3 中城御殿跡正門付近



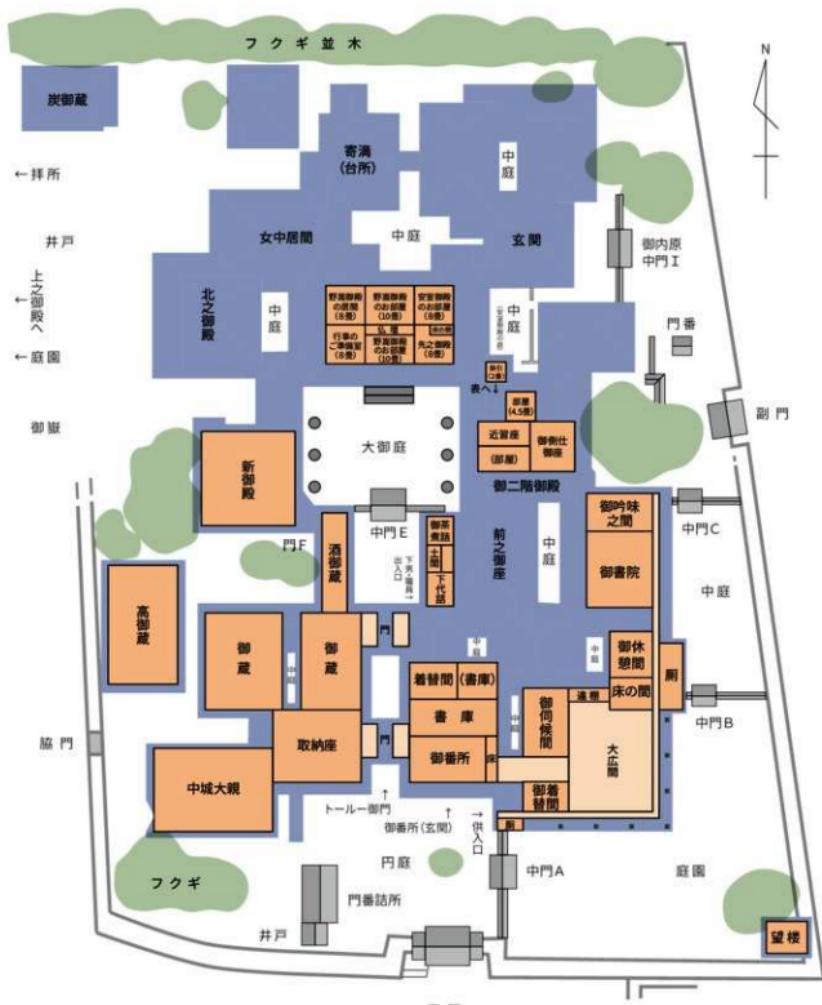
図版 4 建設中の琉球政府立博物館



第3図 中城御殿屋根伏図



第4図 中城御殿間取り復元図1



第5図 中城御殿間取り復元図 2

第1表 中城御殿跡関連年表

西暦	元号	事項
1621～40年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1864年	尚泰17/元治元年	尚典（のちの中城王子）が生まれる
1866年	尚泰19/慶応2年	尚泰王が冊封をうける
1868年	尚泰21/明治元年	尚典が尚泰王の世子となる 久米村の与儀親雲上を福州に派遣して風水を学ばせ中城御殿の風水見を行う
1870年	尚泰23/明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1872年	尚泰25/明治5年	琉球藩設置
1874年	尚泰27/明治7年	中城御殿竣工
1875年	尚泰28/明治8年	中城王子が新築された屋敷に移る 3月 座敷置縣 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
1879年	尚泰32/明治12年	5月 尚泰・尚典ともに上京し東京麹町に屋敷を賜り華族となる
1880年頃	—	尚泰子女の安室御殿が離縁のため中城御殿へ移り住み最後の聞得大君として御殿の神事に奉仕する
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1901年	明治34年	尚泰逝去し玉棟に葬られる
1906年	明治39年	尚典帰郷し中城御殿で暮らす
1917年	大正6年	尚昌の長女 文子が生誕する
1920年	大正9年	尚典57歳で没し玉棟に葬られる 尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住む このころ尚文子が中城御殿を訪れる
1921年	大正10年	東宮殿下（のちの昭和天皇）来訪にあたり事前に大広間が洋間に改装される 3月4日 東宮殿下が米来島し中城御殿を訪問する
1922年	大正11年	尚泰夫人の松川御殿が中城御殿で逝去する
1923年	大正12年	鍾倉芳太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1932年	昭和7年	尚典子女の今輔仁御殿が安室御殿（聞得大君）を継ぐため北之御殿に移る
1933年	昭和8年	尚文子が来訪し新御殿に滞在する
1934年	昭和9年	田邊泰が来訪する 尚典夫人の野嵩御殿が逝去する
1936年	昭和11年	尚昌義姫の津軽照子が来訪する
1937年	昭和12年	尚文子が井伊家に嫁ぐ
1939年	昭和14年	日本民芸協会の柳宗悦・坂本万七らが来訪する
1944年	昭和19年	第32軍司令部參謀の長野英夫少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する 10月10日 米軍による空襲により旧那霸市の9割が焼失する（十・十空襲）
1945年	昭和20年	3月下旬 宝物を3つの大金庫へ移す 4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上する 4月8日頃 火災をのがれた御後駕（肖像画）を御嶽岩のうしろに移す 4月10日頃 日本軍が上之御殿や防空壕などを機関銃陣地にする 戦後 一時引き揚げ者のバーラックが建つ
		1月 首里市役所が中城御殿跡に移転する 7月 首里市宮バスが官営所を同敷地内に設置する（1966年まで）
		首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
		井伊文子が中城御殿跡を訪れる
		琉球政府が敷地を購入する
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵に移転 首里バス（1951年に民営化）が当蔵へ移転する 10月 米国の援助により新敷地に鉄筋コンクリート建の博物館新館を建設する
		龍潭池畔にあった「琉球政府立博物館」が移転し11月に開館する
1972年	昭和47年	5月 日本復興にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	沖縄県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査が実施される
1992年	平成4年	沖縄県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査が実施される
1994年	平成6年	沖縄県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査が実施される
2004年	平成16年	井伊文子逝去し伊は名玉棟に葬られる
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転するため休館する
2007年	平成19年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる構造確認調査が開始される

# 第3章 発掘調査の方法と成果

## 第1節 調査区の設定

平成27（2015）年度から令和元（2019）年度まで、合計12のトレンチを設定し、調査を行った。本報告の調査ではトレンチごとに主体となる遺構がまたがって残存しているため、南側石牆周辺・西側石牆周辺・北側石牆周辺・庭園周辺・拝所周辺・上之御殿建物跡周辺の6地区に分けて報告を行なう。各地区的トレンチ設定は次のとおりである。

### 南側石牆周辺（トレンチ1）

トレンチ1は中城御殿正門の西側石牆の移設工事に伴い、その北側の移設先、石牆の内側に南北約4m、東西約13mで設定した。屋根伏図によると、中城大親の南にあたり、平成4（1992）年度に沖縄県立博物館が実施した調査では、石積みと井戸が検出された地点にあたる。戦前の航空写真では植栽に覆われ、判然としない。

### 西側石牆周辺（トレンチ2～5）

上之御殿の西に位置する場所で、南北に走る石牆の一部が地表に露出する。トレンチ2は、上之御殿の南端側から石牆の西面に沿うように、南北約10m、東西は南端約2.5m、北端約6mの台形状に設定した。戦前の航空写真では木々に覆われていた部分にあたる。

トレンチ2と同年に調査を実施したトレンチ3は、上之御殿の中でも北西の隅付近にあたる部分で、石牆などの境界を確認するために東西約2m、南北約2.5mで設定した。

トレンチ4は、トレンチ2で検出した石牆の北側延長線上に、南北方向約13.5m、東西方向約6.2mの範囲で設定し、延長部の確認を目的とした。県立博物館当時は、文化課整理室のプレハブが位置していた地点にあたる。

トレンチ5は、トレンチ4で検出された石牆の根石部分及び石牆西の遺構残存状況の確認を目的として、石牆上部から西側にかけて、東西約16m、南北約7mで設定した。

### 北側石牆周辺（トレンチ6）

上之御殿の北端に位置する。縁から北は急斜面になっており、北側の石牆が存在していたと想定される地点となっている。縁に沿って東西約12mに渡ってトレンチを設定し、北側石牆の上部遺構の確認を目的として調査を実施した。

### 庭園周辺（トレンチ7～9）

上之御殿の南側に位置する庭園で、現在も池の一部が地表面に露出している。トレンチ7は、池から南の庭園上部の南側傾斜付近までの範囲に、東西約15m、南北約9mで設定し、庭園遺構の検出を目的とした。

トレンチ8は、トレンチ7で検出した庭園池の延長部を確認する目的で、トレンチ7の西側から西側石牆の露出部までの範囲に東西約10m、南北約10mで設定した。

トレンチ9は、庭園の南北ラインでの堆積状況を確認する目的で、トレンチ8の南側に東西約3m、南北約3mの範囲に設定した。

### 拝所周辺（トレンチ10）

トレンチ10は、大岩の拝所に付随していた階段遺構を検出する目的で、岩の周囲に東西約10m、南北約10mで設定した。戦前の航空写真では木々に覆われているが、その中でもひとときわ高くなっている地点にあたる。また、大岩は県立博物館当時も地表に露出していた。

### 上之御殿建物周辺（トレンチ11・12）

トレンチ11は、トレンチ4で検出した石疊の東側延長部を確認する目的で、東西約6m、南北約3mの範囲で設定した。

トレンチ12は、トレンチ11の南側に東西約4m、南北約8mの範囲に設定した。戦前の航空写真や屋根伏図では上之御殿の北にあたる部分で、県立博物館当時は文化課整理室の建物が位置していた。



1. トレンチ 2・3・7・10 (平成 27 年度調査区)



2. トレンチ 4・6 (平成 29 年度調査区)



3. トレンチ 5・トレンチ 12 (令和元年度調査区)

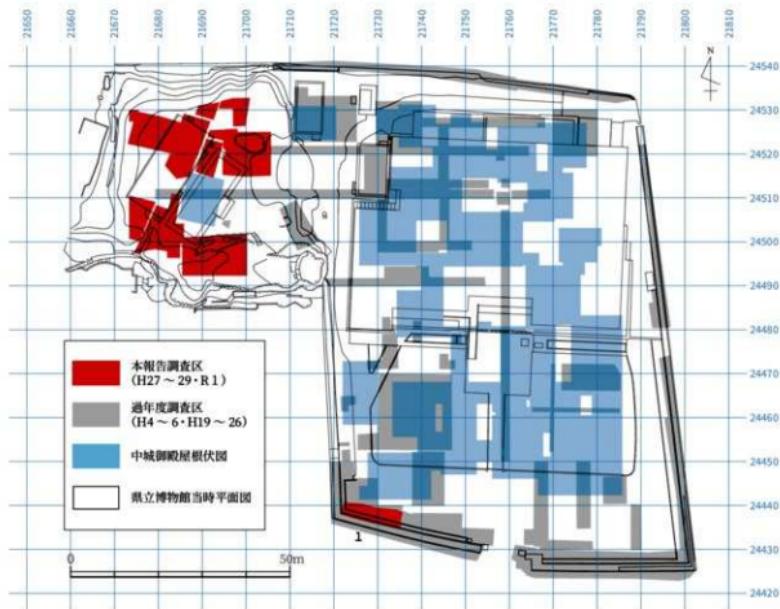


4. トレンチ 8 (平成 28 年度調査区)

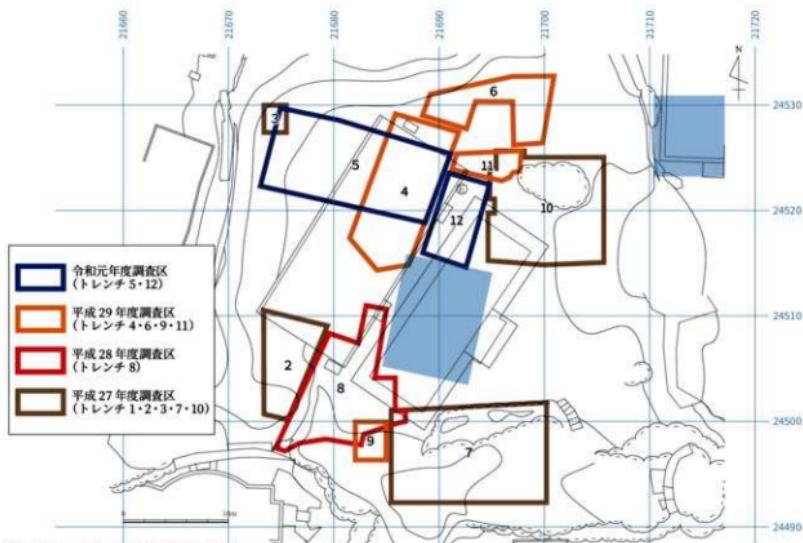


5. トレンチ 1 (平成 27 年度調査区)

図版 5 トレンチ設定状況



第6図 トレンチ設定全体図



第7図 トレンチ設定拡大図

## 第2節 層序

平成27(2015)～29(2017)、令和元(2019)年度調査区の層序は、基本的に平成26(2014)年度調査から設定している層序を踏襲し、基本層序第I層～第V層までを設定している。なお、各層の状況については本文に記すが、一覧は第2表に示した。

**第 I 層：表土、搅乱層。**おもに戦後の開発により搅乱された層や持ち込まれた土砂を指す。県立博物館解体後の造成土にはコンクリート片や鉄筋類を多く含むが、搅乱により混入した中城御殿当時の遺物も含まれる。これらの遺物は、表土除去中に I 層の遺物として回収した。

主な遺物：搅乱層が主体であることから、新旧の遺物が多数混在している。15世紀代の青磁や白磁のほか、17世紀以降の肥前陶磁器などが含まれるが、大半は沖縄産の陶器である。これらの遺物から、本遺跡の変遷を見ることができるとともに、戦災やその後の開発により、大きく改変されたことを窺い知ることが出来る。

**第 II 層：戦中～終戦後の堆積層。**中城御殿の構造上に堆積する層で、中城御殿の瓦をはじめとする遺物が多く含まれる。また、地点によっては戦時中に被弾した穴を周辺の瓦礫や廃棄物で埋めたと思われる痕跡が確認されており、この堆積土も II 層とした。ここからは、終戦直後に使用されたと思われるガラス瓶類、金属製品が大量に出土している。

主な遺物：かつて中城御殿に葺かれた大量の瓦や、戦中～戦後に廃棄されたと思われるガラス瓶類、金属製品が多く含まれる。その中には戦前のある一定期間、全国各地で焼成された統制陶器や軍用食器が含まれている。

**第 II b 層：中城御殿当時の遺構直上に堆積する層。**第II層に含まれるが、本層は被熱した状態で木炭を多く含み、破碎した遺物とともに、遺構表面を覆うように堆積している。この状況から、戦災により破壊された直後に堆積した層であることがわかる。本層は第II層造成時に転圧

され堅く締まっており、その影響で含まれる遺物も破碎した製品が多い。

主な遺物：遺物は被熱して破碎した製品が大半である。明治以降に焼成された肥前や瀬戸美濃産の陶磁器が主体である。蓋付きの碗や小碗・急須類が多く、複数個体が確認されていることから、揃いで存在していたことがわかる。

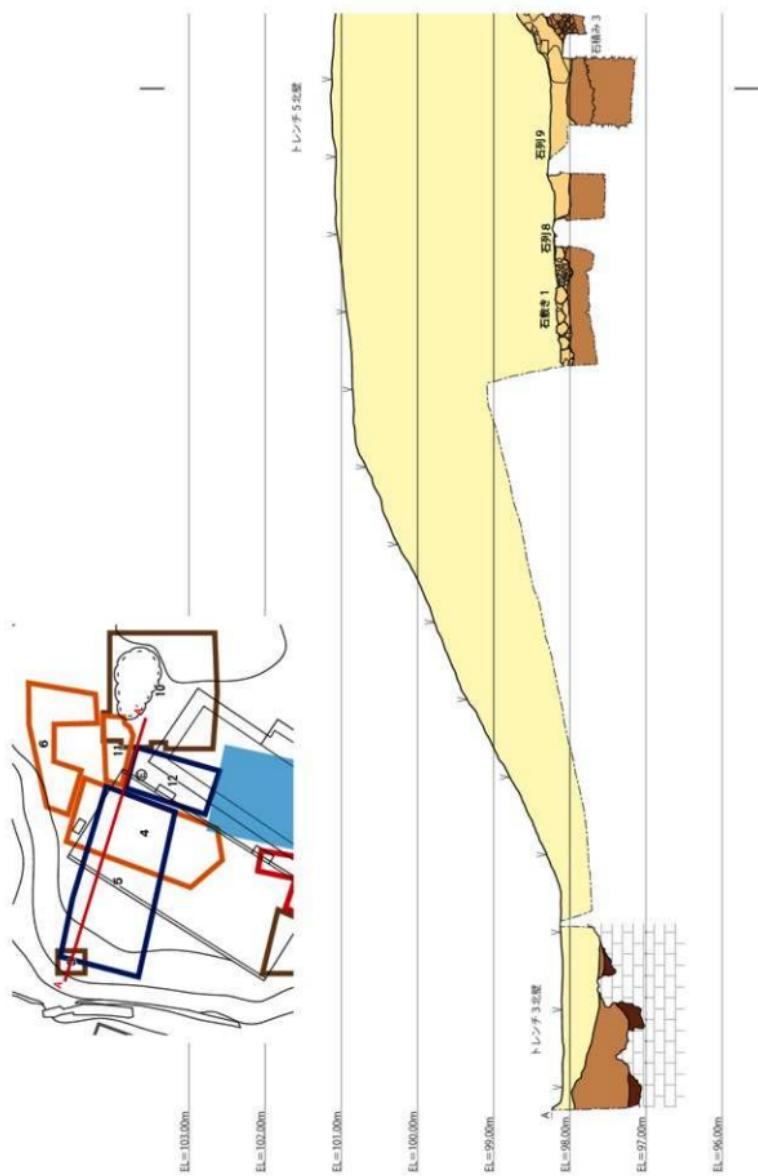
**第 III 層：基本的に中城御殿を造営するために盛土造成した層を指す。**この造成層には、近世以降の陶磁器が多数含まれる。土層は均質でなく、礫などの混入も規則性が見あたらない。また、陶磁器などの遺物も多数含まれることから、周辺の土砂を投入したことが想定できる。土質及び混入物からIII a 層、III b 層、III c 層に三分されるが、大きく時期の変わるものではない。

主な遺物：造成層には近世以降の沖縄産陶器が多く含まれ、その中に中国や肥前産陶磁器がわずかに含まれる。中城御殿造営にあたり客土として持ち込まれた土砂に混入していた遺物であることが考えられる。

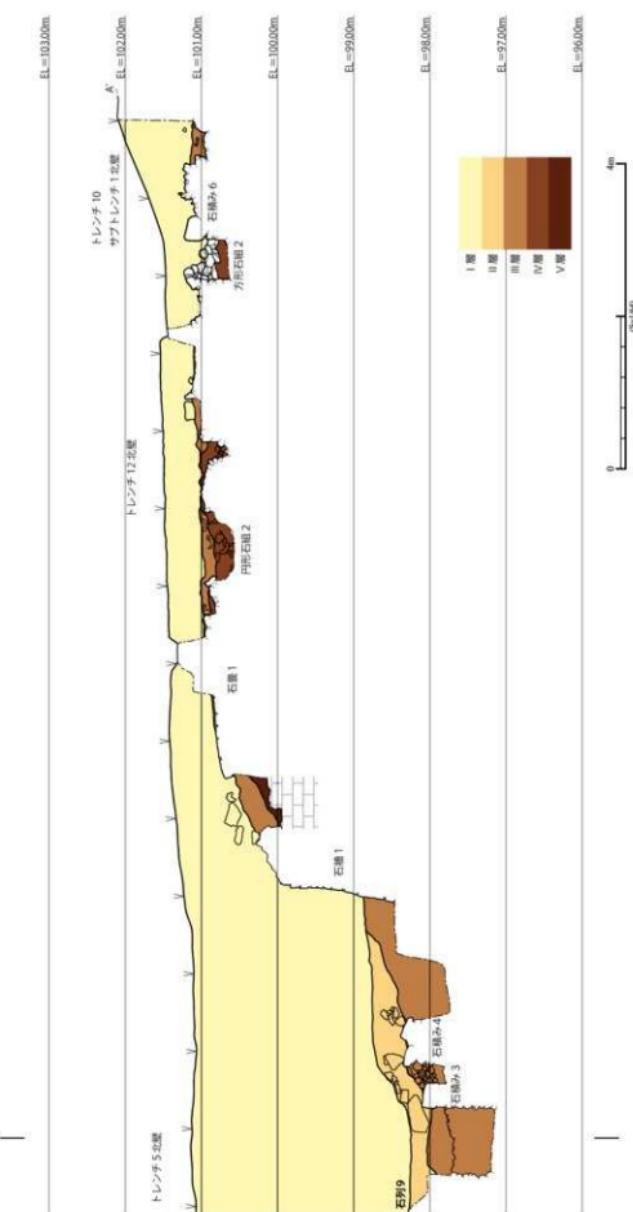
**第 IV 層：中城御殿以前の生活層と考えられる層である。**首里古地図によると中城御殿が当地に移転する前には、数件の士族屋敷が存在していたとされ、本層はこの時期のものと考えられる。遺物は近世以降の陶磁器が主体であるが、それ以前となる中世段階の陶磁器類もわずかながら散見でき、当地の変遷を物語っている。土質などからIV a 層、IV b 層に二分できるが、大きく時期の変わるものではない。

主な遺物：近世以降の沖縄産陶器や薩摩産陶器のほか、陶質土器が多い傾向にある。その中で沖縄産陶器は、胎土に白土を混入する初期沖縄産無釉陶器が多くみられる。その他、中国や肥前産の陶磁器を含み、うち福建など中国南部で焼成された青花が多くみられる。

**第 V 層：平成19(2007)～22(2010)年度調査においては、地山として泥岩(クチャ)及び赤土(マージ)が確認されていたが、今回の調査では黄白色の琉球石灰岩の岩盤が確認されている。**



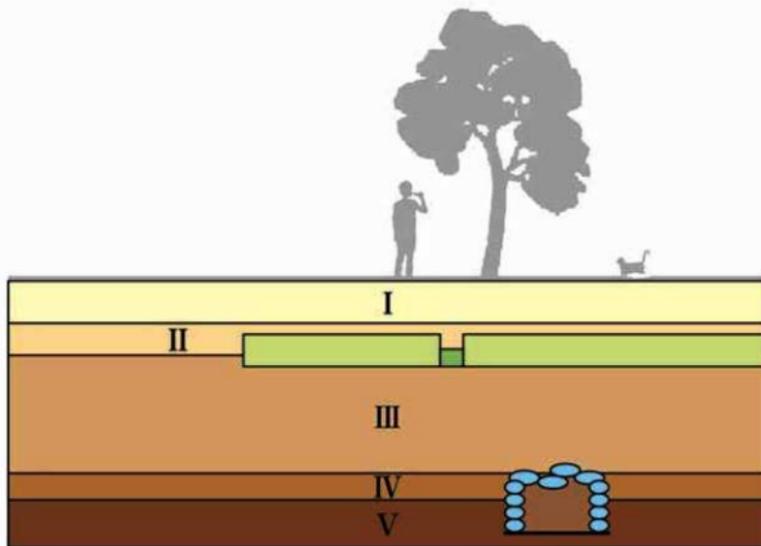
第8図 上之御殿層序概要1



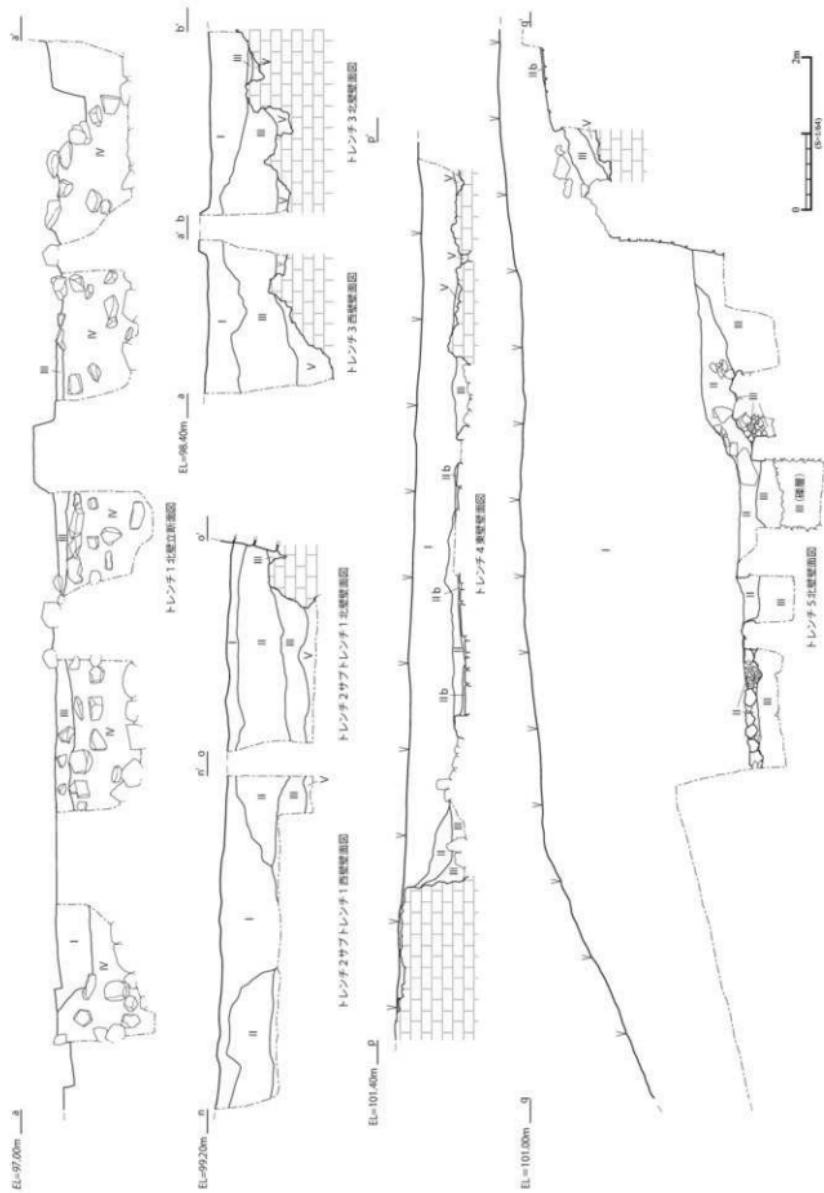
第9図 上之御殿層序概要2

第2表 主要層序一覧

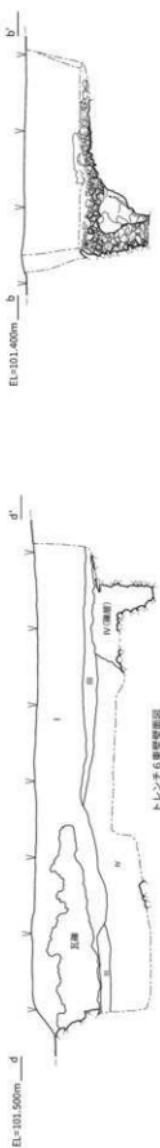
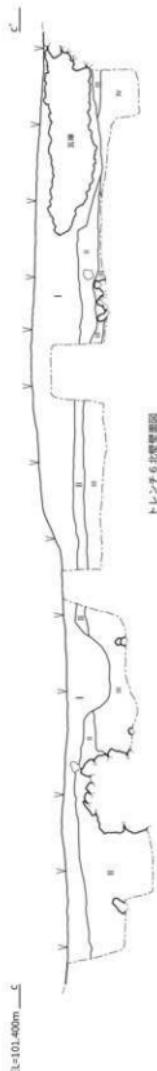
層序	主な色調	年代	層・土質所見
I層	暗褐色	現代	県立博物館やその解体後の造成土で、コンクリート片や鉄筋、埋設管用の砂、石灰岩礫・切石などが多く含まれる。
II層	黒褐色・鈍い黄褐色	沖縄戦中～終戦後	中城御殿の遺構上に堆積。含まれる遺物から、終戦直後に周辺の瓦礫を被弾痕に投棄して整地したものと思われる。
II b層	鈍い褐色・オリーブ褐色	近代～沖縄戦	中城御殿の遺構直上に堆積。焼土や被熱した木炭を多く含む層であることから、沖縄戦により家屋が焼失した際の堆積層と思われる。上之御殿には木々が植栽されていたことから、それらが焼け落ちたものも含まれると考えられる。
III層	暗オリーブ褐色 暗褐色 灰白色	近代	中城御殿築造に係る造成層か、建物改修の際の層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
IV層	暗オリーブ褐色 灰白色	近世～近代	中城御殿以前の造成層か、士族屋敷が存在した頃の文化層と思われる。
V層	白色・黄白色	—	地山、岩盤。敷地北西一帯に分布するとみられる。白色で硬質、黄白色で軟質の石灰岩がみられる。



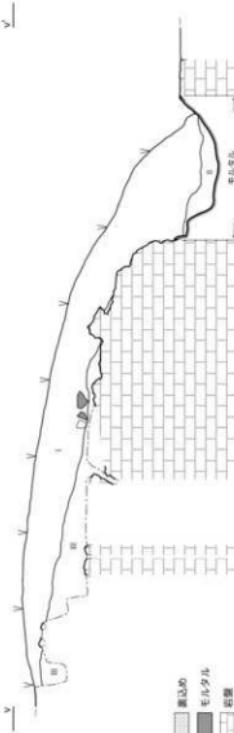
第10図 中城御殿層序模式図



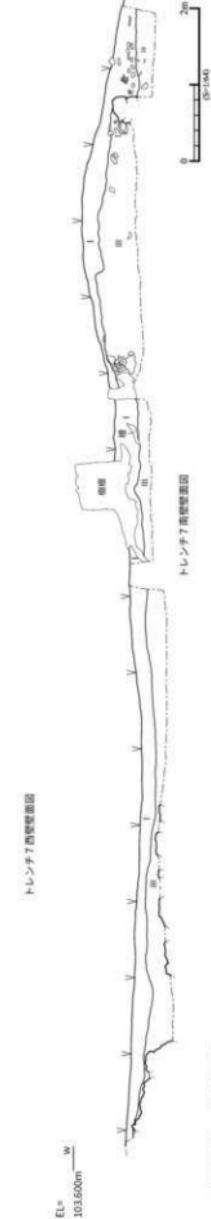
第11図 層序図1



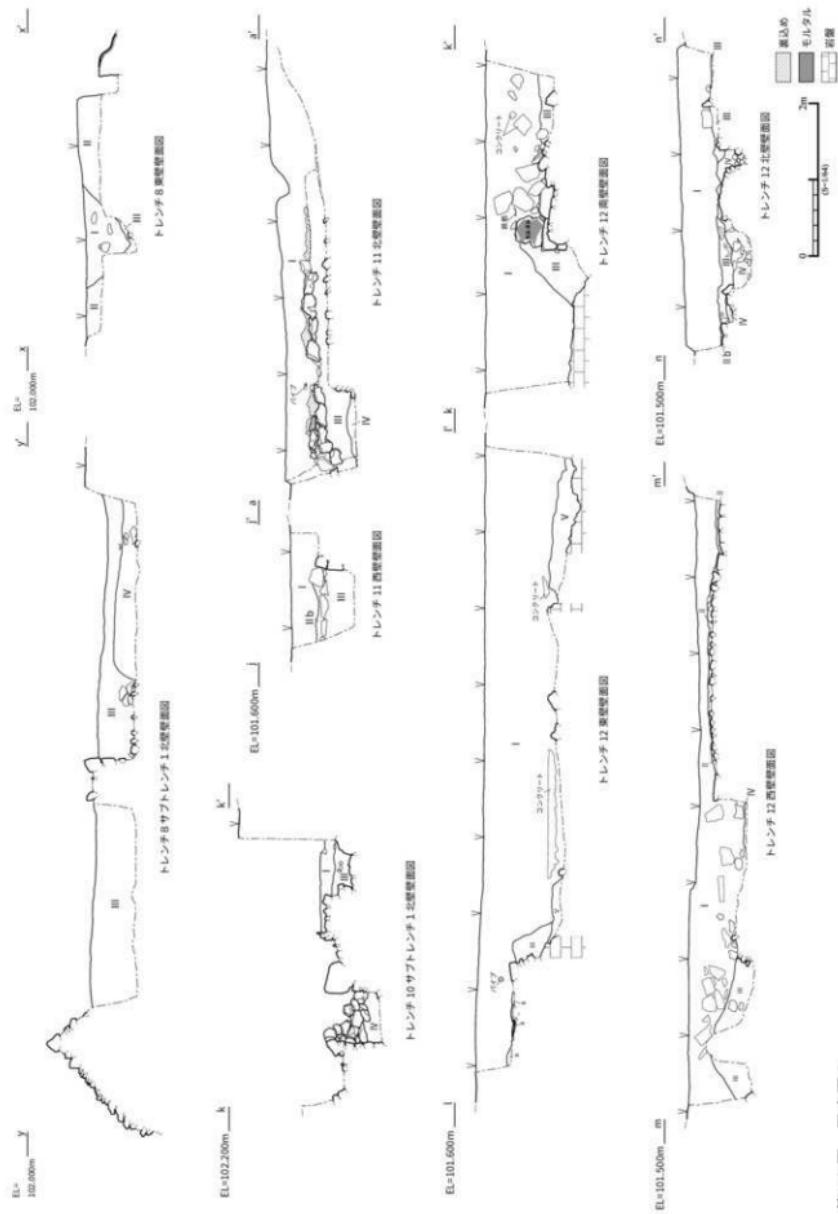
トレンチ6断面図



トレンチ7断面図



第12図 層序図2



第13図 層序図3



1. トレンチ1北壁(南東から)



2. トレンチ2サブトレンチ1西壁(東から)



3. トレンチ2サブトレンチ1北壁(南から)



4. トレンチ3西壁(東から)



5. トレンチ3北壁(南から)



6. トレンチ4東壁(西から)



7. トレンチ5北壁(南西から)1



8. トレンチ5北壁(南から)2

図版6 層序図版1



1. トレンチ6 北壁西側（南から）



2. トレンチ6 北壁東側（南から）



3. トレンチ6 東壁（西から）



4. トレンチ6 南壁（北から）



5. トレンチ7 南壁西側（北から）



6. トレンチ7 南壁東側（北から）



7. トレンチ7 西壁南側（東から）



8. トレンチ7 西壁北側（東から）

図版7 層序図版2



1. トレンチ8 サブトレンチ1北壁(南から)



2. トレンチ10 サブトレンチ1北壁(南から)



3. トレンチ6 西壁(東から)



4. トレンチ6 北壁(南から)



5. トレンチ12 東壁(南西から)



6. トレンチ12 南壁(北から)



7. トレンチ12 西壁(南東から)



8. トレンチ12 北壁(南から)

図版8 層序図版3

## 第3節 遺構

平成27（2015）～29（2017）、令和元（2019）年度の調査では、中城御殿の北西側に位置する上之御殿地区および、御殿南の正門付近の石牆を対象とし、合計12か所にトレントを設けて遺構確認を行った。トレントの設定及び概略は、第3章第1節で示したが、複数のトレントに渡って同一の遺構が検出されているため、ここでは遺構をまとめた地区毎に報告を行い、その解釈にあたっては往事の情報を照合しながら行った。なお、遺構の情報は文章で詳述し、続いて遺構図、写真を掲載した。各地区的遺構は次のとおりである。

### 1 南側石牆周辺

トレント1は屋根伏図および戦前の航空写真によると中城御殿南側石牆の西端付近で、沖縄県立博物館が平成4（1992）年度に行った第1次調査の南A地区および、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成24（2012）年度に行った調査のトレント7付近にあたる。

#### 石積み1

平成24（2012）年度の調査でその一部が検出された遺構で、トレント1より検出した。石牆の移設工事に伴い解体されるため、根石及び全体像の確認のため、再度検出を実施した。同遺構は平成4（1992）年度の調査で検出された4号石垣と同一のもので、屋根伏図によると、中城大親の南に位置する石垣だと見られる。平成4年調査時には、南北両面に面をもち、根石が野面積み、上部が相方積みで構成され、天端までの高さは根石付近から約110cmほどだったと記録されているが、現在は取り壊され、北面の根石のみが残る状況となっている。根石は約40～50cmの琉球石灰岩を使用し、粗加工された面を持つ。

#### 石積み2

トレント1西端より検出した遺構。屋根伏図や戦前の航空写真では、脇門に繋がる西側石牆の南端付近にあたる。トレントの西端だったため、その一部しか検出できていないが、位置関係から沖

縄県立博物館が平成4（1992）年度調査時に検出した2号石垣の延長部と見られる。2号石垣は東西両面に面を持つ石牆の根石であり、今回検出した石積み2も同様のものと考えられる。

石積みは約40～50cmの大の琉球石灰岩を使用しており、東側に面をもち、北側へと延びると考えられる。上部は破壊されており、3段のみ残る。

#### 配石1

石積み1の下層より検出した遺構で、約30cmの大の自然礫を斜面に均等に並べる。方向性を持って並べられており、土留めとしての機能をもつと考えられる。東西8.7m、南北約1.8mの範囲に広がる。

勾配は約47度、斜辺約1.4mの斜面に5段の礫が並べられ、それぞれが南東に延びる列になっている。トレント1の南東端で北東にはほぼ90度曲がり、延長すると想定される。延長先には平成24（2012）年度調査時のトレント7が位置するが、当時の調査時には検出されていないため、より深い位置に残存しているものと考えられる。

配石1と同様のものと考えられる遺構が平成23（2011）年度調査時のトレント7から検出されている。屋根伏図及び戦前航空写真と比較すると中城大親の建物付近にあたる。

### 2 西側石牆周辺

トレント2～5および、トレント8・11・12の一部で検出された遺構を報告する。上之御殿を南北に走る石牆や、石牆下西側では井戸や通路と思われる石敷きなどが検出されている。石牆を境に西側では、表土が約3m堆積している状況が見られ、戦後の造成によるものと考えられる。次に各遺構の報告を行う。

#### 石牆1

上之御殿の南北に走る石積みをトレント2・4・5で確認した。石牆の状況は屋根伏図及び航空写真では直接確認できないが、航空写真と位置を照らし合わせてみると、木々の生い茂っている部分と、その西側の広場と思われる部分との境目にあたる状況が見られる。

石牆は西に面しており、南の庭園側岩盤から北北東へと、若干蛇行しながら約 32 m 続く。20 ~ 30cm 大の粗加工の石灰岩を積むが、南側の根石付近のみ 60 ~ 70cm 大の大きな石灰岩が積まれている。傾斜角はどの面でも約 78 ~ 80 度を示す。

トレンチ 5 にて、石同士の積み方が噛み合っておらず、東側からの土圧により孕んでいる箇所があった。崩落する危険があつたため、写真撮影と図面記録を行った後、取外しを実施した。作業中、石積み内部の裏込めから金属製のスプーンやボールチェーン等、明らかに現代の遺物が出土したため、戦後に積み直されたと見られる。

天端は残っていない部分が多いが、トレンチ 4 の北側および南側では良好な状態で残存している様子が見られる。天端はいずれも標高約 100 m に位置し、ほぼ水平を保ちながら北から南へ続き、破壊によって一度途切れる。トレンチ 2 では再び残存部を確認できるが、天端は消失している。

石積みが南北に走る中で、自然の岩盤を利用している様子も見られる。トレンチ 4 北側では石積みが岩盤に接続するが、この岩盤は石積みの天端より標高が 1 m ほど高くなっている。岩盤が上方から見たときに壁のように平らになるよう垂直に削平されている。垂直面は石積み天端より東に 30cm ほど奥まった所に位置し、天端との隙間に、上面を水平に加工した、厚みのない石が配置される。また、岩盤は北側のトレンチ 6 まで続き、垂直面を維持しながら上之御殿の北端まで続く様子が確認できる。

## 石牆 2

石牆 1 南端地点の岩盤接続部で、石牆 1 から南に約 1 m 離れた地点から石牆 2 を検出した。石牆 1 同様、屋根伏図や航空写真ではその様子を窺い知ることはできないが、現在も境界線外南側の地表面から、高さ約 3 m の壁を確認できる。

石牆 2 は粗加工の 20 ~ 30cm 大の琉球石灰岩で積まれており、北側と南側の 2 面を持つ。天端は破壊されており、南と北の面との幅は約 50cm となっている。上之御殿側にあたる北側の面を掘削したところ、現地表面から約 80cm 深い、標高約 99.6 m で根石を確認した。

## 石列 1

石牆 1 南側の根石に並行する石列。約 10 ~ 20cm 大の自然礫が 1 列に並ぶ。列は根石と約 25cm の幅を保ちながら、南北約 4.5 m の範囲に配置される。南側はトレンチの壁際まで延び、先の延長については不明だが、北側は岩盤に接続した所で途切れる。溝としての機能を持つかは不明。

## 石列 2

石牆 1 に平行する石列で、トレンチ 8 より検出した。庭園池から北北東へ、石牆 1 に平行して延びる。石牆 1 との間隔は約 4.2 m ある。約 20cm 大の琉球石灰岩の切り石を使用している。比較的丁寧な表面の加工により、東側に面が形成される。石列としているが、下層にはもう一段石が積まれておらず、また、上部の列は石が噛み合うように斜めに面を取られていることから、本来は天端を持つ石積みだった可能性が考えられる。

残存部は約 7.2 m で、所々列が途切れる箇所や、鉄筋コンクリートの柱によって破壊されている部分が見られ、戦後の造成や建築物によるものと考えられる。トレンチ 8 北端にて完全に途切れるが、10 m ほど北のトレンチ 12 より同一の遺構と考えられる石列 5 を検出している。

## 石列 3

トレンチ 4 およびトレンチ 11 で確認された石列で、石疊 1 の北側に隣接する。約 20 ~ 30cm 大の琉球石灰岩の切り石を使用している。破壊により大きく崩れ、根石と見られる 1 段しか残っていないが、石列の高さが不揃いなことから、本来はもう何段か積まれる石積みだったと考えられる。

石疊端部からさらに南東の拝所方向へと延びるため、上之御殿内を仕切っていたと見られる。

## 石列 4

石列 3 の南反対側に位置する、石疊を挟む石列。トレンチ 4 およびトレンチ 12 にて検出された。石列 2 同様約 20 ~ 30cm 大の琉球石灰岩を使用し、北東に面をもつ。南東端には礎石と見られる一回り大きな約 30cm 四方の石を角として、石列 5 と直交して接続する。

### 石列5

石列4の接続部を起点として、南西方向に延びる石列。現代の造成によって破壊され、一部が残存する。残存部長は約2.7m。約20～30cm大の琉球石灰岩を使用し、東側に面を持つ。他の石列等より比較的丁寧に面が形成されることや、位置関係から、石列2の延長部である可能性を考えられる。

### 石列6

石畳1から約2.8m東側で検出した、石畳1および石列5に並行する石列。約15～20cmの細長い琉球石灰岩を並べる。西向きに面をもち、南北約1mの範囲に並べられる。裏込めなどは見られない。北端では向きを西側に直角に曲げるが、そこからどのように延びるかは、残存していないため不明。南端は石列7によって切られている。

### 石列7

石列6の南約30cmに位置する。石列6に対して約80°で交差する、東西に走る石列。約20cm大の台形に近い琉球石灰岩を東西約1mの範囲に並べる。面は南向けに作られ、後背は10cm大の自然疊で固められる。一段しか確認できなかつたため石列としているが、石積みであった可能性も考えられる。

### 石畳1

トレント4北側の石牆1の天端より約70cm標高の高い地点で、石牆1に隣接する石畳を検出した。石畳は約20～30cmの琉球石灰岩の切り石を南東から北西方向に並ぶ石列の間幅約2.3mの間に敷き、石牆1に対して直交する。北西側の大部分は破壊され、延長した先については不明である。

この石畳の端と考えられる部分がトレント11・12の北西端からも検出されている。トレント11・12で検出された石畳は、北東から南西方向に直線状に端が揃えられ、地表面の破壊痕が見られないことから、この地点から北西方向へと石畳が伸びていくと想定される。

### 石積み3

トレント5から検出された石積みで、石畳1の西側延長線上に並行する。標高約98mの地点で根石が確認され、岩盤を介して石牆に直交して延びる。約2.7m延びた地点から緩やかなカーブを描いて曲がり、向きを90度変える。そこから北北東へ延びる様子が、トレントの北壁で確認された。石積みは約40～50cm大の琉球石灰岩で積まれ、南西側に面を持つ。石は最大で3段積まれている状況が確認できたが、上部は戦後の造成時に破壊されたと見られ、天端までの高さは不明である。

### 石積み4

石積み3の後方北側約60cmの一回り小さい石積みで、面の部分が石畳の延長線上に位置する。面石は約30～40cm大で、根石を含めて最大2段積まれている。裏込めの小疊などは見られず、粒子の細かい褐色土のみで埋められている。岩盤から延びたのち、約2mの地点で直角に向きを変え、北北東へと延びる。

### 井戸1

トレント2にて琉球石灰岩の石組で作られた円形の井戸を検出した。石牆1から約1.2m西に位置する。検出部の標高は石牆1の根石より約10cm低く、床面の敷石等も見られないため、上部が破壊されたものと考えられる。井戸内部の径は約50cmで、深さは約3mを測る。

内部は約20cmの面を持つ琉球石灰岩を円形に積み上げて作られている。

### 3 北側石牆周辺

トレント6の範囲で、明確な遺構は残されていなかったが、西端には石牆1に接続する岩盤の一部が見られる。岩盤はトレント6でも石牆1接続部と同様に垂直に削平されており、北端では東方向へと曲がる様子を確認できたため、当時の北側石牆のあった地点に近いと考えられる。

また、トレントの南東端では、拝所周囲の造成時のものと考えられる、疊の詰め込まれた層を確認した。

## 4 庭園周辺

トレンチ7・8・9にて調査を行った地区で、上之御殿南側の庭園部分に位置する。地表面に露出していた溜池の延長で、地下に埋もれていた部分や、庭園内の高い標高に位置する石積みなどの、庭園の中城御殿当時の情景を構成する遺構を検出した。

### 溜池1

東西幅約10.6m、南北幅約1.5mの細長い池。溜池1は地表面に露出していた。調査によって検出された遺構ではないが、後述の溜池2との関連があるため、溜池1として報告する。琉球石灰岩の岩盤を削り、床面をモルタルで塗り固めることで、溜池として機能していたと見られる。池北側の淵から底までの深さは約20cmで浅い。西端には排水用の溝が彫られており、溜池2に接続する。

### 溜池2

溜池1の西端と接続する池で、トレンチ7・8にて検出した。溜池1より緑石の標高が若干低く、内部は埋土で埋まっていた。埋土は上層が戦後の造成によるもので、戦後に残った瓦礫を埋めたと考えられる。床面付近には、中城御殿当時の砂泥とみられる黒色土が堆積していたため、サンプルとして回収した。

池の構造は、南側は琉球石灰岩の岩盤を掘り込み、北側では石灰岩礫を敷くことで底部が構成されている。周囲には大きな礫を緑石として配置し、底面から緑石までの内部をモルタルで塗り固めている。

### 石積み5

幅約3.8mの石積みで、トレンチ7の南西端より検出した。面は北北西に向いており、約30～40cmの大の琉球石灰岩の切石を緻密に組み上げている。東西端がそれぞれ角になっており、そこから直角に曲がり、南南東へと延びる様子が見られた。延長先の地表面には、石積みの延長部と見られる石の頭が露出しているため、全体像は方形状になると考えられる。

## 庭園基盤

池より南側の一帯は、水平に削岩された琉球石灰岩の岩盤が広がる。大広間南東の庭園をした古写真には、なだらかな小山を作り、その上に芝や松、ソテツなどを植栽している様子が写しだされており、上之御殿南側の庭園跡も近似した様相を呈していたと考えられる。

## 5 拝所周辺

トレンチ10として調査を行った地区で、屋根伏図や戦前の航空写真によると、大岩の拝所が位置していた地点である。拝所に関しては古写真が何点か見つかっており、岩の周囲に石積みと階段が作られていた当時の拝所の様子が伺える。

また、石積みや階段などは取り壊されてしまっているものの、大岩は現在も地表面に露出しており、岩を削って作られた階段の痕跡等を見ることが出来る。

### 石積み6

大岩を取り囲むように積み上げられる石積み。古写真では岩の上部まで石積みに取り囲まれていた様子が見えるが、戦後の破壊により、現在は根石および上段の2段のみが残る。約50～60cmの大の大きな琉球石灰岩を楕円形に積み上げ、岩の周囲に向かって面をもつ。後背は約10～20cmの大の自然礫が裏込めとして積み込まれており、階段を支える土台としての役割を持っていたと考えられる。東側では根石が取り外され、ほら穴状に掘り込まれていた。穴は調査開始時にはI層およびII層の土砂や瓦礫で埋まっていたが、掘削を続けると、根石の下層約80cmの深さまで達した。何らかの理由で穴が掘られ、戦後に埋まったと想定できる。

### 石積み7

石積み6から分岐し、岩の根本に沿うように並ぶ石積みが確認された。現在、岩は下部がノッチのように抉れており、古写真等と比較すると、石積み7は階段横の岩盤の隙間に埋めるためものであった可能性が考えられる。

## 6 上之御殿建物周辺

トレンチ 12 にて調査を行った地区で、屋根伏図及び戦前の航空写真によると、上之御殿建物の北端に位置する。戦時中の破壊や、戦後の造成による影響で、遺構の残存状況はあまり良くない。

### 方形石組 1

トレンチ 12 にて検出した石組遺構。屋根伏図によると上之御殿の建物の北隣にある。四方を約 20 ~ 30cm 大の琉球石灰岩の石積みで囲み、内部は南北約 70cm、東西約 60cm の範囲に、石疊状に加工された切石を配置して埋めている。

方形石組 1 の東隣には、モルタルで塗り固められた床が接続する。モルタルの床面は石組の床面より約 20cm 高くに位置しており、石組との接続部に穴が開けられている。

## 7 その他遺構

その他遺構として、中城御殿以前や、戦後以降に作られたと考えられる遺構を挙げる。

### 円形石組 1

トレンチ 12 中央部より検出された遺構で、幅約 1.2 m の楕円形に琉球石灰岩を積んで構成される。石積は内面に面が作られ、石積みによって囲まれた内部は、石を敷き、その上に漆喰のような赤土を塗布している。

### 円形石組 2

トレンチ 12 北側より検出した。幅約 80cm で、円形石組 1 同様、楕円形に石を積む。底には円形石組 1 同様赤土が塗布されており、石組み内部には、廃棄したと見られる陶磁器や夜光貝などが含まれていた。

### 石敷き 1

トレンチ 5 より検出した石敷き遺構。約 10 ~ 30cm の不定形な石を、平らな面を上面にしてまばらに配置する。II 層上に構築されている状況だったため、戦後に作られたと考えられる。

### 石列 8

石敷き 1 に隣接する石列。約 20 ~ 40cm の不揃いな大きさの琉球石灰岩を、東側に面に向けて配置する。石列 9 と並行しており、溝のような配置になっているが、底石や溝内の堆積土などは確認されなかった。II 層上に構築されており、石のサイズや形状から、戦時に破壊され、周囲に散らばっていた石積み 3・4 の石材を流用して作られたと見られる。

### 石列 9

石列 8 同様石積み 3・4 の石材を流用して作られたと考えられる石列。II 層上に構築されるため、戦後のものと考えられる。石列の背後には裏込めや掘方などの、構築時の痕跡は見られなかつた。

### 方形石組 2

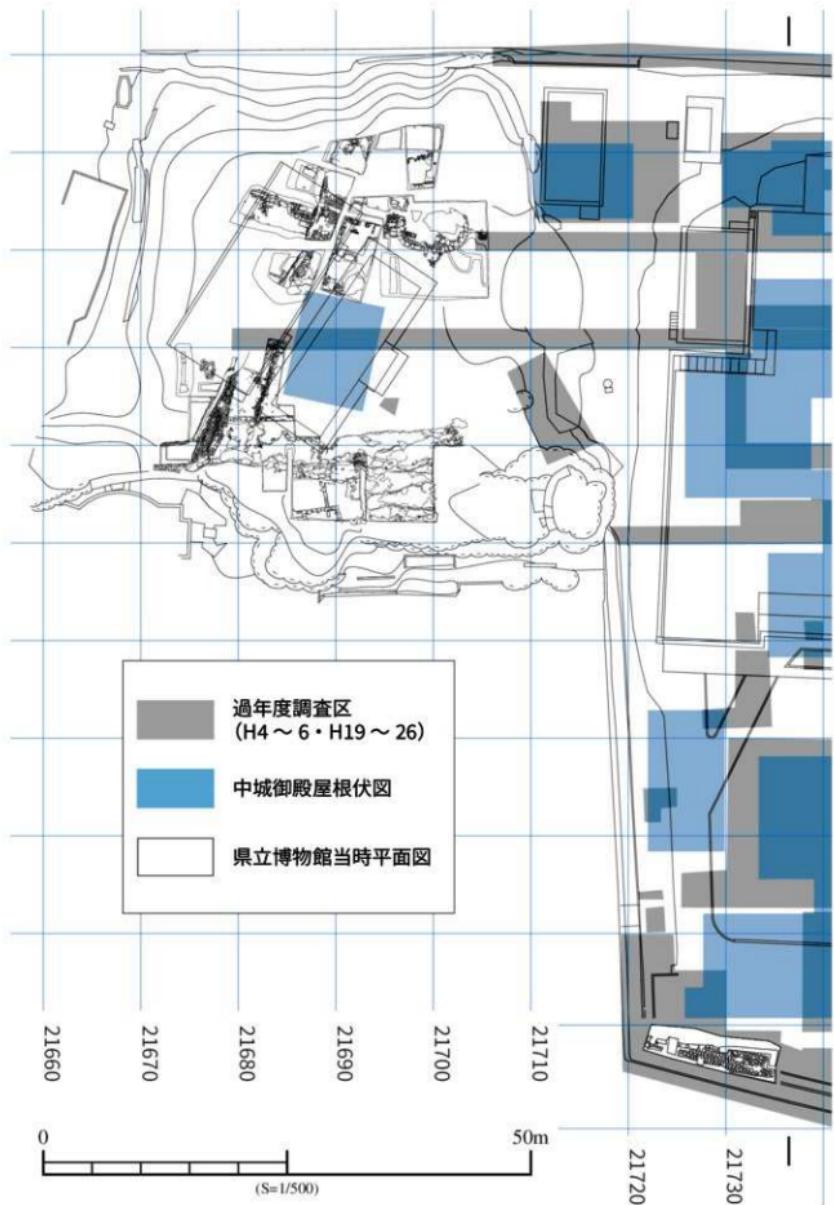
石積み 7 西側の下層に位置する石組。約 80cm 四方に琉球石灰岩の切石を積んで囲む。約 20cm 大の石灰岩を使用し、粗加工の面を内部に向けてもつ。南側は方形石組 3 によって切られ、内壁はほとんど残っていない。東側は石積み 6 によって切られており、残存部の深さも約 30cm ほどのため、中城御殿以前の時期のシーリングが階段を作る際に壊されたものと考えられる。

### 方形石組 3

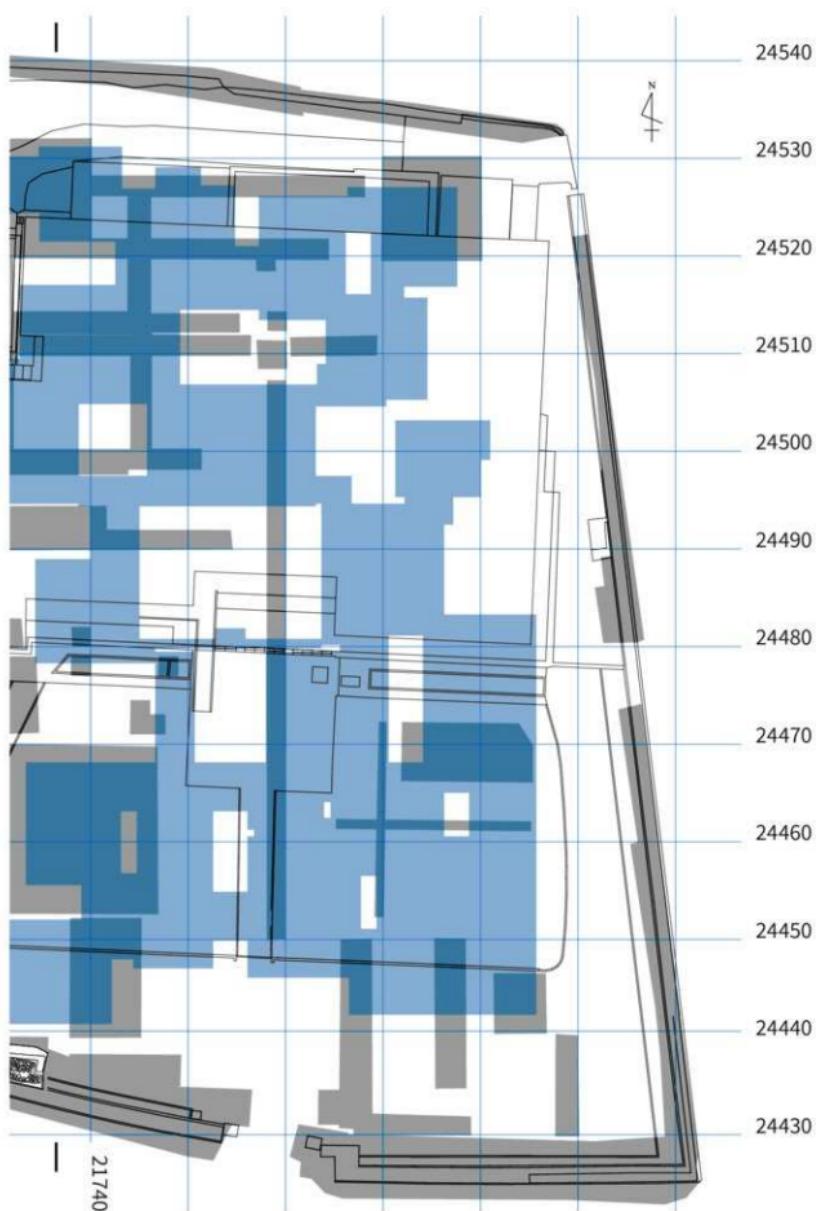
方形石組 2 の南に隣接する石組。約 60cm 四方を石灰岩で囲む遺構で、方形石組 2 と共に石積み 6 によって切られる。こちらも方形石組 2 と同様の遺構と考えられる。

### 方形石組 4

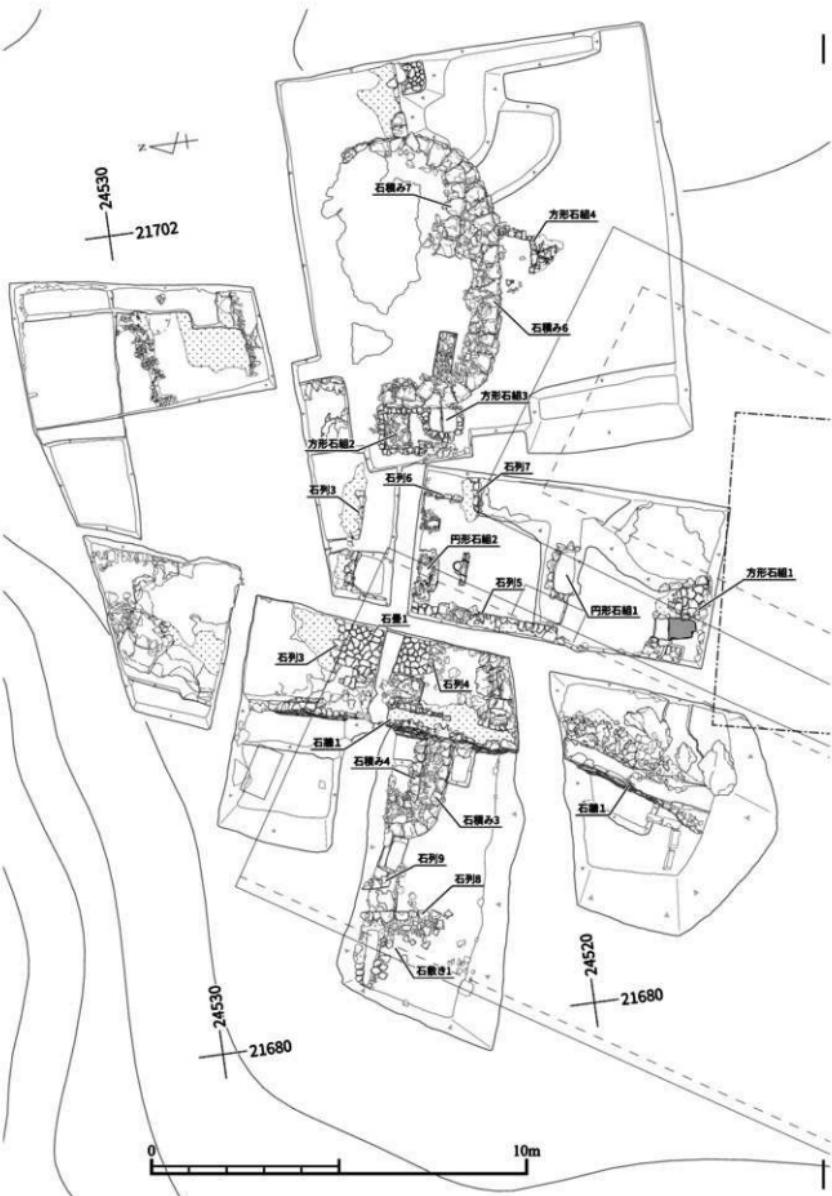
石積み 6 南側の下層に位置する石組。方形石組 2・3 同様、石積み 6 によって切られており、中城御殿以前の遺構と考えられるが、底と見られる 1 段が残るのみで、詳細な状況については不明。



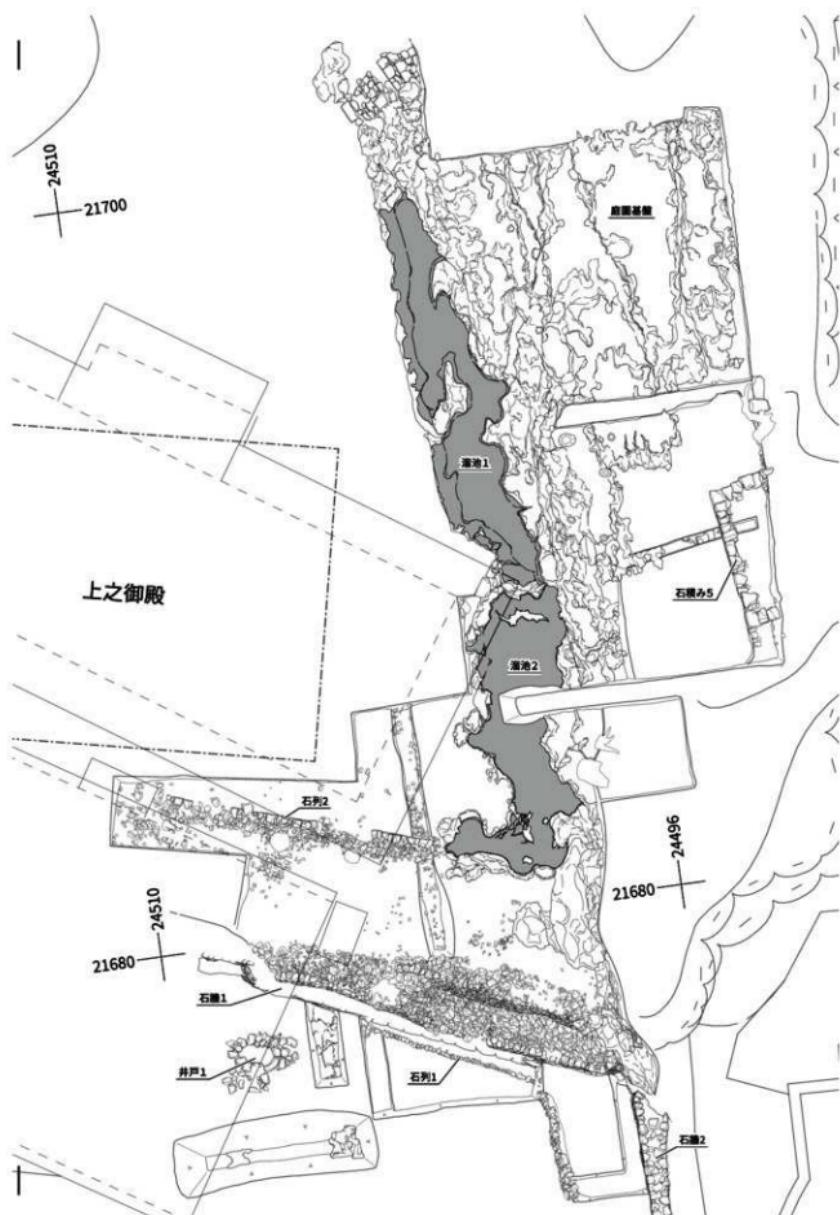
第14図 中城御殿全体図 1



第14図 中城御殿全体図2



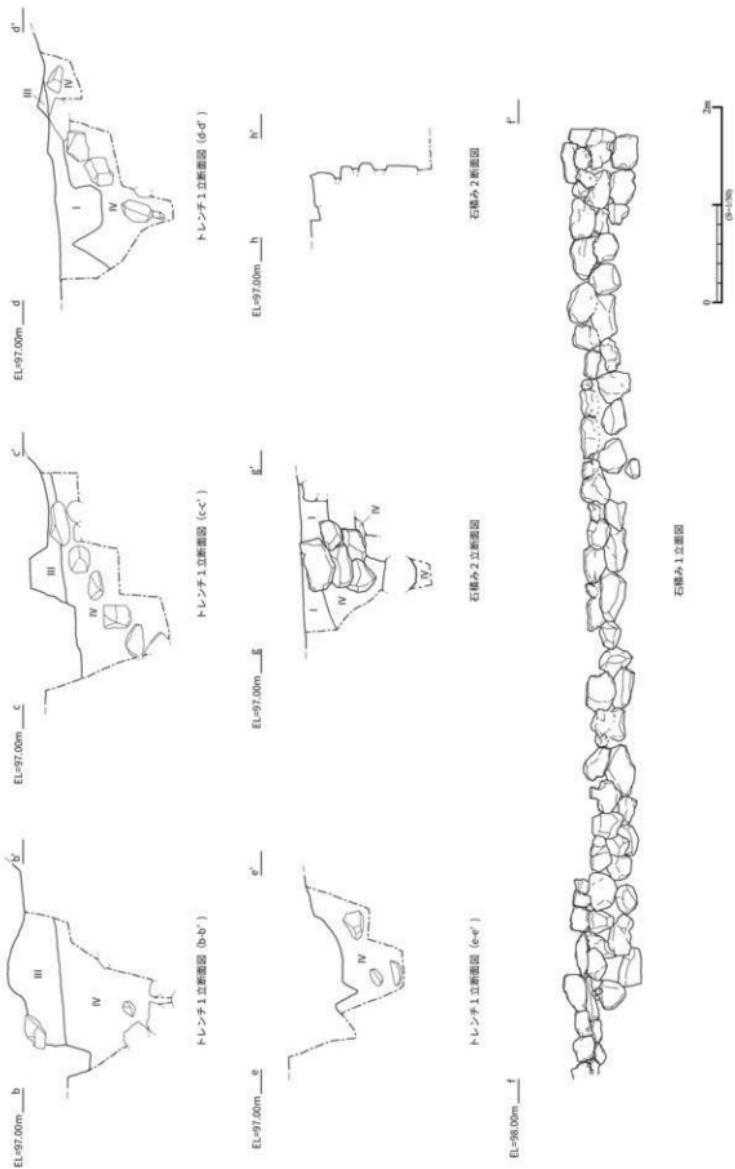
第15図 調査区全体図 1



第15図 調査区全体図 2



第16図 南側石牆周辺平面図

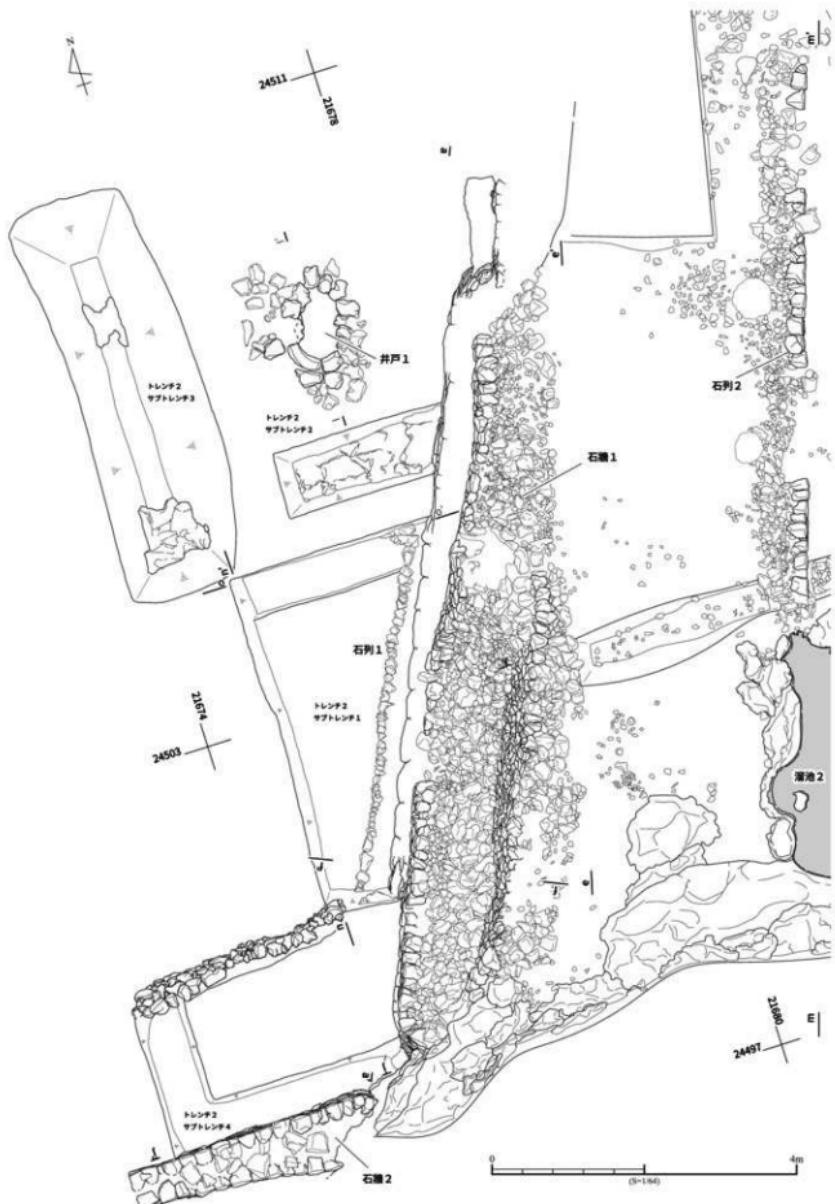


第17図 南側石牆周辺立面・立断面・断面図

※a-a' の壁面図は、「第2節 層序」に掲載した



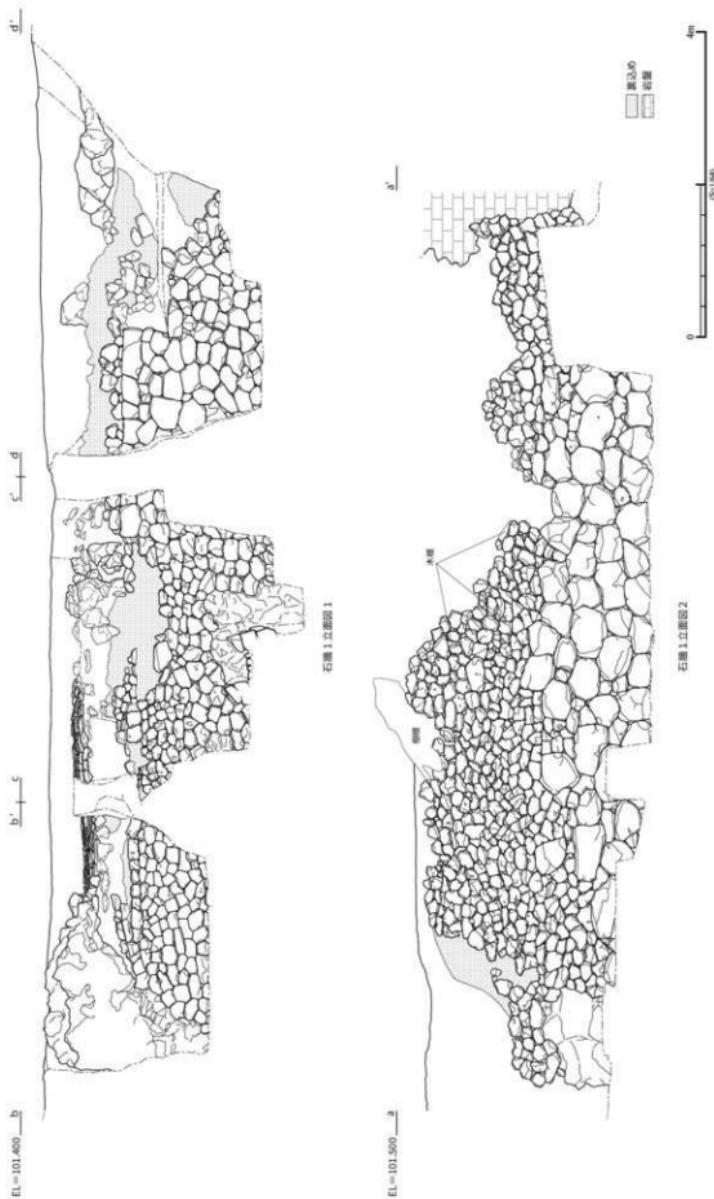
図版 9 南側石牆周辺遺構



第18図 西側石牆周辺平面図1



第19図 西側石牆周辺平面図2



第20図 西側石牆周辺立面図



第21図 西側石塀周辺立断面・断面図



1. 石牆1（トレンチ2、西から）



2. 石牆1（トレンチ4北端、西から）



3. 石牆1（トレンチ4南端、西から）



4. 石牆1（トレンチ5、西から）

図版 10 西側石牆周辺遺構 1



1. 石牆1周辺遺構2（トレンチ8上空東から、写真上：石牆1、左下：溜池2、右下：石列2）



2. 石牆1周辺遺構2（トレンチ5上空東から、写真上：石牆1）



3. 石牆2（トレンチ2、東から）



4. 石列1（トレンチ2、北西から）

図版 11 西側石牆周辺遺構2



1. 石塀1周辺遺構3（トレンチ5上空から）



2. 石積み3・4（トレンチ5、南西から）



3. 石壠1（トレンチ5、南から）

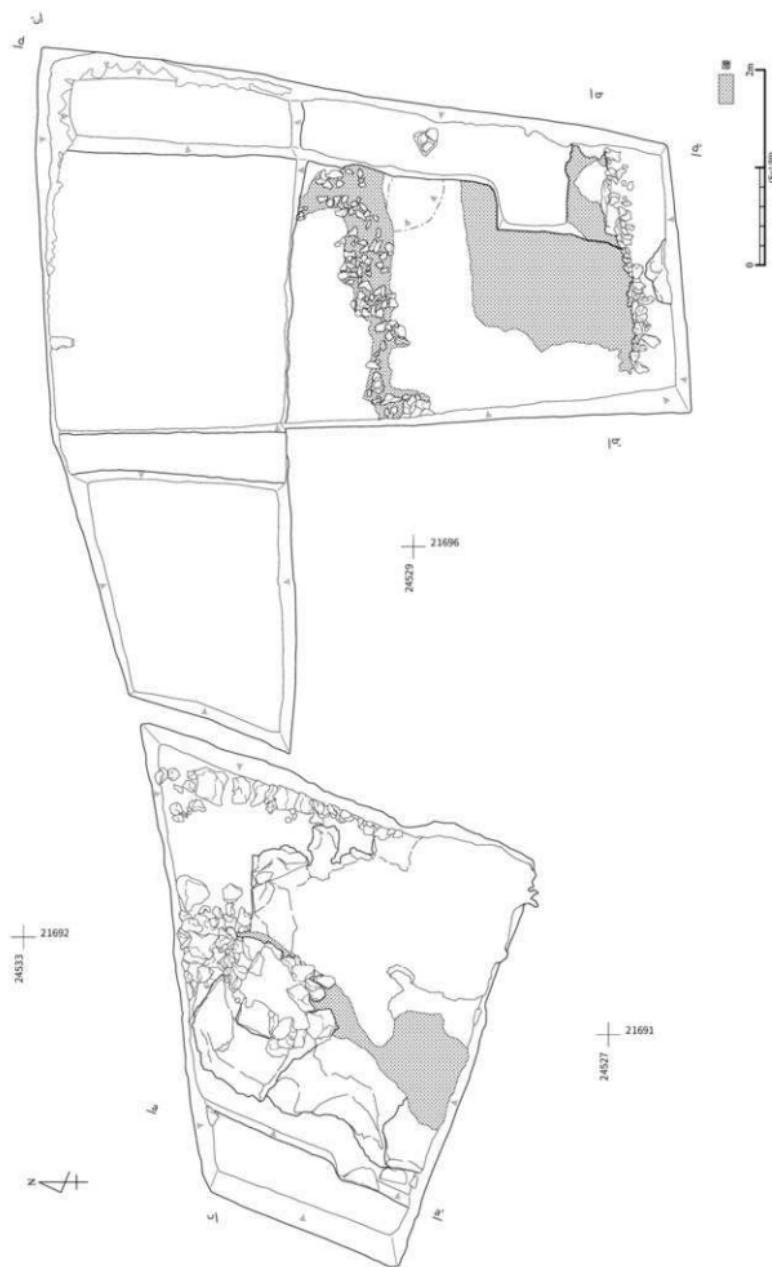


4. 石列3（トレンチ11、写真左は石壠1端部、南から）

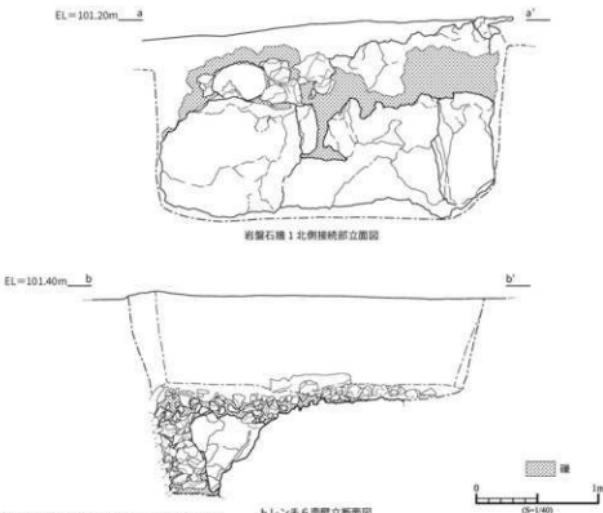


5. 井戸1（トレンチ2、東から）

図版12 西側石牆周辺遺構3



第22図 北側石牆周辺平面図



第23図 北側石牆周辺立面・立断面図



1. トレンチ 6 岩盤石牆 1 北側接続部 (西から)

2. トレンチ 6 岩盤石牆 1 北側接続部 (南から)

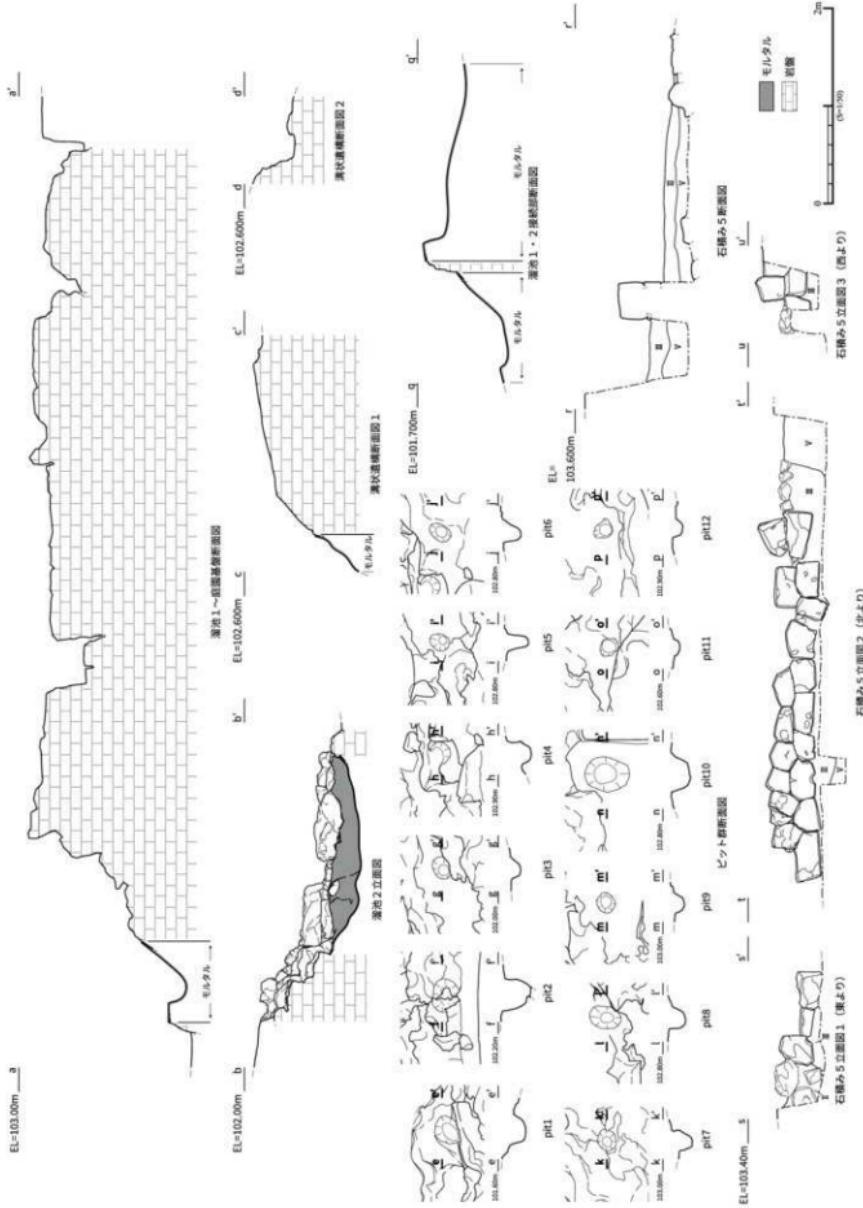
3. トレンチ 6 南壁壁面 (北から)

4. トレンチ 6 南壁壁面 (西から)

図版 13 北側石牆周辺遺構



第24図 庭園周辺平面図



第25図 庭園周辺立面・断面図



1. 庭園（トレンチ 7 上空北から）



2. 庭園（トレンチ 7、北東から）



3. 潜池 2（トレンチ 8、北から）



4. 潜池 2 モルタル湾曲部（トレンチ 8、南から）



5. 潜池 2 モルタル破損部断面（トレンチ 8、北から）

図版 14 庭園周辺遺構 1



1. 庭園基盤（トレンチ7、北から）



2. 石積み5（トレンチ7、西から）



3. 石積み5（トレンチ7、東から）

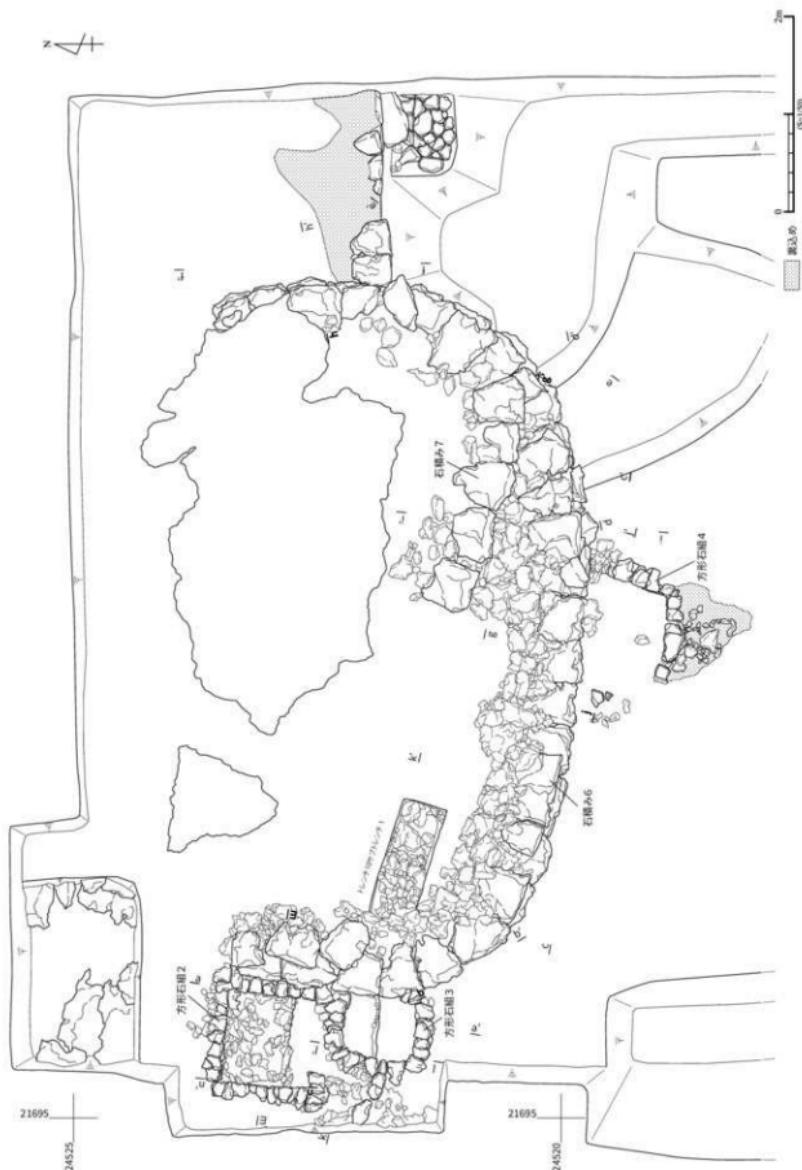


4. ピット群（トレンチ7、pit 7~10、東から）

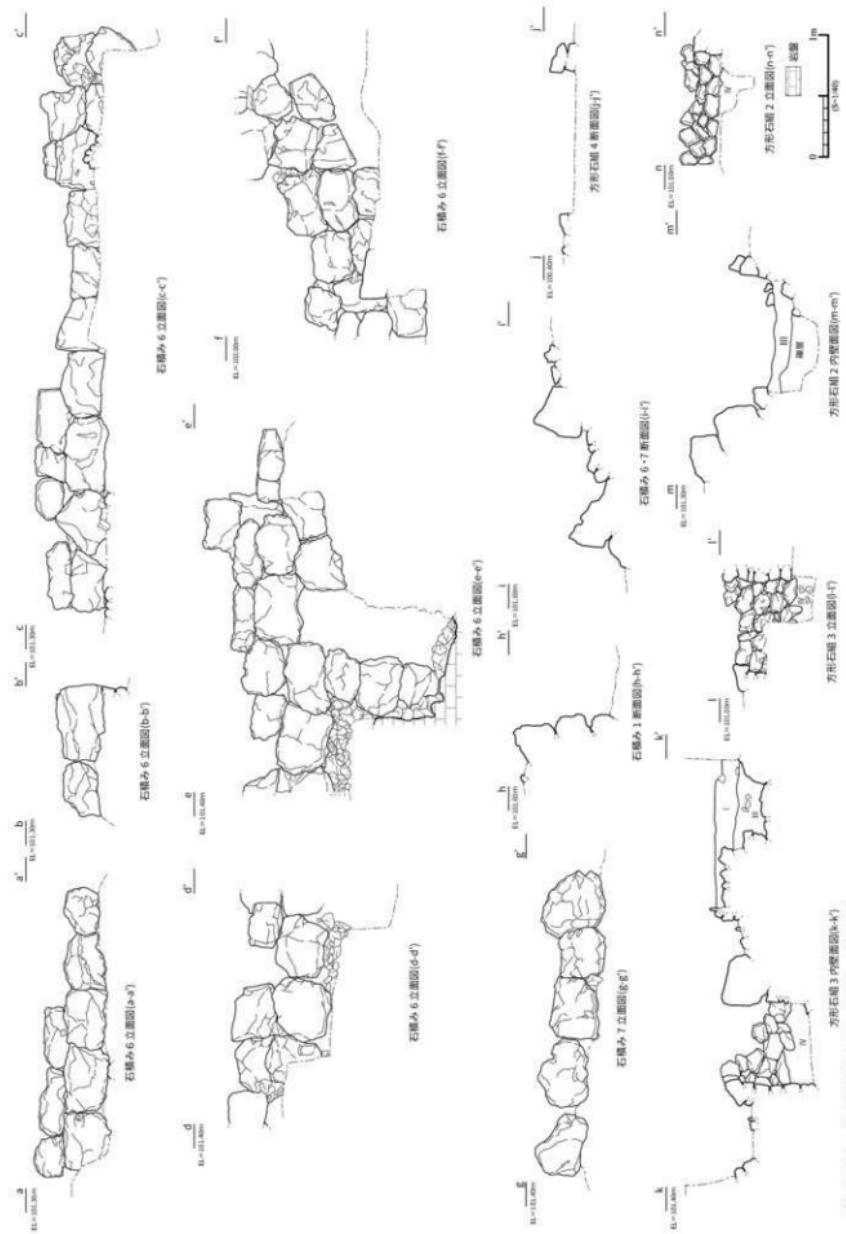


5. 漏池1・2接続部（トレンチ7、北から）

図版 15 庭園周辺遺構 2



第26図 拝所周辺平面図



第27図 拝所周辺立面・断面・壁面図



1. 拝所周辺遺構（南東から）

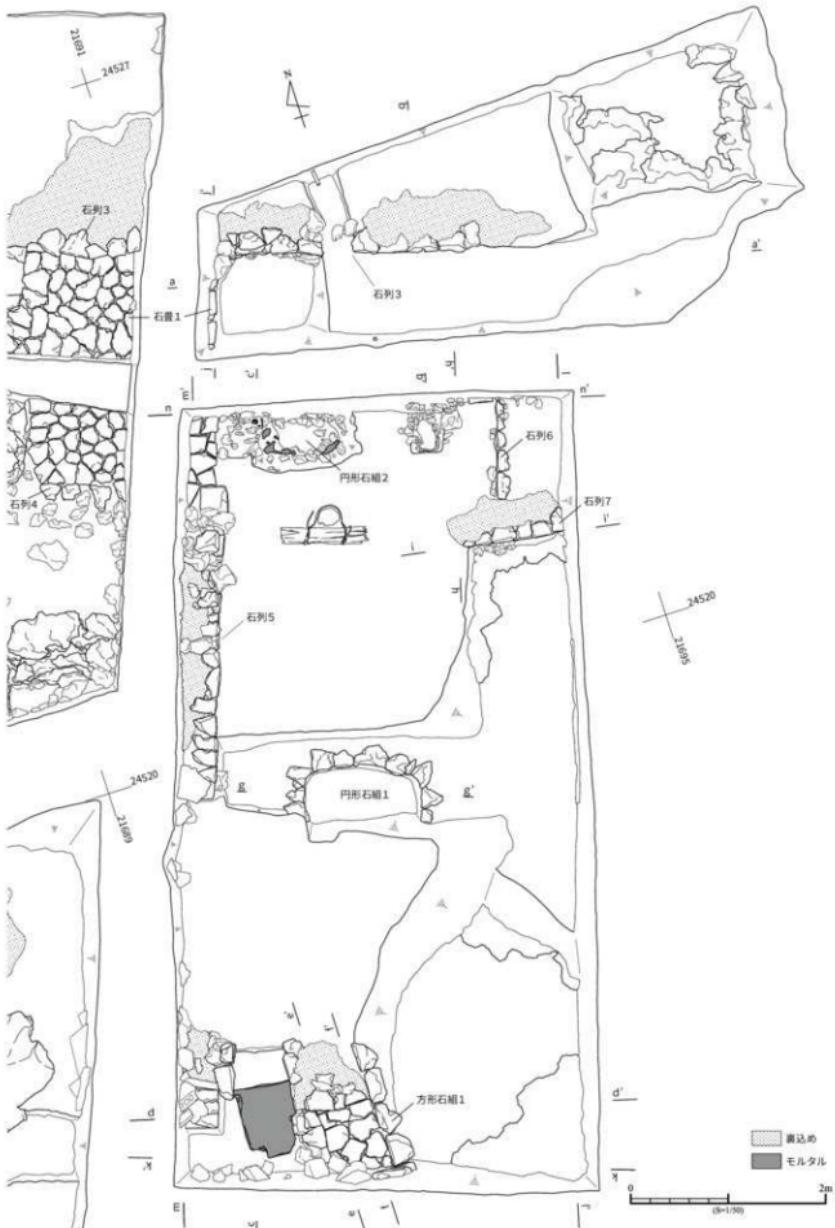


2. 拝所周辺遺構（上空南から）

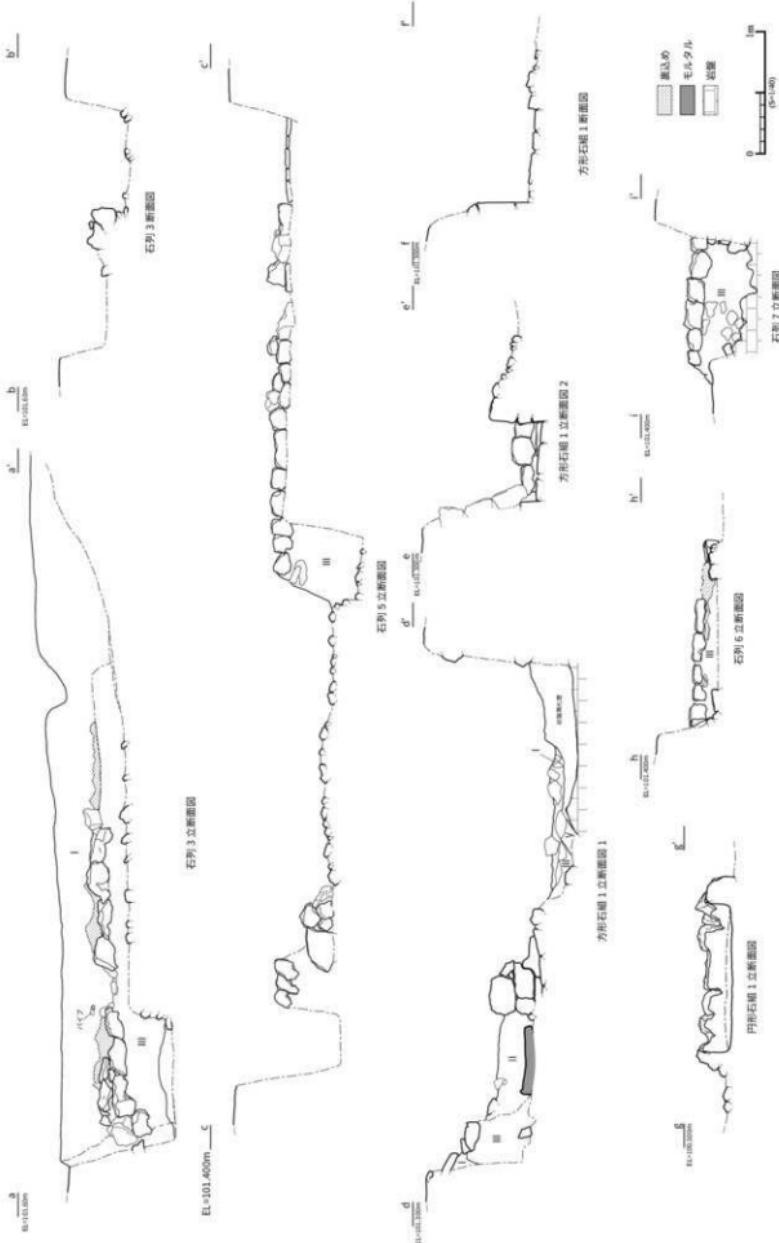
図版 16 拝所周辺遺構 1



図版 17 拝所周辺遺構 2



第28図 上之御殿建物周辺平面図



第29圖 上之御殿建物周邊立斷面・断面図



1. 上之御殿周辺遺構（トレンチ 12、上空西から）



2. 方形石組 1（北から）



3. 方形石組 1（南から）



4. 方形石組 1（東から）



5. 方形石組 1 モルタル施工部（北から）

図版 18 上之御殿周辺遺構 1



1. 上之御殿周辺遺構（トレンチ 12、上空北東から）



2. 石列 6（トレンチ 12、西から）



3. 石列 7（トレンチ 12、南から）



4. 円形石組 1（トレンチ 12、北から）



5. 円形石組 2（トレンチ 12、南から）

図版 19 上之御殿周辺遺構 2

## 第4節 遺物

平成 27（2015）～29（2017）年度、令和元（2019）年度調査の人工遺物は総計で 46,344 点である。遺物の種類としては、中国・タイなどの外国産各陶磁器、本土産の各陶磁器、沖縄産陶器、瓦、埴、石・金属などの製品が出土している。

当節では、遺物の種別ごとに報告を行い、遺構出土や状態が良好な遺物を図化対象とした。図化対象外の人工遺物でも、当遺跡の特質を表し、変遷を知るうえで必要と思われる遺物は写真のみを掲載している。図化対象・写真のみの人工遺物の写真は 97 頁～117 頁に掲載している。

### 1 中国産青磁

中国産青磁は特徴的な 6 点の図化を行った（第 30 図 1～6）。器種は碗、小碗、皿、盤、高足杯、瓶などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 2 中国産白磁

中国産白磁は特徴的な 10 点の図化を行った（第 30 図 7～16）。器種は、碗、小碗、皿、杯、小杯、壺、瓶、袋物、蓋などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 3 中国産青花

中国産青花は特徴的な 46 点の図化を行った（第 30 図 17～第 32 図 62）。器種は碗、小碗、皿、鉢、壺、杯、小杯、蓋、蓮華など豊富にみられた。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 4 中国・タイ産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は特徴的な 5 点の図化を行った（第 33 図 63～67）。器種は、壺、鉢、擂鉢、蓋、急須などがみられた。

タイ産褐釉陶器は状態の良好な壺 4 点の図化を行った（第 33 図 68～71）。器種は、壺や瓶と考えられる遺物などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 5 その他の輸入陶磁器

本項では、前項に収まらない外国産の輸入陶磁器を一括して報告する。種類は、中国産の色絵、黒釉陶器、瑠璃釉、褐釉磁器、褐釉染付、施釉陶器、彩釉陶器、三彩、紫砂、青磁染付、青磁色絵、銅線釉などの他に、西洋陶器や東南アジア産の陶磁器が出土している。

そのうち特徴的な 17 点の図化を行った（第 33 図 72～第 34 図 88）。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 6 本土産陶磁器

本項では、近世と考えられる本土産の陶器や磁器、近現代磁器を一括して本土産陶磁器として報告する。種類は、青磁、白磁、染付、色絵、近代磁器などが得られている。

特徴的な 35 点の図化を行い（第 34 図 89～第 36 図 123）、1 点は写真のみの報告を行う（図版 25 124）。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 7 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は、方言で「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれるもので、器の表面に釉及び絵付けを施す陶器の一群である。本報告では特徴的な 45 点の図化を行った（第 37 図 125～第 39 図 169）。器種は碗、小碗、皿、鉢、瓶、急須、按瓶、蓋、鍋、壺、火炉、火入、香炉、飼入れ、尿瓶など多種多様な製品が出土している。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

### 8 初期沖縄産無釉陶器

初期沖縄産無釉陶器は、荒焼（アラヤチ）とも称される無釉焼締陶器のうち、特に高火度で焼成され、器面に泥釉などが施釉される一群を指す（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）。また、胎土に白土が筋状に混ざる例が多数あり、白色粒や赤褐色粒を含む（新垣 2013）。

本報告では特徴的な 8 点の図化を行った（第

40図173、174、176、177、179、第42図186～188)。器種は、擂鉢、植木鉢、蓋、香炉などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 9 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は、方言で「荒焼(アラヤチ)」と称する焼き縮め陶器の一群であり、特徴的な13点の図化を行った(第40図170～172、175、178、第41図180～185、第42図189、190)。器種は碗、灯明皿、鉢、擂鉢、植木鉢、蓋、壺、壺などがみられる。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 10 陶質土器

陶質土器は、方言で「アカモノ」「アカムヌー」「カマグワーヤチ」と呼ばれるもので、表面に釉を掛けない窯焼成の土器である。ニービが混ざるため器色は橙色や黄色っぽく、輪轂引きや輪積みによって成形される。焼成が悪く触れると粉末が付着するのが特徴で、主に日用品として用いられた。本報告では特徴的な6点の図化を行った(第43図191～196)。

器種は鍋、火炉、急須、蓋、壺、灯明皿、鉢、フライパン状製品などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 11 瓦質土器

瓦質土器は特徴的な4点の図化を行った(第43図197～200)。器種は焜炉、擂鉢、壺、蓋、植木鉢、香炉などが得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 12 土器

土器は宮古式土器、バナリ焼、硬質土器、グスク土器などが出土した。

ここで扱う硬質土器とは、胎土が精選され、砂粒、黒色粒、赤色粒、雲母などを混入し、輪轂引きや指撫でによって成形され、焼成は悪く、触れると粉末が付着するものを示し(沖縄県立埋蔵文化財センター2001)、本土産近世の

土器とする。出土した資料はほとんどが小破片であり、ここでは器形的特徴が窺える資料5点を図化し報告する(第43図201～205)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 13 煙管

出土した煙管はすべてパイプ状のもので、沖縄産施釉陶器製、銅製、アルミ製、真鍮製と思われるものが得られている。ここでは3点の図化を行った(第44図206～208)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 14 金属製品

中城御殿は、近代～戦前まで機能しているうえ、戦後も様々な土地利用が行われていたこともあり、中城御殿建立時と思われる製品だけではなく近現代と思われる製品も見られる。

種類としては建築材(釘、鉄、錠など)装身具(簪、ボタン)、飾り金具、道具類・器物(香炉、蓋など)に大別できる。そのうち特徴的な17点の図化を行った(第44図209～第45図225)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 15 円盤状製品

円盤状製品は日常生活において使用した陶磁器や瓦などを円形に打割調整した二次利用品である。

本報告では13点の図化を行った(第45図226～第46図238)。

素材のバリエーションは多く見られ、今回は石製やガラス製の製品も得られている。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 16 骨製品・土製品

骨製品は装飾品と考えられる資料、人形などが出土した。そのうち人形1点の図化を行った(第46図239)。

土製品は土人形1点の図化を行った(第46図240)。

図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 17 ガラス製品・ガラス玉

祭事に使われたと思われるガラス玉の他、薬品や化粧の瓶や酒瓶など、近代から現代にかけて使用された製品も多く出土している。

ここでは特徴的な4点の図化を行った(第46図241、244～246)。また、戦後の中城御殿の様相が窺える資料として、2点の遺物を観察表と写真のみで報告する(図版35 242、243)。

## 18 石製品・石器・石造製品

石製品・石器・石造製品は特徴的な石製の角皿2点と硯を1点図化している(第47図247～249)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

## 19 瓦・埠

瓦は特徴的な15点を図化し(第47図250～第50図264)、4点は写真のみで報告を行う(図版38 265、図版39 266～268)。造瓦技術別には、明朝系瓦、近代大和系瓦、近代大和瓦、近現代瓦の4種に大別できる。

埠は特徴的な1点の図化を行った(第50図269)。図化を行った遺物の個々の特徴については観察表に記載する。

## 20 錢貨

錢貨は寛永通宝、嘉慶通宝、乾隆通宝、世高通宝、唐國通宝、無文錢(無文錢と思われるもの含む)、鳩目錢、二錢、雁首錢、1セント硬貨などが出土している。

本遺跡で出土する錢貨は近世以降のものが中心で、寛永通宝の割合が最も多い。ここでは、15点の図化を行った(第51図270～284)。図化を行った遺物の詳細は観察表に記載する。

第3表 遺物観察一覧1

博物番号 団版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第30回 団版20	1	中国産青磁	碗	底	—	5.2	—	全面に施釉。外底は蛇の目釉剥ぎ。内底に「福」のスタンプか。外面の細弁は高台付近まで施釉。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で15c~16c。	4トレス I層
第30回 団版20	2	中国産青磁	碗	底	—	5.6	—	全面に施釉。外底は蛇の目釉剥ぎ。内底に3条1筋の沈線あり。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で14c後~15c半。	6トレス I層
第30回 団版20	3	中国産青磁	小碗	底	—	3.4	—	外面は厚い青磁釉、内面は透明釉を施釉。登付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。	4トレス II層
第30回 団版20	4	中国産青磁	小碗	底	—	4.2	—	外面は厚い青磁釉、内面は透明釉を施釉。外底に鉢の一部あり。登付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	4トレス 石碑1 IIb層
第30回 団版20	5	中国産青磁	高足杯	底	—	—	—	透明がかった青磁釉を全面に施釉。外底は露胎。細かい貫入多い。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で明代。	9トレス I層
第30回 団版20	6	中国産青磁	盤	底	—	8.2	—	釉厚く全面に施釉。外底は蛇の目釉剥ぎか。内底に文様があるが不明瞭。胎土は灰白色で堅緻。龍泉窯系で14c~15c半。	4トレス I層
第30回 団版20	7	中国産白磁	小碗	口~底	8.4	4.2	3.9	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。徳化窯系で18c~19c前。	5トレス 石積み4 土中
第30回 団版20	8	中国産白磁	小碗	口	9.0	—	—	両面に透明釉。外面に唐草文。胎土は白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。	5トレス III層
第30回 団版20	9	中国産白磁	小碗	底	—	4.8	—	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。外底に型成形によるシワあり。登付に刻痕。景德鎮窯系で18c~19c前。	5トレス 石積み4 土中
第30回 団版20	10	中国産白磁	皿	口	9.4	—	—	両面に透明釉。胎土は白色で堅緻。口縁部下に型成形によるシワあり。徳化窯系で18c~19cか。	9トレス 庭園基盤 II層
第30回 団版20	11	中国産白磁	杯	口~底	6.8	3.0	4.0	両面に透明釉。登付は釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。両面に織痕痕あり。景德鎮窯系で16c後~17c前。	1トレス III層
第30回 団版20	12	中国産白磁 か	小杯	口~底	3.6	1.55	2.25	両面に透明釉。登付は釉剥ぎ。胎土は灰白色で堅緻。外面に型成形によるシワあり。中国産か近代の本土産。	6トレス I層
第30回 団版20	13	中国産白磁	瓶	胴	—	—	—	両面に透明釉。外面に草花文。胎土は灰白色で堅緻。内面に織痕痕あり。景德鎮窯系か。清代か。	2トレス I層
第30回 団版20	14	中国産白磁	鉢	口	23.3	—	—	両面に青みを帯びた透釉。胎土は白灰色で堅緻。両面に織痕痕・貫入あり。福建・広東系で16c。	6トレス II層
第30回 団版20	15	中国産白磁	蓋	織み付 0.75	底径 2.8 内径 1.8	—	1.45	上面に透明釉。下面は露胎。下面に横棟の孔が1孔あり。上面に粘土シワがあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	4トレス I層
第30回 団版20	16	中国産白磁	器種 不明	底	—	3.4	—	両面に透明釉。底部は露胎。下部に猿を型取ったと思われる裝飾を貼り付け。胎土は白色で堅緻。両面に細かい貫入あり。徳化窯系で明代。	7トレス 湖池2 II層
第30回 団版20	17	中国産青花	碗	口~底	12.6	6.2	5.5	両面にやや白濁の透明釉。内面に細かい貫入多い。外面脇部に蓮唐草文と蓮弁文。型成形によるシワあり。胎土は灰白色で堅緻。徳化窯系で16c末~17cか。	4トレス I層
第30回 団版20	18	中国産青花	碗	口	20.0	—	—	両面に透明釉。口縁内面を題する幾何文様、脇部に蓮文。外面脇部は雪文。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	6トレス I層
第30回 団版20	19	中国産青花	碗	口	9.6	—	—	両面に透明釉。外面脇部に草花文。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	4トレス II層
第30回 団版20	20	中国産青花	碗	口	12.2	—	—	両面に透明釉。内面口縁に薄く1条の團線とその下に唐草文・2条の團線。外面口縁に2条の團線、脇部に蝶、その下に昆虫と思われる文様。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系。	1トレス III層
第30回 団版20	21	中国産青花	碗	口	11.0	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。外面に不明文様。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	5トレス 石碑1 II層
第30回 団版20	22	中国産青花	碗	口	13.2	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。外面に草花文。胎土は白色で堅緻。福建産で清代。	9トレス 湖池2 庭園基盤 I層
第30回 団版20	23	中国産青花	碗	口	14.0	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。外面に草花文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	12トレス III層
第30回 団版20	24	中国産青花	碗	口	13.6	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。内面に粗い貫入。外面脇部に草花文。胎土は淡黄色で細かい。徳化窯系で18c。	5トレス III層
第30回 団版20	25	中国産青花	碗	口	14.2	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。外面に型成形によるシワや、蓮弁文・草花文あり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で18c。	12トレス I層

第3表 遺物観察一覧2

査定番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第30回 図版20	26	中国産青花	碗	口	11.4	—	—	両面に青みがかる透明釉。口縁外面に牡丹唐草文。口縁内面に○状の文様。胎土は白色で堅緻。産地不明で清代。	4トレス II層
第30回 図版20	27	中国産青花	碗	脚	—	—	—	両面に透明釉。内面に簡文。外面は文様あるが不明。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で清代。	6トレス I層
第30回 図版20	28	中国産青花	碗	底	—	5.4	—	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。外面部に牡丹唐草文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で18c後~19c。	4トレス I層
第31回 図版21	29	中国産青花	碗	底	—	6.6	—	両面に透明釉。足付を釉剥ぎ。脚厚い。外面部に型成形によるシワや蓮瓣文・寿字あり。外面部下半にやや細かい貫入。胎土は灰白色で堅緻。徳化窯系で18c。	5トレス III層
第31回 図版21	30	中国産青花	碗	底	—	9.0	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。高台と足付は一部露胎。外底と内底に文様あるが不明。胎土は黄褐色のあら白色でやや細かい。福建・広東系で清代。	4トレス II層
第31回 図版21	31	中国産青花	碗	底	—	7.8	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底を蛇の目釉剥ぎ。高台の内外まばらに露胎。外面部に文様あるが不鮮明。胎土は淡黄色で細かい。福建・広東系で18cか。	5トレス II層
第31回 図版21	32	中国産青花	碗	底	—	5.0	—	両面に透明釉。足付を釉剥ぎし。移植が付着。外面部に蕉葉文、型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代か。	4トレス II層
第31回 図版21	33	中国産青花	碗	底	—	5.6	—	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎし、移植付着。内底は蛇の目釉剥ぎで、1条の繩目。外底高台際に露胎。脚部に不明の文様。胎土は灰白色でやや細かい。漳州窯系か。	4トレス II層
第31回 図版21	34	中国産青花	小碗	口	—	—	—	両面に透明釉。外面上に羽状文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系か。清代か。	5トレス 石積み4 土中
第31回 図版21	35	中国産青花	小碗	口	10.2	—	—	両面にやや白濁の透明釉。貫入多い。外面上に花文。胎土は灰白色で細かい。福建・広東系で清代。	12トレス III層
第31回 図版21	36	中国産青花	小碗	口	8.2	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底に2条の繩目。外面上に花文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系か。18c後~19c。	12トレス 方形石組 1
第31回 図版21	37	中国産青花	小碗	口	9.0	—	—	両面に、やや白濁の青みがかる透明釉。外面上に丸文。胎土は白色で堅緻。福建・広東系か。清代。	5トレス 石積み4 土中
第31回 図版21	38	中国産青花	小碗	口	9.6	—	—	両面に透明釉。外面上に文様あるが不鮮明。胎土は白色で堅緻。徳化窯系か。清代。	5トレス 石積み4 土中
第31回 図版21	39	中国産青花	小碗	底	—	4.8	—	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。内底に團紋・花文。外底部に草花文。外底に路筋あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で18c後~19c前。	5トレス II層
第31回 図版21	40	中国産青花	小碗	底	—	3.9	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底に花文。外面上に花文。内底に型成形によるシワあり。胎土は白色で細かい。徳化窯系で18c後~19c。	12トレス 円形石組 1
第31回 図版21	41	中国産青花	皿	口~底	12.4	6.8	2.6	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。内底に十字花文。外面部に草花文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で16c前~16c半。	6トレス II層
第31回 図版21	42	中国産青花	皿	口~底	14.2	6.8	3.8	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。内面上に草花文。外底に鉢あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で17c~18c前。	4トレス I層
第31回 図版21	43	中国産青花	皿	口~底	—	—	1.5	両面に青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。内底に不明文様。外面部に型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で19c。	9トレス 庭園屋敷 II層
第31回 図版21	44	中国産青花	皿	底	—	3.8	—	両面に透明釉。足付を釉剥ぎ。内底に蝶文と草花文。外底に「大明嘉靖年製」の銘あり。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で16c前~16c。	6トレス II層
第31回 図版21	45	中国産青花 か	皿	底	—	19.2	—	両面に透明釉。足付を釉剥ぎ。内面中心に螺旋、その周辺を囲むように文様あり。外底に織錦紋あり。胎土は白色で堅緻。中国産か。本土。時期不明。	9トレス 湖池2 1層
第32回 図版21	46	中国産青花	杯	底	—	3.5	—	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。内底に「福」の文字。外面部に草花文・型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。中国産。年代不明。	4トレス I層
第32回 図版21	47	中国産青花	小杯	口~底	5.5	2.6	3.6	両面にやや青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎし、移植付着。外面部に文様。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系で17c前か。	4トレス I層
第32回 図版21	48	中国産青花	小杯	口~底	4.9	2.2	3.2	両面に透明釉。足付を釉剥ぎし。移植付着。外面部に蕉葉文。胎土は白色で堅緻。徳化窯系か。清代。	6トレス I層
第32回 図版21	49	中国産青花	小杯	口	4.8	—	—	両面にやや青みがかる透明釉。内面口縁と内底に團紋。外面部に草花文・型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。徳化窯系で清代。	6トレス II層
第32回 図版21	50	中国産青花	小杯	口~底	5.1	2.4	2.7	両面に青みがかる透明釉。足付を釉剥ぎ。口脣部は茶色を呈す。外面上に團紋と樓閣山水文。胎土は白色で堅緻。景徳鎮窯系か。清代か。	9トレス I層

第3表 遺物観察一覧3

排列番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径× 長軸(cm)	底径× 短軸(cm)	高さ(cm)	観察事項	出土地
第32図 図版21	51	中国産青花	小杯	底	—	2.8	—	両面に透明釉。底部は基盤底で釉剥落する。外面部に蓮弁状の文様。胎土は白色で堅緻。中国産か。清代。	4トレス I層
第32図 図版21	52	中国産青花	小杯	底	—	2.35	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底に圓線と筆で一点突いたような文様。外面部に文様あるが不鮮明。内外面に型成形によるシワあり。胎土は白色で堅緻。他化窯系で清代。	6トレス I層
第32図 図版21	53	中国産青花	小杯	底	—	2.35	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底に筆で一点突いたような文様。外面部に文様あるが不鮮明。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	6トレス I層
第32図 図版22	54	中国産青花	鉢	口	26.2	—	—	両面に透明釉。口唇部を釉剥落。内面に草花文、外面に菊花文。胎土は白色で堅緻。福建・広東系で清代。	10トレス 方形石棺 2
第32図 図版22	55	中国産青花 か	鉢	底	—	7.1	—	両面にやや青みがかる透明釉。内底に花文か、外面に不明文様。上面幅は八角。中国産か。清代。	12トレス I層
第32図 図版22	56	中国産青花	瓶	口～底	1.5	1.7	5.3	外腹、内面口縁のみにやや青みがかる透明釉。内面釉重れあり。外腹は露胎。外面部に文字と思われる文様。胎土は白色で堅緻。福建産か。清代。	2トレス I層
第32図 図版22	57	中国産青花	瓶	口	8.3	—	—	両面に透明釉。内面に輪轉痕あり。胎土は白色で堅緻。No.58、No.59と同一個体か。景德鎮窯系で18c。	8トレス 湖池2 II層
第32図 図版22	58	中国産青花	瓶	胴	—	—	—	両面に透明釉。外面に石、植物の文様、剥落に蓮弁文。内面に輪轉痕あり。胎土は白色で堅緻。No.57、No.59と同一個体か。景德鎮窯系で18c。	7トレス 湖池2 II層
第32図 図版22	59	中国産青花	瓶	底	—	11.4	—	両面に透明釉。蓋付を釉剥落。外面剥落に蓮弁文。高台に蓮に思われる文様。外腹は露胎。内面に輪轉痕あり。胎土は白色で堅緻。No.57、No.58と同一個体か。景德鎮窯系で18c。	9トレス 湖池2 II層
第32図 図版22	60	中国産青花	瓶	底	—	7.5	—	両面にやや青みがかる白濁とした緞。蓋付を釉剥落し、砂付着。外面部に草花文か。外面部に蓮弁文。胎土は灰白色で堅緻。景德鎮窯系で17c前。	4トレス I層
第32図 図版22	61	中国産青花	壺	口	10.8	—	—	両面に透明釉。口唇部を釉剥落。外面口縁部に花菱文、その下位に草花文。	12トレス I層
第32図 図版22	62	中国産青花	蓮華	柄	—	—	—	両面に透明釉。内面に唐草文。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系か。清代。	8トレス 湖池2 I層
第33図 図版22	63	中国産 褐釉陶器	壺	口	19.6	—	—	内外面に褐色を呈する釉。外面に輪轉痕あり。胎土は赤褐色でやや軟質、細かい石英粒を多く含む。清代。	5トレス 石積み4 土中
第33図 図版22	64	中国産 褐釉陶器	壺	底	—	16.0	—	内外面に上部から重ねた褐色を呈する釉あり。内面剥落部の輪轉痕が明顯。胎土は赤褐色で細かく、細かい石英粒を多く含む。明代。	4トレス 石積み1 II層
第33図 図版22	65	中国産 褐釉陶器	壺	底	—	16.0	—	外面腹部まで自然釉かある。内面輪轉痕が明瞭。胎土にはぶい赤褐色でやや軟質、白色砂粒や赤色のスジを含む。明代。	8トレス I層
第33図 図版23	66	中国産 褐釉陶器	壺	底	—	21.8	—	褐色を呈する釉を底面以外に施釉。内外面ともに輪轉痕が明瞭。胎土は黄褐色で細かく、粗い石英粒を少量含む。15c後～16c前か。	4トレス I層
第33図 図版23	67	中国産 褐釉陶器	壺	底	—	16.5	—	褐色を呈する釉を底面以外に施釉。底面は橙色を呈する。外面部の輪轉痕が明瞭。胎土は黄褐色で細かく、粗い石英粒を少量含む。15c前～15c半。	9トレス 庭園墓地 II層
第33図 図版23	68	タイ産 褐釉陶器	壺	口	18.4	—	—	両面に褐色を呈する釉。胎土は黄褐色で細かく、赤色粒を含む。厚手丸足の壺。メムノイドで15c～16cか。	8トレス I層
第33図 図版23	69	タイ産 褐釉陶器	壺	口	5.2	—	—	両面に黒褐色を呈する釉。胎土は灰黄色でやや粗く、黒色粒を含む。輪轉痕成形で口縁部がやや丸形の壺。タイ産。	11トレス III層
第33図 図版23	70	タイ産 褐釉陶器	壺	口	2.7	—	—	外面に黒褐色を呈する釉。胎土は灰白色で細かく、黒色粒を含む。球状に近い剥落部から口縁部にかけて縦耳を2個付す。両面に明瞭な輪轉痕。シーガチャナライ産で15c後～16c。	6トレス I層
第33図 図版23	71	タイ産 褐釉陶器か	壺	底	—	2.1	—	外面に褐色を呈する釉。底部は調釉。胎土は灰黄色でやや粗く、黒色粒を少量含む。輪轉痕成形。タイ産か。	4トレス I層
第33図 図版23	72	中国産色絵	碗	口～底	12.7	6.7	5.65	両面に透明釉。外面に蓮弁文・草花文・丸文。胎土は灰白色で堅緻。外面と外底に型成形によるシワあり。他化窯系で18c。	12トレス I層
第33図 図版23	73	中国産色絵	碗	底	—	7.0	—	両面に青白色の釉。蓋付を釉剥落。上給付で見込みに楕文。外面に不明鮮明な文様あり。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で18c～19cか。	4トレス I層
第33図 図版23	74	中国産色絵	小碗	口～底	8.3	3.6	4.2	両面に透明釉。蓋付を釉剥落し、稍痕が付着。外底一部露胎。外面に青の上給付で草花文。胎土は白色で堅緻。他化窯系で18c後～19c前。	6トレス I層
第33図 図版23	75	中国産色絵	小碗	口	—	—	—	両面に透明釉。外面上給青で「貴」の文字。一部上給縁の給付けで植物とと思われる文様の痕が残るが、剥がれています詳細不明。胎土は白色で堅緻。他化窯系で清代。	耕土

第3表 遺物観察一覧4

補綴番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ(cm)	観察事項	出土地
第33回 図版23	76	中国産色絵	皿	口	13.8	—	—	両面に透明釉。両面口縁に染付で2条の團練。外側染付で唐草文、草花文。草花文は輪郭を染付け、中を上絵付の緑、黄で塗り潰す。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で18c前。	6トレー I層
第33回 図版23	77	中国産色絵	皿	口	—	—	—	両面に透明釉。内面に朱色で不規文字。胎土は灰白色で堅緻。内面に型形成によるシワあり。漳州窯系で16c末～17c前。	4トレー I層
第33回 図版23	78	中国産色絵	皿	底	—	—	—	両面に透明釉。内面中心に吉祥文字、その周辺に雷文が彫る。外底に「大清嘉慶年製」の跡。胎土は白色で堅緻。外側に輪郭痕あり。景德鎮窯系で1796～1820年。	10トレー I層
第34回 図版23	79	中国産 青磁染付	小碗	口	10.0	—	—	外側は青磁釉、内面は透明釉。釉厚い。内面に八卦文。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	12トレー I層
第34回 図版23	80	中国産 施釉陶器	皿	口～底	7.0	4.0	1.25	両面に青色を呈する釉。外底は露胎で2条の團練と不明瞭の文様。胎土は灰白色でやや堅緻。景德鎮窯系か。16cか。	12トレー I層
第34回 図版23	81	中国産 窯頭釉	皿	口	—	—	—	外側は窯頭釉、内面は口唇部まで青白色釉。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	6トレー II層
第34回 図版23	82	中国産 窯頭磁器	碗	口	12.8	—	—	両面に窯頭釉。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	6トレー I層
第34回 図版23	83	中国産 窯頭磁器	碗	底	—	6.7	—	両面に窯頭釉。高台内のみ透明釉。豊付は露胎。外底に染付で鉢。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	6トレー I層
第34回 図版23	84	中国産 窯頭染付	小碗	底	—	4.2	—	外側は窯頭釉。内面は透明釉。豊付を釉剥ぎ。内底染付の團練とその内側に草花文。胎土は白色で堅緻。景德鎮窯系で清代。	4トレー II層
第34回 図版23	85	中国産三彩	壺	底	—	6.4	—	外側に青色を呈する釉を外底まで施す。胎土は淡茶色でやや艶い。16cか。	6トレー I層
第34回 図版23	86	中国産紫砂	急須	注口	—	—	—	胎土は紫色で緻密。外表面を磨いている。清代。孔径0.75cm。	9トレー 庭園基盤 II層
第34回 図版23	87	中国産 黑釉陶器	碗	口	12.5	—	—	両面にやや光沢のある黒釉。胎土は灰白色で堅緻。白色粒子を混入。明代か。	9トレー I層
第34回 図版23	88	中国産 黑釉陶器か	碗	底	—	4.2	—	両面にやや光沢のある黒釉。外底は露胎でやや釉垂れあり。胎土は灰黄色でやや粗い。高台は小ぶりで内底に段を複数持つ。中国産か。	9トレー 庭園基盤 II層
第34回 図版24	89	本土産青磁	碗	口～底	10.8	4.6	7.05	全面に青磁釉。高台と外底は露胎。胎土は灰白色で一部橙色を呈し、堅緻。肥前産で近世。	4トレー II層
第34回 図版24	90	本土産青磁	碗	底	—	—	—	両面に青磁釉。豊付を釉剥ぎ。胎土は白色で堅緻。外底の統制番号は「瀬438」か。瀬戸産で近世。	4トレー I層
第34回 図版24	91	本土産 青磁染付	碗	口	12.0	—	—	外側はやや緑色を呈する釉。内面は透明釉。内面に四方難文。胎土は白色で堅緻。肥前産で18c。	8トレー 石隈1 IIIc層
第34回 図版24	92	本土産染付	碗	底	—	4.8	—	両面に青みかる透明釉。豊付を釉剥ぎ。内底に梅文。外底に「大明」の銘あり。肥前産で17c後。	6トレー I層
第34回 図版24	93	本土産染付	碗	底	—	4.6	—	外側に褐色を呈する釉で腰部以下露胎。内面にやや青みかる透明釉で豊付多い。内底に染付で花文。腰が折れる器形。胎土は灰白色で細かい。本土産で近世。	6トレー II層
第34回 図版24	94	本土産染付	碗	底	—	3.3	—	両面に透明釉。豊付を釉剥ぎ。貫入細かく多い。外面部に草花文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で19c。	4トレー II層
第34回 図版24	95	本土産染付	皿	底	—	7.8	—	両面に透明釉。外底は中央を残し釉剥ぎ。内底に環状松竹梅文。内面に草花文や花文、外面に○×を施す。外底に「成化年製」の跡。胎土は白色で堅緻。肥前産で18c半。	8トレー I層
第34回 図版24	96	本土産染付	皿	底	—	—	—	両面にやや青みかる透明釉。豊付を釉剥ぎ。内底に唐草文、梅文。外底に「大明成化年製」の跡か。胎土は白色で堅緻。肥前産で近世。	4トレー 石隈1 IIb層
第34回 図版24	97	本土産染付	皿	底	—	9.3	—	両面にやや青みかる透明釉。高台内外は釉剥ぎ。内底に唐草文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で近世。	5トレー III層
第34回 図版24	98	本土産染付	角皿	口～底	—	—	—	両面に透明釉。豊付を釉剥ぎ。内面部に四方難文、外面部に不明文様。胎土は白色で堅緻。肥前産で近世。	4トレー I層
第34回 図版24	99	本土産染付	角皿	口	—	—	—	両面に透明釉。口脣部に市松文。胎土は灰白色で堅緻。肥前産で17cか。	6トレー I層
第34回 図版24	100	本土産染付	瓶	底	—	4.5	—	外側にやや青みのある透明釉。豊付を釉剥ぎ。外面部に文様あるが不明瞭。胎土は白色で細かい。肥前産で近世。	7トレー 庭園基盤 I層

第3表 遺物観察一覧5

排回番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第35図 図版24	101	本土産陶器	碗	口	11.2	—	—	外面は緑色を呈する釉。内面はやや茶色を呈する透明釉の掛け分け。胎土は灰白色で細かい。内野山産で17c～18c前。	6トレス II層
第35図 図版24	102	本土産陶器	皿	口	17.4	—	—	両面に透明釉。側部に五芒星あり。軍用食器。断面に煤がみられ、割れた後に被熱か。胎土は薄い褐色で細かい。本土産で近代。	4トレス I層
第35図 図版24	103	本土産陶器	皿	口～底	14.0	4.8	4.1	両面に白濁する釉。外側面部下半以下は露胎。胎土はやや赤みがかる灰色でやや粗い。本土産で近世。	6トレス II層
第35図 図版24	104	本土産陶器	擂鉢	口	—	—	—	暗褐色を呈する釉を口縁部両面に施釉。胎土は橙色で一部灰色を呈し細かい。白色砂をやや多く含む。肥前産で17c前。	6トレス I層
第35図 図版24	105	本土産 褐釉陶器	植木鉢	口	32.4	—	—	両面に褐色を呈する釉。口唇部は露胎。内面側部に横位の櫛目が明顯。胎土はにい赤褐色で細かい。白色砂粒や赤色土を含む。薩摩產で近世。	8トレス IIIb層
第35図 図版24	106	本土産陶器	鉢	底	—	7.4	—	全面に透明釉。内底と置付に重ね焼きの痕あり。買入跡が多く。胎土は白色でやや細かい。肥前産か。近世か。	4トレス I層
第35図 図版24	107	本土産陶器 か	壺	底	—	10.8	—	外面に透明釉。外底は釉がまだらにかかる。内面側部が明瞭。胎土は灰色で石英粒を少し含む。本土産か。近世か。	4トレス II層
第35図 図版24	108	本土産陶器	擂鉢	口	27.3	—	—	無釉の擂鉢。両面に指ナデによる調整痕が明瞭。胎土は灰色で大小の白砂粒や白筋を多く含む。備前産で近世。	6トレス I層
第35図 図版25	109	本土産陶器	火鉢	口	40.8	—	—	黒褐色を呈する釉を両面に施釉。内面口縁部に施ぎ。胎土は黄白色で細かい。本土産で近代か。	4トレス I層
第35図 図版25	110	本土産陶器	杯	口～底	5.6	2.3	3.8	両面に買入の多い透明釉。外側面部下半以下は露胎。胎土は灰白色で細かい。本土産で近世。	5トレス 石油1 IIIb層
第35図 図版25	111	本土産陶器	袋物	底	—	4.8	—	両面に薄い褐色を呈する釉。外底は露胎で糸切痕あり。胎土は灰色で細かい。肥前産で近世。	8トレス 湖池2 I層
第35図 図版25	112	本土産陶器	タイル	—	—	—	1.9	表面から背面縁にかけて白色を呈する釉。表面に鋼板転写による花草文。胎土は白色で致緻。瀬戸・美濃産で近代。	9トレス I層
第36図 図版25	113	本土産 褐釉陶器	壺	口	19.4	—	—	両面に褐色を呈する釉。口脣を釉剥ぎ。内面の調整痕が明瞭。胎土は赤褐色でやや粗く。白砂粒や石英をやや多く含む。薩摩產で近世。	4トレス I層
第36図 図版25	114	本土産 褐釉陶器か	火炉	口	—	—	—	両面に褐色を呈する釉。側部に菱形のスタンプあり。胎土は橙色でやや細かい。本土産か。	9トレス 庭園基盤 II層
第36図 図版25	115	本土産 色絵	香炉か	口	8.8	—	—	両面に買入の多い透明釉。蓋受け部は釉剥ぎし煤付着。黒や、金と思われる線で施釉。胎土は白色で細かい。京焼で18c～19cか。	5トレス I層
第36図 図版25	116	本土産 褐釉陶器	鉢	底	—	—	—	両面に褐色を呈する釉。外底は露胎。内底に買入。胎土は赤褐色で細かく。石英や白砂を少量含む。薩摩產で近世。	6トレス II層
第36図 図版25	117	本土産磁器	碗	底	—	4.7	—	両面に透明釉。置付を釉剥ぎ。外底に「岐13」の統制番号。胎土は灰黄色で堅緻。美濃産で近代。	4トレス II層
第36図 図版25	118	本土産磁器	碗	口～底	11.6	4.4	5.3	両面に明緑灰を呈する釉と暗褐色を呈する釉を施釉。側部外面に薙痕。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	12トレス IIb層
第36図 図版25	119	本土産磁器	碗	口～底	11.3	4.1	5.05	両面に透明釉。置付を釉剥ぎ。外側面に縁部に2条の線彫。外底に「岐1065」の統制番号。胎土は白色で堅緻。美濃産で近代。	4トレス II層
第36図 図版25	120	本土産磁器	小碗	口～底	8.2	3.0	4.8	両面に透明釉。置付を釉剥ぎ。外側面部に山水文、腰部に波文。外底に「岐410」の統制番号。胎土は白色で堅緻。美濃産で近代。	9トレス I層
第36図 図版25	121	本土産磁器	小杯	口～底	3.7	1.8	2.3	底面以外に透明釉。内底に眼鏡の文様。外側面部に「今日も明日も欠かさずのんでもいいからだ奈里ませう」の文字。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	4トレス II層
第36図 図版25	122	本土産磁器	蓋物の身	口～底	11.0	10.2	4.1	両面に透明釉。置付・口脣を釉剥ぎ。外側面に北東の蘇軾の題文である「赤壁賦」を記す。内面に鐵燒痕あり。胎土は白色で堅緻。本土産で近代か。	2トレス I層
第36図 図版25	123	本土産磁器	小鉢	口～底	2.4	2.0	2.9	底面以外に透明釉。内底に眼鏡の文様。外側面部に「今日も明日も欠かさずのんでもいいからだ奈里ませう」の文字。胎土は白色で堅緻。本土産で近代。	4トレス I層
図版25	124	本土産磁器	瓶	底	—	5.1	—	1960年代の資料か。外底に「有田燒」の銘あり。側部の図はゲンキ坊やか。胎土は白色で堅緻。	2トレス I層
第37図 図版26	125	沖繩產 施釉陶器	碗	口～底	14.7	7.0	7.0	両面に白化粧と透明釉施釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。置付白土塗布。外底は褐色を呈する釉。胎土は淡黄色で細かい。	8トレス 湖池2 I層

第3表 遺物観察一覧6

図版番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ(cm)	観察事項	出土地
第37回 図版26	126	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	14.4	7.4	6.8	両面に白化粧と薄緑色を呈する透明釉後、外表面縁部を掛け分け。内底蛇の目釉剥ぎ。豊付釉剥ぎ。見込み部分と高台内側のみ透明釉施釉。胎土はにい黄褐色で細かい。	4トレス II層
第37回 図版26	127	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	13.0	6.8	6.35	にい黄褐色を呈する灰釉を内面削下部まで施釉。内底と外表面以下は露胎。外底に煤付着。内底に重ね焼きの跡。胎土はにい黄褐色で緻密。	5トレ 田畠
第37回 図版26	128	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	12.8	6.2	6.1	オリーブ黄色を呈する灰釉を外表面腰部まで施釉。それ以下の部分露胎。内外面ともに織織痕が明瞭。豊付白砂付着。胎土は灰黄色で緻密。	5トレ 田畠
第37回 図版26	129	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	12.4	6.4	5.7	灰白～灰褐色を呈する釉を内外面腰部まで施釉。それ以下の部分露胎。胎土は淡黄色で細かい。	5トレ 石積み4 土中
第37回 図版26	130	沖縄産 施釉陶器	碗	口	12.2	—	—	暗褐色を呈する釉を内外面ともに腰部まで施釉。内底および外表面高台脇には露胎。胎土は淡黄色で細かい。	7トレ 庭園基盤 I層
第37回 図版26	131	沖縄産 施釉陶器	碗	口	12.2	—	—	両面に黒褐色を呈する釉厚く施釉し、オリーブ黄色を呈する釉2度掛け。にい黄褐色を呈する釉を口縁部にのみ施釉。胎土は灰白色で緻密。	5トレ 田畠
第37回 図版26	132	沖縄産 施釉陶器	碗	底	—	6.2	—	灰オリーブ色を呈する釉を内面削下部まで施釉。それ以下の部分は露胎。内底重ね焼きの跡。外表面腰部に線刻で2条の横線。胎土は灰白色で堅密。	5トレ 石積み4 土中
第37回 図版26	133	沖縄産 施釉陶器	碗	底	—	7.2	—	両面透明釉掛かる。内底蛇の目釉剥ぎ。外表面高台から外底にかけて露胎。豊付白土塗布。胎土は灰白色で緻密。	5トレ 田畠
第37回 図版26	134	沖縄産 施釉陶器	碗	底	—	6.9	—	灰釉を内面削下部に施釉。それ以外の部分は露胎。豊付白土塗布。胎土は灰白色で堅密。	5トレ 石積み4 土中
第37回 図版26	135	沖縄産 施釉陶器	碗	底	—	7.0	—	灰釉を内外面ともに腰部まで施釉。見込みに釉を丸く盛る。その他部分は露胎。胎土は灰白色で緻密。	5トレ 石積み4 土中
第37回 図版26	136	沖縄産 施釉陶器	碗	底	—	6.2	—	内面に鉄釉で2条の横線と文様掻き、両面淡黄色を呈する透明の灰釉施釉。内底と外表面以下露胎。内底、豊付に重ね焼きの跡。全体的に丁寧な造り。胎土は灰白色で堅密。	5トレ 田畠
第37回 図版26	137	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.8	4.0	4.65	両面に白化粧と透明釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。豊付を釉剥ぎ。外底は白化粧の跡。胎土は淡黄色で細かい。	8トレ 湖池2 II層
第37回 図版26	138	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.2	3.5	4.25	全面白化粧に透明釉。豊付釉剥ぎし、白土塗布。外表面刻と真須で半菊花文彫る。胎土は浅黄色で細かい。	12トレ 方形石組 1
第37回 図版26	139	沖縄産 施釉陶器	小碗	口～底	8.0	3.6	4.15	内面灰オリーブ色を呈する釉、黒褐色を呈する釉を内面上部から外表面高台にかけて施釉。内底蛇の目釉剥ぎで、重ね焼きの跡残る。豊付白土塗布。胎土は灰黄色で細かい。	9トレ 湖池2 庭園基盤 II層
第37回 図版26	140	沖縄産 施釉陶器	小碗	口	8.3	—	—	両面白化粧に透明釉。内底蛇の目釉剥ぎか。全体に細かく貫入がある。胎土は淡黄色で細かい。	12トレ 方形石組 1 床底
第37回 図版26	141	沖縄産 施釉陶器	小碗	底	—	3.65	—	全面に透明釉。豊付を釉剥ぎ後白土塗布。外表面腰部に1条の横線。外底には線刻と真須で「蟹」の略称。胎土は灰白色で堅密。	4トレ II層
第37回 図版26	142	沖縄産 施釉陶器	皿	底	—	7.8	—	両面白化粧に透明釉。内底蛇の目釉剥ぎ後、縞模で三巴文施す。重ね焼きの跡ある。豊付釉剥ぎし白土塗布。全体に細かい貫入がある。胎土はにい黄褐色で細かい。	4トレ II層
第37回 図版26	143	沖縄産 施釉陶器	鉢	底	—	10.6	—	内面は白化粧に透明釉。外表面は褐色を呈する釉掛かる。内底は蛇の目釉剥ぎ。胎土は淡黄色で細かい。	耕土
第37回 図版26	144	沖縄産 施釉陶器	小鉢	底	—	4.6	—	両面灰オリーブ色を呈する灰釉施釉。高台から外底にかけて露胎。外表面腰部付近に2条の横線。全体的に丁寧な造り。胎土は灰白色で緻密。	5トレ 石積み4 土中
第37回 図版26	145	沖縄産 施釉陶器	鉢か	口	8.6	—	—	両面に鉄釉。白土貼り付け雲龍文装飾か。装飾部はオリーブ色を呈する釉。外表面のみ透明釉掛かる。胎土は褐灰色で緻密。	4トレ I層
第38回 図版27	146	沖縄産 施釉陶器	鉢か	底	—	14.4	—	外表面脚半ばで黒褐色を呈する釉厚く掛かる。内面露胎し織織痕が明瞭。内底白砂付着。外底に円柱状の脚が付く。胎土は灰白色で緻密。	4トレ II層
第38回 図版27	147	沖縄産 施釉陶器	按瓶	底	—	11.0	—	暗オリーブ色を呈する釉を内面全面上、外面肩く腰部まで施釉。外底にも同様の釉が掛かる。内面織織痕が明瞭。内底、豊付に重ね焼きの跡。胎土は灰黄色で細かい。	4トレ I層
第38回 図版27	148	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底	5.8	6.8	8.4	外底部側面まで黒褐色を呈する釉厚く掛かる。口縁部釉剥ぎ。内面露胎し織織痕が明瞭。注口には刺に3点孔開ける。側面部円柱状の把手貼り付け。胎土は灰黄色で細かい。	5+12トレ I層
第38回 図版27	149	沖縄産 施釉陶器	急須	口～底	5.7	6.6	8.25	外面白化粧後、外底除く両面に薄緑色を呈する透明釉施釉。口唇部釉剥ぎ。注口には刺に2点孔開ける。外底重ね焼きの跡と、円錐状の脚3点付く。胎土は灰白色で緻密。	4トレ II層

第3表 遺物観察一覧7

排図番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	高さ(cm)	観察事項	出土地
第38図 図版27	150	沖縄產 施釉陶器	急須	底	—	8.8	—	内面黒褐色を呈する釉が掛かり繩縫痕が明瞭。外底露胎し煤付着。内面状の脚が付く。胎土はにぶい赤褐色で緻密。	5トレー 石積み4 土中
第38図 図版27	151	沖縄產 施釉陶器	急須	底	—	7.6	—	外面底部側面まで黒褐色を呈する釉厚く掛かる。底部は露胎し煤付着。内面は淡黄色で細かい。	12トレー 円形石組 1
第38図 図版27	152	沖縄產 施釉陶器	急須	底	—	7.2	—	外面部まで黒褐色を呈する釉が掛かる。その他の部分は露胎。全体的に薄い作り。外底煤付着し内面状の脚が付く。胎土は淡黄色で細かい。	5トレー 石積み1 カイタイ
第38図 図版27	153	沖縄產 施釉陶器	網	口～底	13.4	8.4	8.7	黒褐色を呈する釉を内面胴部以下、外曲線部分から剥半ばにかけて施釉。口縁部跨線。底部は黄褐色で細かい。	4トレー 皿
第38図 図版27	154	沖縄產 施釉陶器	網	口	17.4	—	—	外面輪縁、内面褐色を呈する釉を施釉。外面部ともに繩縫痕が明瞭。口縁部跨線。胎土は黄褐色で細かい。	5トレー 石積み4 土中
第38図 図版27	155	沖縄產 施釉陶器	壺	口～底	12.5	12.0	19.8	外面高台脇までと外底に暗褐色を呈する施釉。口縁部2条施し、耳が4つ付く。口縁部施剥ぎ。内面オリーブ黄色を呈する釉掛かり、繩縫痕が明瞭。胎土は淡黄色で細かい。	12トレー 1層
第38図 図版27	156	沖縄產 施釉陶器	壺	口	5.8	—	—	両面に黒色を呈する施釉。口唇部を施剥ぎ。内面繩縫痕が明瞭。胎土は灰褐色で細かい。	8トレー 湖池2 1層
第38図 図版27	157	沖縄產 施釉陶器	香炉	口～底	15.3	6.6	9.1	両面赤褐色を呈する施釉施剥後、内口肩部から外面部にかけ鉄釉厚く掛かる。内口肩部に鉄付着。獸脚状の脚が付き、足先に白砂付着。胎土は灰白色で堅敏。	5トレー 石積み4 土中
第39図 図版28	158	沖縄產 施釉陶器	火入	口～底	10.8	7.3	7.8	口唇部内側から外側下部にかけ黄褐色を呈する施釉。内面と外曲面以下は露胎。内面繩縫痕が明瞭。外面部に縦線で3条の繩縫。胎土は灰黄色でやや軟質。	4トレー 1層
第39図 図版28	159	沖縄產 施釉陶器	火入	口	10.8	—	—	口唇部内側から外側2cm程の部分にかけ白化粧に錆剥厚く施釉し、縦線で2条の繩縫。外面部は暗オリーブ色を呈する施釉。内面露胎。胎土はにぶい黄褐色で細かい。	12トレー #7-4 1層
第39図 図版28	160	沖縄產 施釉陶器	蓋	底	—	底径 19.0	—	内外面ともに繩縫の底黒褐色を呈する施釉。外面部繩縫痕が明瞭。内面重ね焼きた際の冲撃施釉痕が一部付着か。胎土は黄褐色で細かい。	5トレー 石積み4 土中
第39図 図版28	161	沖縄產 施釉陶器	蓋	開み	縫合径 6.5	—	—	外面一部に暗褐色を呈する施釉が掛かる。縫合部分は高台状で橙色を呈する。胎土は灰褐色で緻密。	5トレー 石積み4 土中
第39図 図版28	162	沖縄產 施釉陶器	蓋	開み～闭	縫合径 8.1 径合 5.9	4.0	—	外面縫合で開閉や子母模様、丸文施す。全面に白化粧後、外面のみ白釉施釉し錆剥と鉄付で施付け。縫合付近に孔。急須の蓋か。疵に煤付着。胎土はにぶい黄褐色で細かい。	4トレー 1層
第39図 図版28	163	沖縄產 施釉陶器	蓋	底	—	底径 26.2	—	外面ともに縫合や逆孔にかけて黒色を呈する施釉。内面繩縫痕が明瞭。胎土は灰褐色で緻密。	5トレー 石積み4 土中
第39図 図版28	164	沖縄產 施釉陶器	器種 不明	底	—	5.4	—	前面は白釉と底付近に鉄釉が掛かる。背面は無釉。全体に縦線で鉄のような文様を施す。胎土はにぶい橙色で緻密。	リレー 庭園基盤 1層
第39図 図版28	165	沖縄產 施釉陶器	灯明具	底	—	4.6	—	黒褐色を呈する釉が内面と、厚く外面に掛かる。底部露胎し繩縫痕が明瞭。高足で灯芯を支える突起は欠損。胎土はにぶい黄褐色で細かい。	9トレー 庭園基盤 1層
第39図 図版28	166	沖縄產 施釉陶器	水滴	口～底	孔径 0.85	—	2.6	外面底部除く全面に黒褐色を呈する釉厚く掛かる。注口欠損。底部に付着物あり。上面に凸状の花の文様か。胎土は灰白色で堅敏。	4トレー 1層
第39図 図版28	167	沖縄產 施釉陶器	壺入	口～底	3.9	2.1	2.2	両面に鉄釉施釉。胎土は甚簡底で露胎。内湾した形状で耳部分欠損。胎土は灰褐色で緻密。	7トレー 1層
第39図 図版28	168	沖縄產 施釉陶器	尿瓶	口～底	—	12.2	15.1	外面上から脚半ばにかけ黒褐色を呈する施釉。内面と高台脇から外底にかけて暗褐色呈する施釉。内面繩縫痕が明瞭。受尿口と制御部の紐に目粗錆。胎土は灰褐色で緻密。受尿口径6.9cm	7トレー 庭園基盤 1層
第39図 図版28	169	沖縄產 施釉陶器	獣形	脚	—	—	厚さ 6.75	シーザーの右後ろ脚部分か。全体にオリーブ黄色を呈する施釉。獸脚部や内側部分などに黒褐色を呈する施釉が掛かる。脚裏露胎。爪先部分一部欠損。胎土は灰褐色で緻密。	12トレー 1層
第40図 図版29	170	沖縄產 無釉陶器	灯明皿	口～底	10.8	5.6	2.1	内外口縁部に煤付着。胎土は明赤褐色で細かい。	8トレー 皿
第40図 図版29	171	沖縄產 無釉陶器	灯明皿	口～底	9.4	4.0	2.7	口縁部に煤付着。外面部繩縫痕が明瞭。胎土は暗赤褐色で細かい。	5トレー 皿
第40図 図版29	172	沖縄產 無釉陶器	鉢	口	24.4	—	—	外面に横擦きの波状文。内面繩縫痕が明瞭。胎土は赤褐色で細かい。	12トレー 1層
第40図 図版29	173	初期沖縄產 無釉陶器	鉢	口	15.8	—	—	外面に泥跡。口縁部を施剥ぎ。内面胴部は露胎。胎土は灰赤色を呈し細かく。白色のスジを少量含む。	8トレー 1層

第3表 遺物観察一覧8

辨認番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第40図 図版29	174	初期沖縄產 無釉陶器	擂鉢	底	—	10.0	—	内外面の一部に自然釉。櫛目はやや深い。外面下部に滑着防止のサンゴ目跡が付着。外面胎土にはよい赤褐色で細かく、白色粒・細かい石英粒を多く含む。	4トレ 1層
第40図 図版29	175	沖縄產 無釉陶器	擂鉢	底	—	10.4	—	櫛目は浅くやや間隔が空く。胎土は赤褐色で細かく、赤色粒が散見される。	8トレ 石積1 IIIc層
第40図 図版29	176	初期沖縄產 無釉陶器	擂鉢	底	—	10.4	—	外面に泥釉で光沢あり。内面に深い櫛目。胎土は灰褐色で細かく、白色のスジが多く含む。	12トレ 1層
第40図 図版29	177	初期沖縄產 無釉陶器	擂鉢	口	—	—	—	外面口沿以下、泥釉を施釉しやや光沢あり。内面に浅い櫛目。胎土は暗赤褐色で細かく、胎土は少量の白色粒・赤色スジ・白色スジを含む。	9トレ 1層
第40図 図版29	178	沖縄產 無釉陶器	植木鉢	底	—	22.6	—	内面難燃痕が明瞭。内底中央に9.0cmの孔あり。胎土は明赤褐色で細かい。	8トレ 溜池2 1層
第40図 図版29	179	初期沖縄產 無釉陶器	蓋	底～持	底13.8 持10.0	—	—	上面～底にかけて泥釉。下面は露胎。胎土は暗赤褐色で細かく、赤色スジ・白色スジを密に、粗い石英粒を少量含む。	4トレ II層
第41図 図版30	180	沖縄產 無釉陶器	甕	底	—	23.0	—	内面に石灰が付着。胎土は明赤褐色で細かく。僅かに極小の白砂を含む。使所として利用されたか。	8トレ 1層
第41図 図版30	181	沖縄產 無釉陶器	瓶	底	—	11.0	—	両面に泥釉。外面光沢あり。胎土は赤褐色を呈し細かい。外面上ぶくが散見される。	12トレ III層
第41図 図版30	182	沖縄產 無釉陶器	甕	口	34.7	—	—	内外面難燃痕が明瞭。口縁部直下に波状沈線を巡らす。胎土は明赤褐色で細かい。	4トレ 1層
第41図 図版30	183	沖縄產 無釉陶器	甕	口	51.0	—	—	内外面難燃痕が明瞭。胎土は明赤褐色で細かい。	12トレ 円形石組2 3層
第41図 図版30	184	沖縄產 無釉陶器	甕	口	70.2	—	—	口縁部に縦目貼付けし、胴部に貼文。胎土は赤褐色で細かい。	6トレ 1層
第41図 図版30	185	沖縄產 無釉陶器	甕	底	—	20.6	—	外面底部に一部自然釉あり。内外面底部に丁寧な指ナデ痕。胎土は赤褐色で細かい。	5トレ 石積み4 土中
第42図 図版31	186	初期沖縄產 無釉陶器	甕	口	10.8	—	—	両面に泥釉。外面光沢あり。胎土は赤褐色を呈し細かい。	5トレ III層
第42図 図版31	187	初期沖縄產 無釉陶器	甕	胴	—	—	—	輪盤成形。外面には泥釉が掛かっている。胎土は明赤褐色で細かく、白色粒と白いスジを含む。「十九」の文字が刻まれている。	2トレ 1層
第42図 図版31	188	初期沖縄產 無釉陶器	甕	底	—	16.4	—	外面に自然釉がわずかに付着。胎土は灰赤褐色で細かく、白いスジを密に含む。	12トレ III層
第42図 図版31	189	沖縄產 無釉陶器	甕	口	24.4	—	—	大型の甕。内面難燃痕が明瞭。胎土は暗赤褐色で細かい。	12トレ III層
第42図 図版31	190	沖縄產 無釉陶器	甕	口～底	13.8	20.0	43.65	口縁部内面から外面にかけて筆のようなもので施釉。貼付けた耳は2つ残存。耳は赤褐色で細かい。	4トレ 1層
第43図 図版32	191	陶質土器	網	口	16.0	—	—	口縁部が「X」の字に折れ、外面全体的に煤付着。内外面難燃痕が明瞭。胎土は外側赤褐色。内面によい黄褐色でやや軟質。赤色粒と僅かに雲母、黒色粒を含む。	12トレ 円形石組2 4・5層
第43図 図版32	192	陶質土器	網	口	17.8	—	—	口縁部が「X」の字に折れ、口縁に把手をつける。把手部に煤付着。胎土は橙色を呈し軟質。赤色粒と雲母を多く含む。	12トレ 方形石組1
第43図 図版32	193	陶質土器	火炉	口	13.2	—	—	外面に白土による圓線を施すが、残りが悪く不正確。口縁部に煤付着。胎土は白土による孔を穿つ。胎土は橙色を呈し軟質。雲母と僅かに赤・白色粒を含む。	12トレ 円形石組2 3層
第43図 図版32	194	陶質土器	急須	注口	—	—	—	外面指ナデ痕が残る。注口下部に煤付着。胎土は橙色に灰色が挿まれる様に変化し、やや硬質。櫛僅かに雲母と白色粒を含む。孔径1.3cm。	5トレ 石積み4 土中
第43図 図版32	195	陶質土器	蓋	縁み ～底	縁み径 5.1	底径 14.0	4.0	縁み高台状で神は無い。外面全体的に煤付着。内外面難燃痕が明瞭。胎土は橙色に灰黄色が挿まるよう変化し、やや軟質。赤色粒と雲母を僅かに含む。	12トレ 1層
第43図 図版32	196	陶質土器	アハシ 状製品	把手	—	—	—	両面に指ナデ痕あり。孔径0.8cm。裏面の孔付近に煤付着。胎土は淡橙色を呈し軟質。赤色粒を僅かに含む。	8トレ 1層
第43図 図版32	197	瓦質土器	蓋	底～持	底径 10.6 持径 8.2	—	1.8	外面光沢がある。内面難燃痕が明瞭。中央部分に孔が開く。胎土は緻密で、外面黒褐色。その他の部分は灰白色を呈する。孔径2.0cm。	5トレ 石積み4 土中

第3表 遺物観察一覧9

排回数 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径× 長軸(cm)	底径/ 短軸(cm)	高さ/ 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第43回 図版32	198	瓦質土器	擂鉢	口	—	—	—	内面刷毛による調整痕明瞭。胎土は灰色で細かく、粗い黑色粒を僅かに含む。	8トレス II層
第43回 図版32	199	瓦質土器	轆	口	39.0	—	—	外面刷部に牡丹唐草文に類似した文様施す。胎土は細かく、雲母と白色粒を僅かに含む。表面に赤い色でサンドイッチ状に赤い黄褐色を呈す。	6トレス II層
第43回 図版32	200	瓦質土器	焜炉	口	—	—	—	全面に痕跡が多く見られる。口脣部に燐付着。胎土は軟質で雲母、赤色粒を含みサンドイッチ状に赤色を呈す。	8トレス II層
第43回 図版32	201	本土産 硬質土器	燔烙	口	—	—	—	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、白砂粒、雲母を含む。内外面に輪縫痕あり。外間に煤が付着する。	12トレス 円形石壙 I
第43回 図版32	202	本土産 硬質土器	燔烙	底	—	—	—	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、灰色の素地を以て黄褐色でサンドイッチ状に挟み込む。赤色土粒、雲母を含む。内外面に輪縫痕痕あり。	4トレス II層
第43回 図版32	203	本土産 硬質土器	袋物	底	—	13.7	—	本土産の近世硬質土器。胎土は土師質で、白砂粒、赤色粒、黒色鉱物、雲母を含む。内外面に輪縫痕痕あり。	6トレス I層
第43回 図版32	204	宮古式土器	鉢	口	—	—	—	宮古式土器。胎土は陶器質で細かく、白砂粒や赤色を含む。内面に指頭押圧痕あり。	12トレス I層
第43回 図版32	205	宮古式土器	鉢	口	—	—	—	宮古式土器。胎土はやや陶器質で細かく、白砂粒や赤色を含む。	8トレス 底部2 II層
第44回 図版33	206	燈管	—	雁首	2.5	—	1.3	濃い緑色を呈する釉を全面に施釉。内面は霧面、火皿面は低い。材質は沖縄産施釉陶器。火皿外径1.4cm・内径1.1cm、小口外径1.2cm・内径0.8cm、重量4.3g。	梯土
第44回 図版33	207	燈管	—	完形	12.4	—	3.1	羅子部断面は円形断面。火皿手前の肩部に火種を落す落とし穴が打ち付けの影響か僅かに凹む。火皿外径1.1cm・内径0.5cm、口付外径0.7cm・内径0.3cm、重量12.8g。	2トレス I層
第44回 図版33	208	燈管	—	雁首	9.45	—	3.0	火皿外側の小口部に横2mmの孔あり。腹反しに文様あるが不明瞭。材質は真鍮。火皿外径1.4cm・内径1.1cm、口付外径1.0cm・内径0.8cm、重量12.4g。	6トレス II層
第44回 図版33	209	金属製品	簪	—	7.25	—	0.45	製差。カブは六角形を呈しやや細く。頭部断面形は六角形、竿部断面形は四角形。頭部・ムディにより竿部は一回り太く、先端は四角錐状。重量9.9g。	5トレス I層
第44回 図版33	210	金属製品	簪	—	17.05	—	0.4	側差。カブは耳かき状に形成。頭部断面形は円形、竿部断面形は六角形。頭部と竿の境は太くなり、先端はやや尖る。重量9.7g。	12トレス I層
第44回 図版33	211	金属製品	鍵	—	4.4	—	0.45	青銅製の鍵。南京金のものか。鍵頭はクローバー状にかたどられており、2.8cmの輪が伸びている。先端部1.1cmのみ筒状になっている。重量4.9g。	12トレス I層
第44回 図版33	212	金属製品	香炉	底(脚)	—	—	厚さ2.4	扇形香炉の脚部。獸脚状を呈している。全体的にやや銷が付着している。形文様・装飾は見られない。付け根部分には脚部が一部残っている。重量10.5g。	6トレス I層
第44回 図版33	213	金属製品	香炉	口	33.6	—	—	上面觀は円形を呈していた。口縁は直口する。胴部には雷文地寶鏡(どうてつ)文が施されており祭事用であることが窺える。重量530g。	6トレス I層
第44回 図版33	214	金属製品	飾り 金具	—	1.25	1.05	0.1	花を模したと思われる形状で、中央に2mmの留め釘用と思われる孔があり。重量0.4g。	6トレス I層
第44回 図版33	215	金属製品	飾り 金具	最大径 厚さ0.1	2.7	—	高さ0.75 厚さ0.1	鉢の笠部か、笠の内側に輪を固定するためと思われる溶かした金属が流し込まれており、ほぼ中央に輪部の孔が開いている。重量7.7g。	5トレス 石碑1 I層
第44回 図版33	216	金属製品	飾り 金具	—	6.0	4.25	0.1	木底型の飾り金具。完形。上下左右に4か所2~2.5mmの孔あり。全体的に鋏化が進んでおり、文様構成は判然としないが、一部に唐草文と魚々子が確認できる。流球製。重量10.2g。	4トレス I層
第44回 図版34	217	金属製品	飾り 金具	—	4.8	3.1	0.1	片側は尾巻状の八入八出、もう片側は平底状の飾り金具。2~3mmの留め釘用の孔が3つあり。唐草文と思われる文様と魚々子が僅かに確認できるが、磨化のため判然としない。流球製。重量6.7g。	5トレス 石碑1 カイタイ
第44回 図版33	218	金属製品	縁金具	—	5.1	3.3	0.1	欠損しており全体像は窺えないが、形状やサイズ感から單辯等の縁金具かと思われる。文様はなく、留め釘用と思われる2mmの孔が4つあけられている。重量5.3g。	5トレス 石碑1 カイタイ
第45回 図版33	219	金属製品	縁金具	—	4.85	4.8	0.1	床飾りや櫛などの調度品に取り付けられる縁金具か。板状製品を花咲形に縫取る。3mmの頭を打つと思われる孔3つあり。文様は見られない。重量5.3g。	5トレス 石碑1 カイタイ
第45回 図版34	220	金属製品	八双 金具	—	7.05	3.15	0.1	出八双の飾り金具。2mmの留め釘用の孔が2つあり。銷や摩耗で判別し難いが、唐草文と魚々子が確認できる。過去の焼損から鍍金が施されていたか。流球製。重量13.0g。	5トレス 石碑1 カイタイ
第45回 図版34	221	金属製品	角釘	—	15.5	1.7	—	ほぼ完形の鉄釘。頭部平面形・軸部断面は正方形で、軸部から先端にかけて先細る。重量66.5g。	5トレス I層

第3表 遺物観察一覧 10

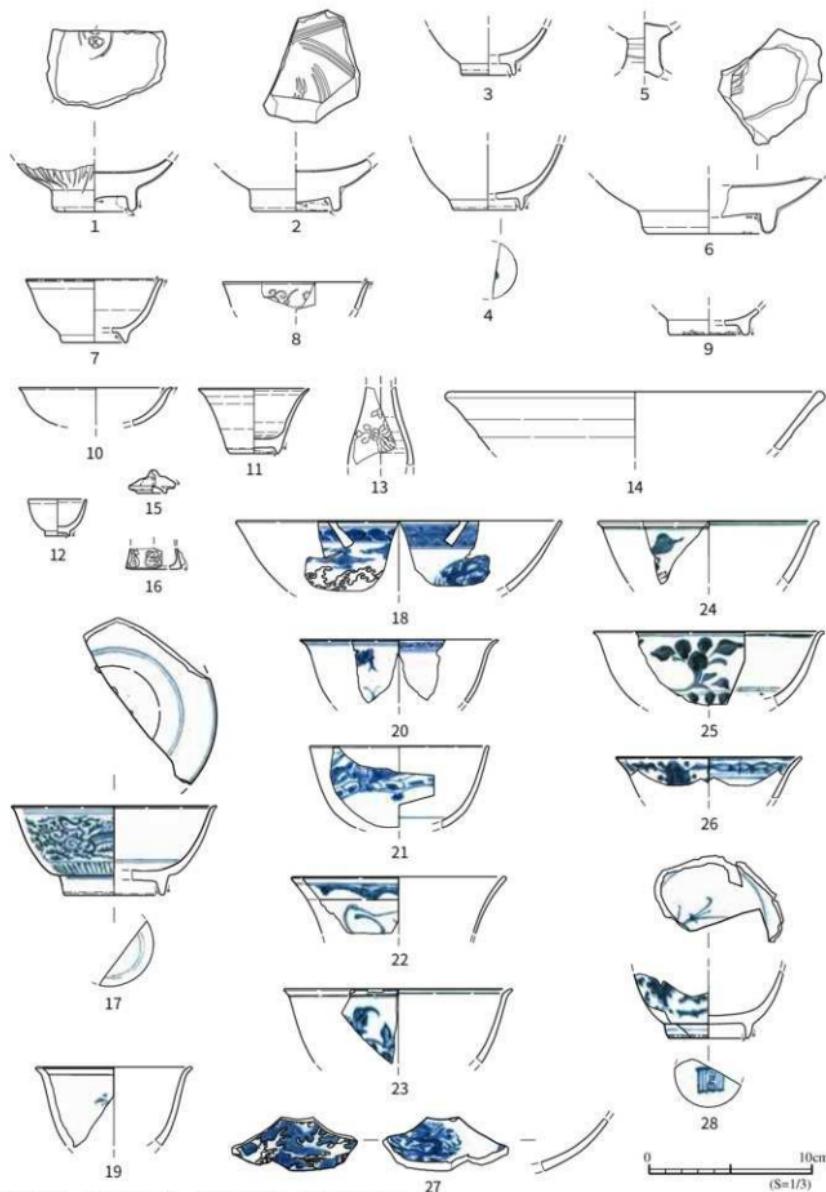
種類番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第45図 図版34	222	金属製品	角釘	—	12.6	1.25	—	完形の鉄釘。頭部平面形・輪部断面は長方形。頭部は輪部に比べやや広がるが、造り出しが印いた際に潰れたものかは不明。重量43.1g。	5トレ I層
第45図 図版34	223	金属製品	容器	完形	2.15	2.65	6.3	暗めの茶の吸入口具のカートリッジ。アルミ製と思われる。重量8.0g。	5トレ 石橋1 カイタイ
第45図 図版34	224	金属製品	スプーン	—	16.6	4.0	0.15	持ち手背面に「CHROME」と刻まれている。持ち手側先端には花が彫かれている。重量20.2g。	5トレ 石橋1 カイタイ
第45図 図版34	225	金属製品	認識票	—	4.55	1.8	0.13	日本軍の認識票。紐を通す長方形の孔が2つ見える。漢数字で「垣四四〇」、「六五二三」、「一〇」、「二」と刻印されていることが確認できる。重量9.8g。	不明
第45図 図版35	226	円盤状製品	—	—	4.0	3.65	0.9	中国産青磁の袋物の胴部を利用。両面を剥離加工。龍泉窯系で15c前～15c。重さ20.4g。	9トレ 庭園基盤 II層
第45図 図版35	227	円盤状製品	—	—	1.6	1.6	0.5	中国産色絵の碗か皿の胴部を利用。両面を剥離加工。徳化窯系で清代。重量1.8g。	5トレ III層
第45図 図版35	228	円盤状製品	—	—	1.8	1.75	0.2	中国産色絵の小碗か杯の胴部を利用。両面を剥離加工。景德鎮窯系で清代。重量1.2g。	5トレ 石橋み4 土中
第46図 図版35	229	円盤状製品	—	—	2.05	1.9	0.3	中国産青花紋の口縁部を利用。両面を剥離加工。両面を剥離加工。重量1.9g。	8トレ I層
第46図 図版35	230	円盤状製品	—	—	2.8	2.7	0.4	中国産青花皿の胴部を利用。両面を剥離加工。重量4.3g。	8トレ I層
第46図 図版35	231	円盤状製品	—	—	3.4	3.3	1.1	沖縄産無釉陶器の鉢鉢胴部を利用。両面を剥離加工。重量15.5g。	8トレ 石橋1 I層
第46図 図版35	232	円盤状製品	—	—	4.8	4.7	0.7	沖縄産施釉陶器の底部を利用。両面を剥離加工。重量32.6g。	8トレ I層
第46図 図版35	233	円盤状製品	—	—	2.55	2.35	0.4	陶質土器の胴部を利用。両面を剥離加工か。重量2.5g。	8トレ 湖池2 I層
第46図 図版35	234	円盤状製品	—	—	3.8	3.75	1.1	明朝系瓦を利用。赤色。両面を剥離加工。重量19.7g。	8トレ IIIa層
第46図 図版35	235	円盤状製品	—	—	8.3	8.2	1.8	明朝系瓦を利用。褐色。両面を剥離加工か。重量146.3g。	8トレ 石橋1 I層
第46図 図版35	236	円盤状製品	—	—	4.4	4.3	1.0	初期沖縄産無釉陶器の胴部を利用。両面を剥離加工。重量26.4g。	8トレ I層
第46図 図版35	237	円盤状製品	—	—	3.95	3.65	0.9	細粒砂岩(ニービ)を利用。両面を剥離加工か。重量16.8g。	不明
第46図 図版35	238	円盤状製品	—	—	2.60	2.45	0.30	薄緑色のガラス製品を利用。両面を剥離加工か。重量3.7g。	4トレ II層
第46図 図版35	239	骨製品	人形	手	3.6	2.6	2.6	人形の左手部分。全体的に肩から光沢があり、指の腹や手相も表現される。人差し指付け根部分に孔跡。腕と接続部に穴が開き、指先端には溝を施す。重量5.2g。	5トレ I層
第46図 図版35	240	土製品	土人形	—	3.1	2.9	1.5	骨質道真をしたたった天神人形。頭頂から底面にかけて側面にバリ残る。底面に径約2.5mmの孔を刺したと考えられる孔3つある。重量8.1g。	6トレ II層
第46図 図版35	241	ガラス製品	おはじき	—	2.0	1.85	0.35	白ガラスに茶色がマーブル状に混じる。やや歪な円形。溶かしたガラスを帶状に広げて折りたたむように成形か。片面に手のひらのよう柄が模られている。重量1.7g。	12トレ I層
図版35	242	ガラス製品	清涼飲料瓶	—	2.6	5.5	22.2	「ファンタ」の瓶。1958年～1972年頃の物か。ロゴの下にも白色で文字が見えるが不明瞭。などで肩で下半部は蛇腹状を呈している。250ml用。	12トレ I層
図版35	243	ガラス製品	酒瓶	—	2.6	5.9	20.3	茶色透明で全体的にやや艶化している。肩部に「オリオンビール」「ORION(オゴ)BEER」のエンボス。いかり肩で、底部は僅かに窄まる。口にはビニール製の封が残る。	12トレ I層
第46図 図版35	244	ガラス玉	—	—	最大径 0.46	—	0.33 0.98 mm	黄色。側面はやや横長楕円形。横位に一部欠けが見られる。孔径0.98 mm。重量0.1g。	5トレ I層
第46図 図版35	245	ガラス玉	—	—	最大径 0.5	—	0.35	青色半透明。側面は横長楕円形。横位に巻き付け成形時の筋が入る。風化により一部に白色の皮膜が覆う。孔径1.22 mm。重量0.1g。	4トレ I層

第3表 遺物観察一覧11

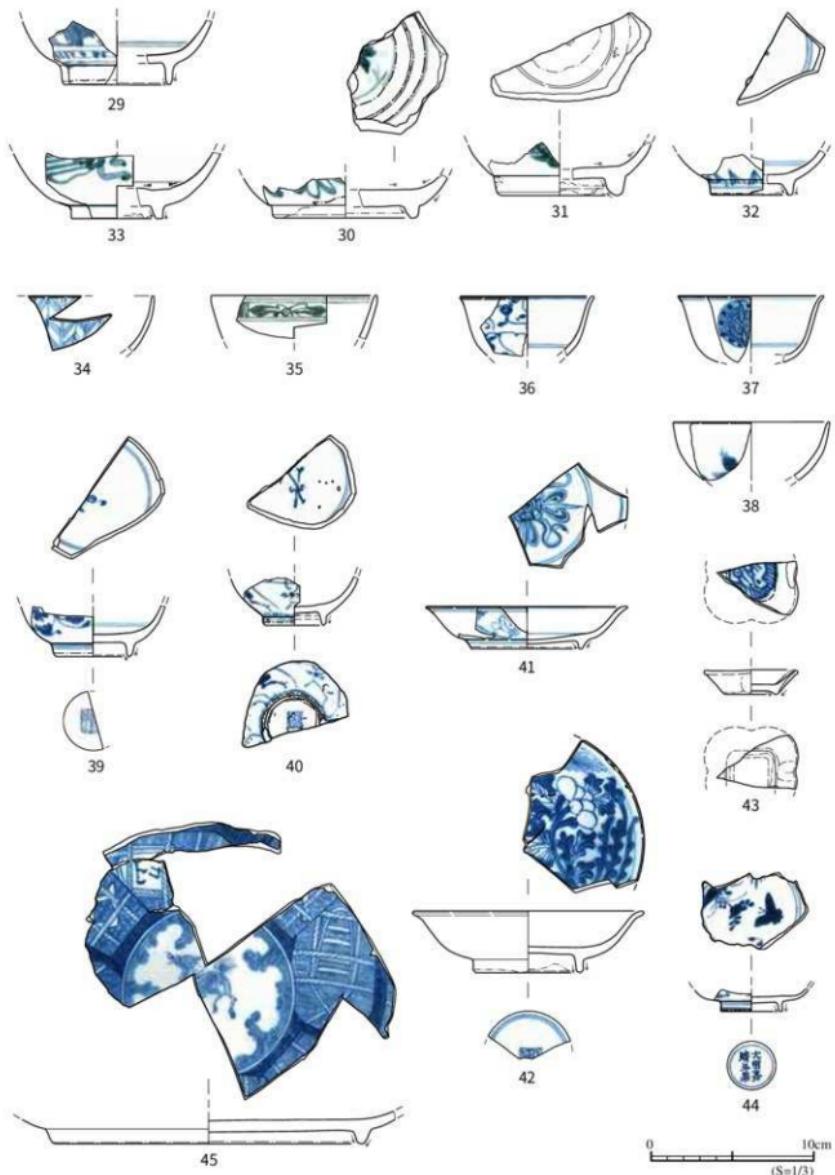
持回数 団版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径× 長軸(cm)	底径× 短軸(cm)	高さ(cm)	観察事項	出土地
第47回 団版35	246	ガラス玉	—	—	最大径 0.4	—	0.35	青緑色。側面觀はや横長椭円形。孔の内側に白化が見られる。孔 径1.13mm。重量0.1g。	4トレス 1層
第47回 団版36	247	石製品	硯	—	—	—	1.1	黒色點板岩製。両面共に縁部は削れて無くなっている。硯背側に「兵 衛」の文字。横断面の裏面形態は浅く湾曲して座んでいる。重量 40.7g。	5トレス 1層
第47回 団版36	248	石製品	蓋物 の身	口	9.2	—	—	蓋受け有り。外面部同様に網状の文様。鐵石か。既報告の石製皿（沖 縄県立埋蔵文化財センター2012）に類似する石材。重量5.4g。	9トレス 1層
第47回 団版36	249	石製品	角皿	口	—	—	—	同様の遺物を石製容器として報告（沖縄県立埋蔵文化財センター 2011）。口斜部に花唐草文。外面部に梅花唐草文。重量21.0g。	4トレス 1層
第47回 団版36	250	明朝系瓦	丸瓦	玉縁～ 端	29.9	—	1.9	赤色。玉縁部に自然軸。玉縁部4.0cm。	8トレス 屋地2 1層
第47回 団版36	251	明朝系瓦	丸瓦	玉縁～ 端	29.8	16.2	1.8	赤色。凸面は工具により面取られ、筒部外周に漆喰が付着。玉縁部 は横方向の擦れにより凹線が見られる。凹面筒部端は指撫で。玉縁 裏は工具により削除されている。玉縁部4.1cm。	6トレス 1層
第48回 団版36	252	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	—	—	1.9	赤色。ヘラ記号あり。胸部と段部の境に帯状に漆喰が付着。玉縁部 4.1cm。	12トレス 1層
第48回 団版36	253	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	—	—	1.8	赤色。ヘラ記号あり。胸部と割れ目に漆喰付着。玉縁部5.5cm。	12トレス 円形石組 2
第48回 団版36	254	明朝系瓦	丸瓦	玉縁	—	14.1	1.55	筒部にスタンプあり。玉縁部に僅かに自然軸あり。玉縁部4.4cm。	8トレス 屋地2 1層
第48回 団版37	255	明朝系瓦	軒丸瓦	瓦当	瓦当径 15.8	—	2.3	赤色。瓦当に横位の木目。瓦当裏に半円状の指ナデ痕。筒部側面に 漆喰付着。	6トレス 1層
第49回 団版37	256	明朝系瓦	軒平瓦	瓦当～ 狹端	瓦当長軸 10.9	狭幅 23.7	2.3	赤色。瓦当の上縁や、瓦当と凹面の接合に丁寧な指ナデ痕。花弁左 に横位の木目。	6トレス 1層
第49回 団版37	257	明朝系瓦	平瓦	広幅～ 狭端	—	23.5	—	赤色。凸面狭端部にやや粗いナデ調整痕。凹面中央から狭端部にかけて 漆喰付着。広端部に浅い舗絨めり痕が7つ残存。	4トレス 1層
第49回 団版38	258	近代大和瓦	万十 軒平瓦	瓦当	—	—	2.1	灰色。滑らかでやや光沢のある器面。巴部分の直径は8.1cm。巴部 には漆喰が付着している。	7トレス 1層
第49回 団版38	259	近代大和瓦	桟瓦	端～縁 (曲面)	—	22.5	—	灰色で焼し銀を呈する。胎土に濃い灰色粉を少し含む。表面部分に 帯状に漆喰が付着。	7トレス 庭園基盤 1層
第50回 団版38	260	近代大和瓦	桟瓦	縁～側面	—	—	1.85	灰色。8条1筋の柳編き沈線が4筋ひかれている。端部は滑らかで 光沢があるが側面部はザザザラしており白粉の混入が見える。凹面 は漆喰が付着しており、端部は細長く面取られている。	7トレス 1層
第50回 団版38	261	近代大和瓦	平瓦	縁～側面	—	—	1.75	灰色で焼し銀を呈する。胎土に濃い灰色粉をわずかに含む。端部に 不明瞭だが「〇石 落田」のスタンプ。	4トレス 1層
第50回 団版38	262	近代大和瓦	平瓦	端	—	—	1.7	やや褐色で焼し銀を呈する。凹面に柳目。胎土に赤色粒と灰色のヌ ジを多く含む。	9トレス 庭園基盤 II層
第50回 団版38	263	近代大和瓦	平瓦	端	—	—	1.9	灰色。焼し銀を呈する。胎土に白色粒、黒色粒を僅かに含む。凹面 には柳編き沈線が4筋ひかれしており、端部の角は面取られている。	7トレス 庭園基盤 1層
第50回 団版38	264	近代大和瓦	役瓦	—	—	—	2.0	灰色。焼し銀を呈する。胎土に白色粒、灰色粒、赤色粒を含む。裏 面に指撫で痕あり。裏面には文様が見られるが、残存が僅かなため 判別不能。端部には漆喰が付着している。	7トレス 屋地2 II層
団版38	265	近代大和瓦	軒平瓦	瓦当	—	—	—	灰色。焼し銀を呈する。胎土に赤色粒、黒色粒、石英を少し含む。 形状から軒平瓦とした。「明石瓦良」と思われるスタンプあり。	7トレス 1層
団版39	266	近現代瓦	引掛け 瓦	上端	—	—	2.0	赤色。桟瓦状の曲面あり。上端部と右側面に漆喰付着。	4トレス 1層
団版39	267	近現代瓦	引掛け 瓦	下端	—	—	1.8	赤色。外面に瓦を引掛けたと考えられる突起1つ。下部には粘土シ ワあり。内面部に指ナデ痕、下部には横位に漆喰付着。下端部にはめ込 み留めと思われる突起あり。	4トレス 1層
団版39	268	近現代瓦	引掛け 瓦	下端	—	—	2.2	赤色。外面に瓦を引掛けたと考えられる突起2つ。下部には粘土シ ワあり。内面部に指ナデ痕、縦位と横位に漆喰付着。下端部にはめ込 み留めと思われる突起あり。	4・6トレス 1層
第50回 団版39	269	埠	—	—	25.0	24.4	3.4	赤色。正方形の平面敷きタイプ。表面は丁寧に仕上げられ、裏面は 凹凸が多い。	4トレス 1層

第3表 遺物観察一覧 12

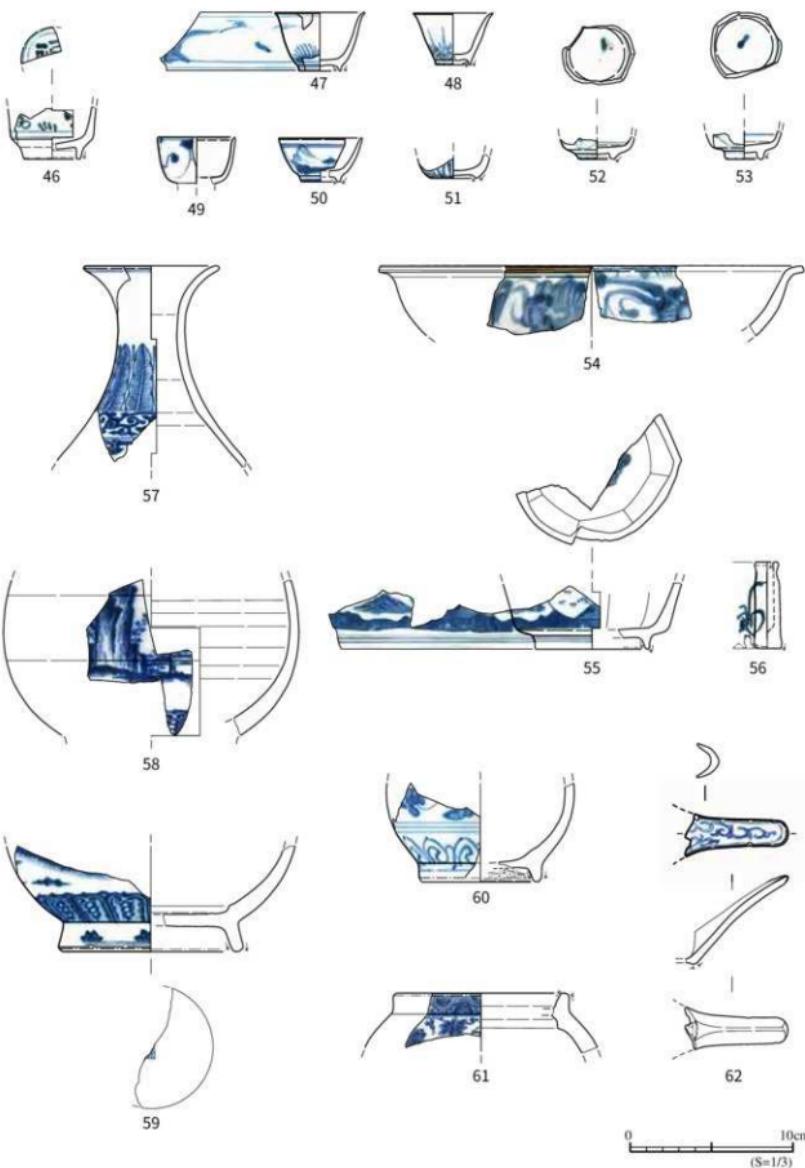
補足番号 図版番号	遺物 No.	種別	器種	部位	口径 / 長軸(cm)	底径 / 短軸(cm)	器高 / 厚さ(cm)	観察事項	出土地
第51図 図版40	270	銭貨	—	—	外径 2.50	孔径 0.59	0.14	唐國通宝(南唐・959年)。鋒化と摩耗により文字はかなり不明瞭だが、書体は篆書。重量 3.7g。	6トレス I層
第51図 図版40	271	銭貨	—	—	外径 1.94	孔径 0.58	0.07	乾隆通宝(清・1736年)。全体的に摩耗し、銭文は判読し難い。重量 1.0g。	5トレス I層
第51図 図版40	272	銭貨	—	—	外径 1.82	孔径 0.51	0.05	嘉慶通宝(清・1796年)。全体的に摩耗し、銭文は判読し難い。重量 1.1g。	5トレス I層
第51図 図版40	273	銭貨	—	—	外径 2.42	孔径 0.53	0.09	寛永通宝。古寛永(Ⅰ期、日本、初鋤年 1636年)。残存状態は良好。重量 3.1g。	12トレス I層
第51図 図版40	274	銭貨	—	—	外径 2.36	孔径 0.54	0.09	寛永通宝。古寛永(Ⅰ期、日本、初鋤年 1636年)。摩耗しており、銭文はやや不明瞭。重量 2.7g。	5トレス II層
第51図 図版40	275	銭貨	—	—	外径 2.47	孔径 0.61	0.09	寛永通宝。新寛永(Ⅲ期、日本、初鋤年 1697年)。「永」と「寛」の間に摩耗と考えられる1mmの穴あり。重量 3.3g。	12トレス I層
第51図 図版40	276	銭貨	—	—	外径 2.43	孔径 0.57	0.11	寛永通宝。新寛永(Ⅲ期、日本、初鋤年 1697年)。重量 3.4g。	12トレス I層
第51図 図版40	277	銭貨	—	—	外径 2.35	孔径 0.47	0.12	世高通宝(琉球、初鋤年 1461年)。「世」の部分が彫曲している。重量 3.3g。	6トレス I層
第51図 図版40	278	銭貨	—	—	外径 1.17	孔径 0.72	0.05	堀目銭。バリが残っている。重量 0.2g。	12トレス I層
第51図 図版40	279	銭貨	—	—	外径 2.05	孔径 0.62	0.06	無文銭。重量 1.7g。	8トレス 湖池2 II層
第51図 図版40	280	銭貨	—	—	外径 1.94	孔径 0.66	0.01	無文銭。重量 1.2g。	12トレス I層
第51図 図版40	281	銭貨	—	—	外径 2.15	孔径 —	0.3	椎首銭。鋒化しており、中央の孔も鋒で埋まっている。重量 3.4g。	5トレス I層
第51図 図版40	282	銭貨	—	—	外径 2.27	孔径 —	0.09	一錢銅貨。「大正十年」の鋤あり。重量 3.7g。	8トレス 湖池2 II層
第51図 図版40	283	銭貨	—	—	外径 1.93	孔径 —	0.16	1セント。1953年製。ベンダントに加工していたと思われる2.3mmの孔が開けられている。赤いインクのような汚れが付着。重量 3.1g。	4トレス II層
第51図 図版40	284	銭貨	—	—	外径 1.91	孔径 —	0.15	1セント。1964年製。鋒は見られるものの、文字は読み取れる。重量 3.1g。	5トレス I層



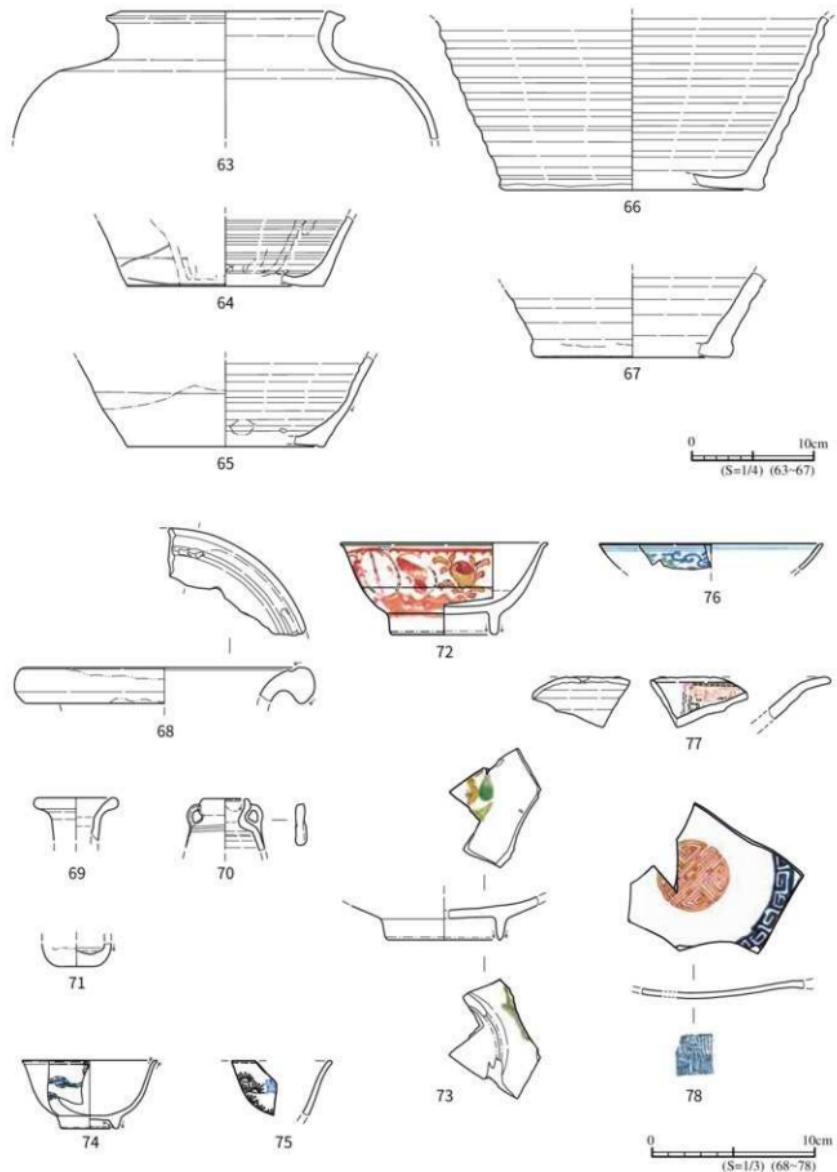
第30図 中国産青磁、中国産白磁、中国産青花1



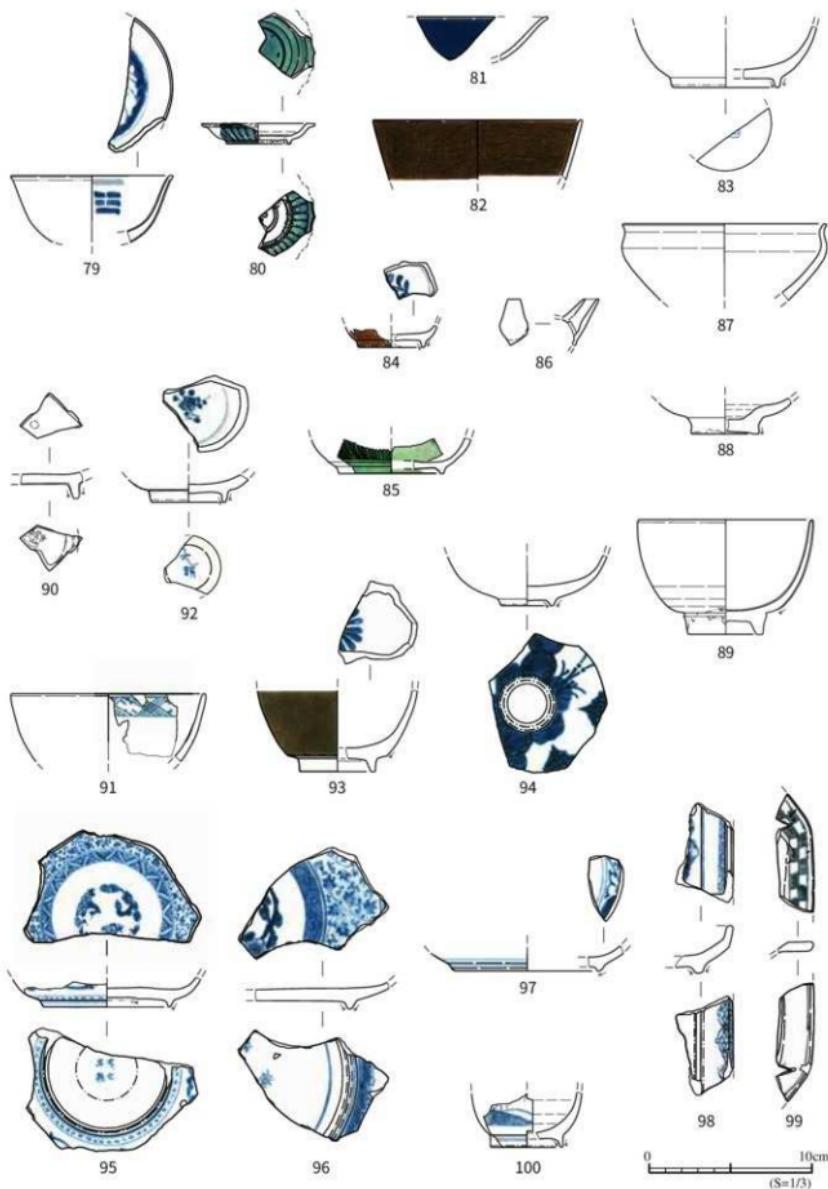
第31図 中国産青花2



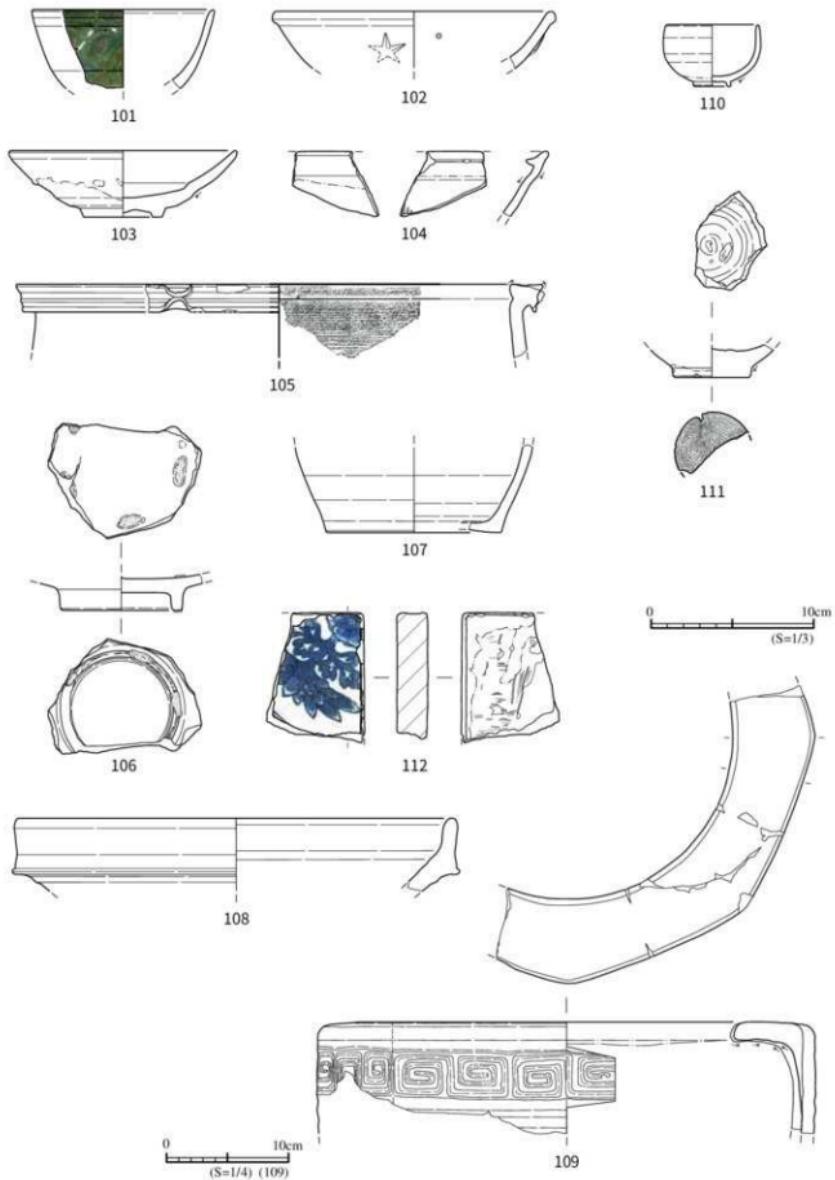
第32図 中国産青花3



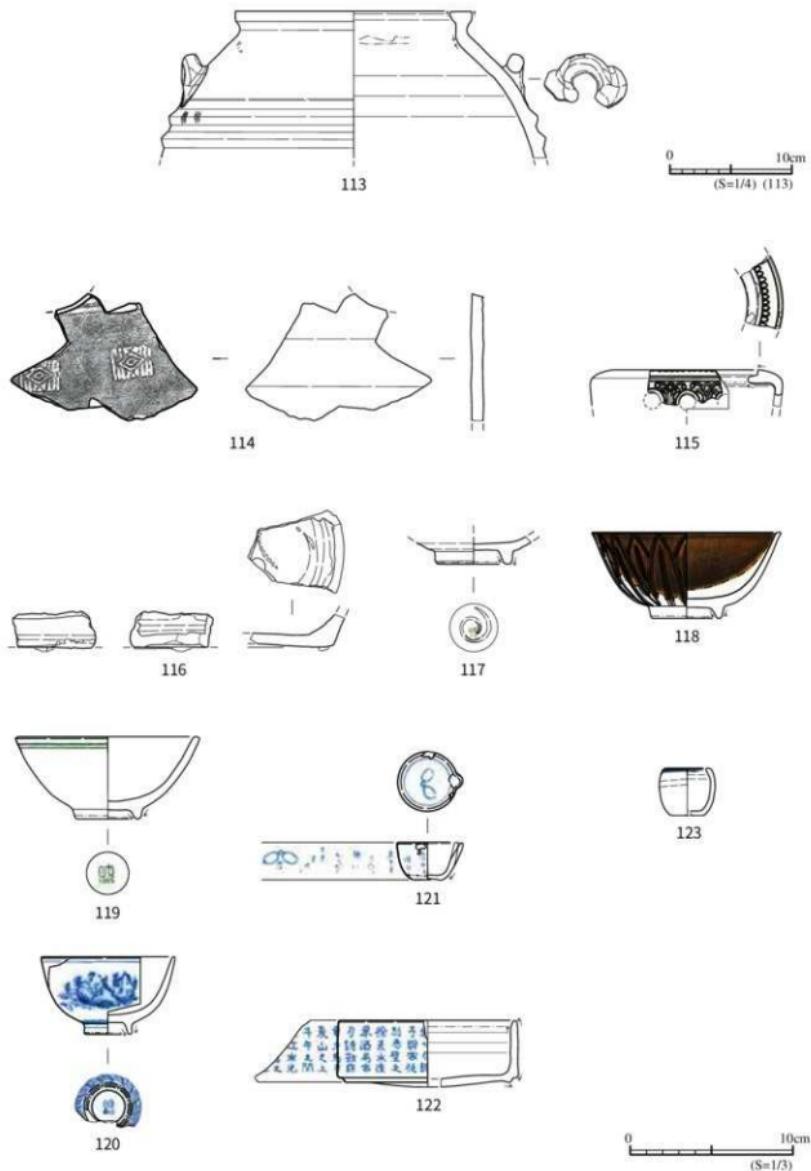
第33図 中国・タイ産褐釉陶器、その他の輸入陶磁器 1



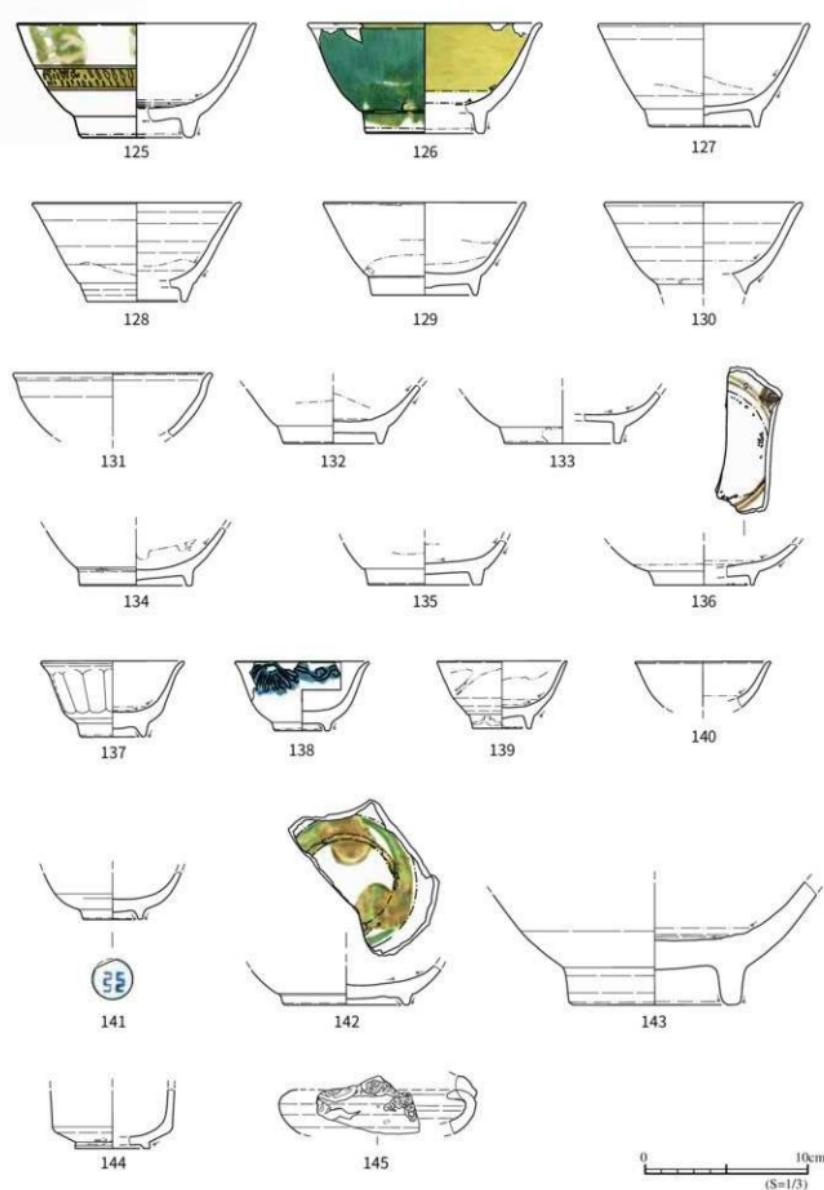
第34図 その他の輸入陶磁器2、本土産陶磁器1



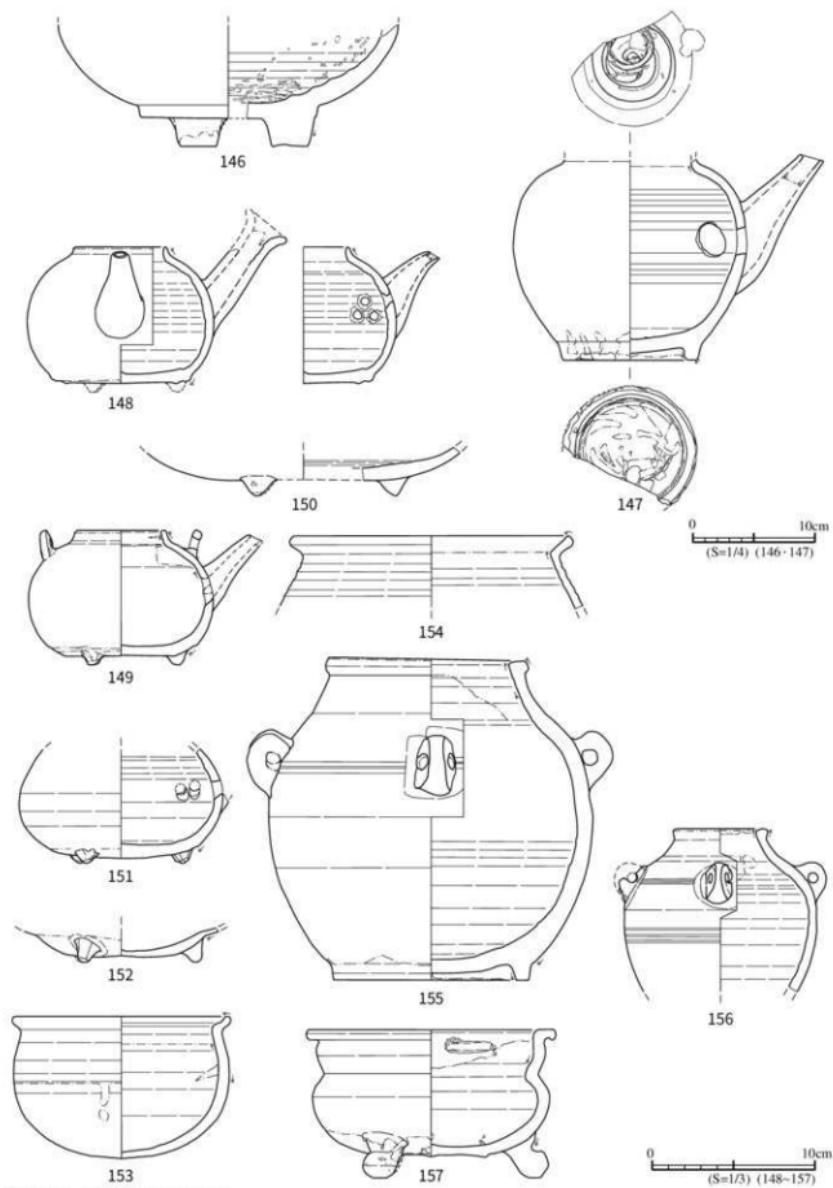
第35図 本土産陶磁器2



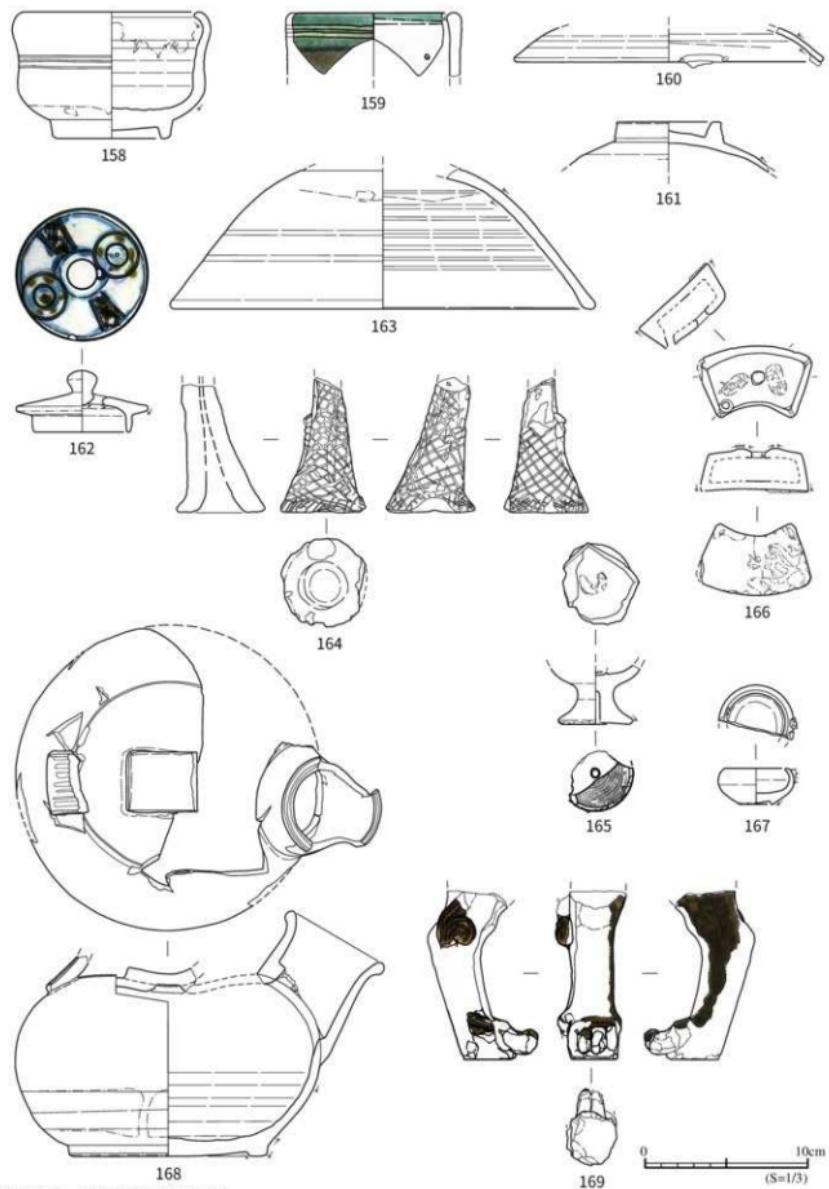
第36図 本土産陶磁器3



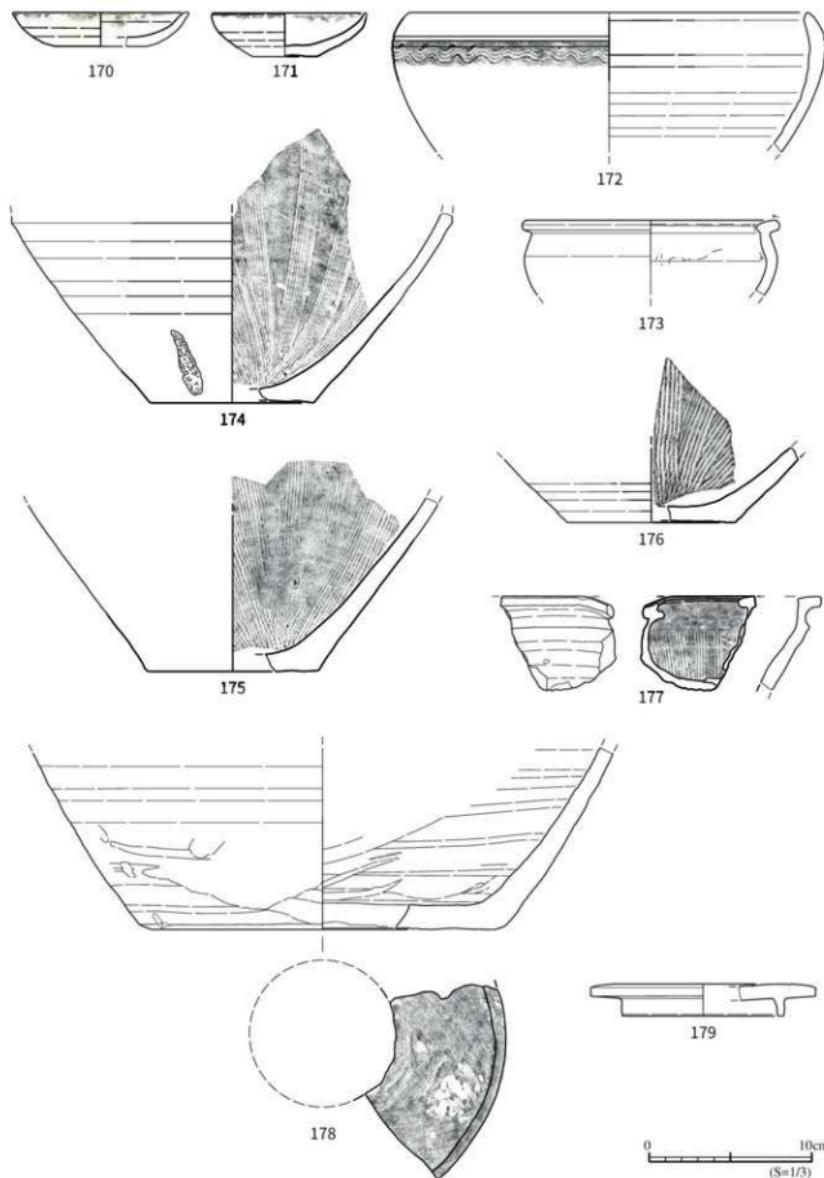
第37図 沖縄産施釉陶器 1



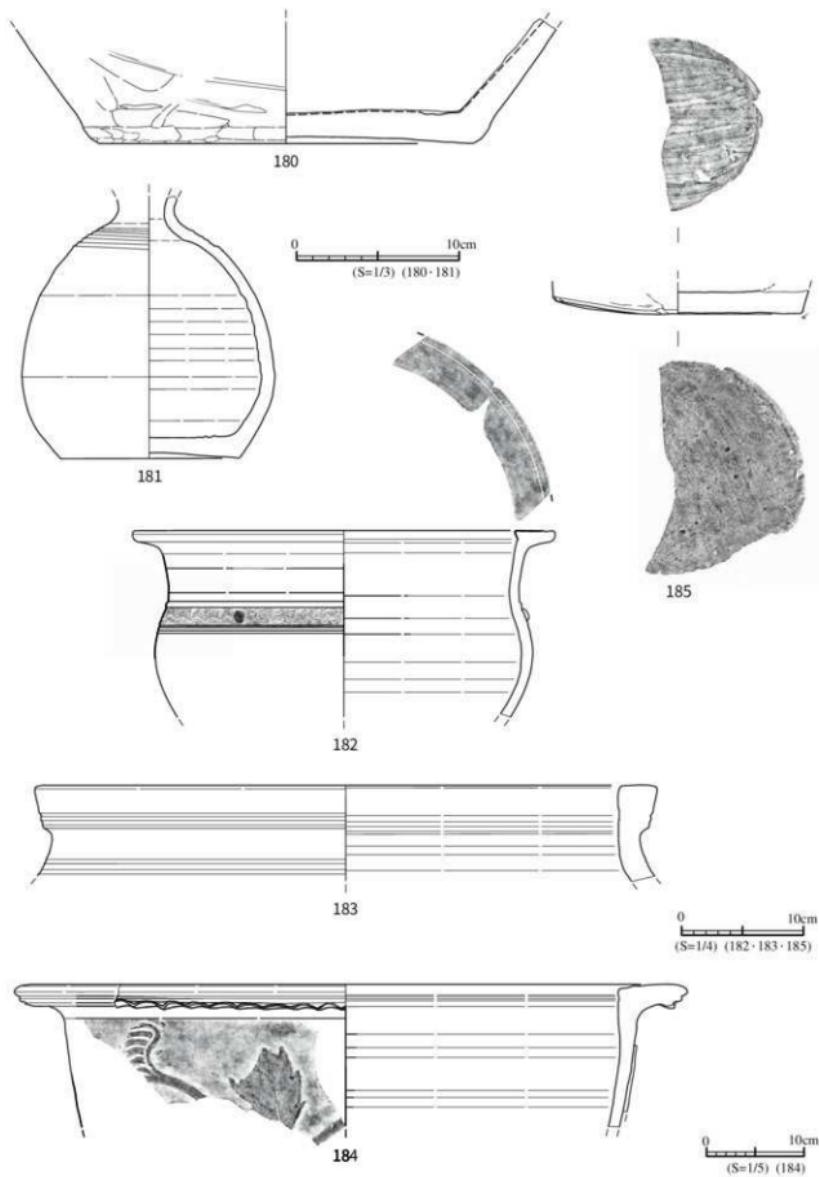
第38図 沖縄産施釉陶器 2



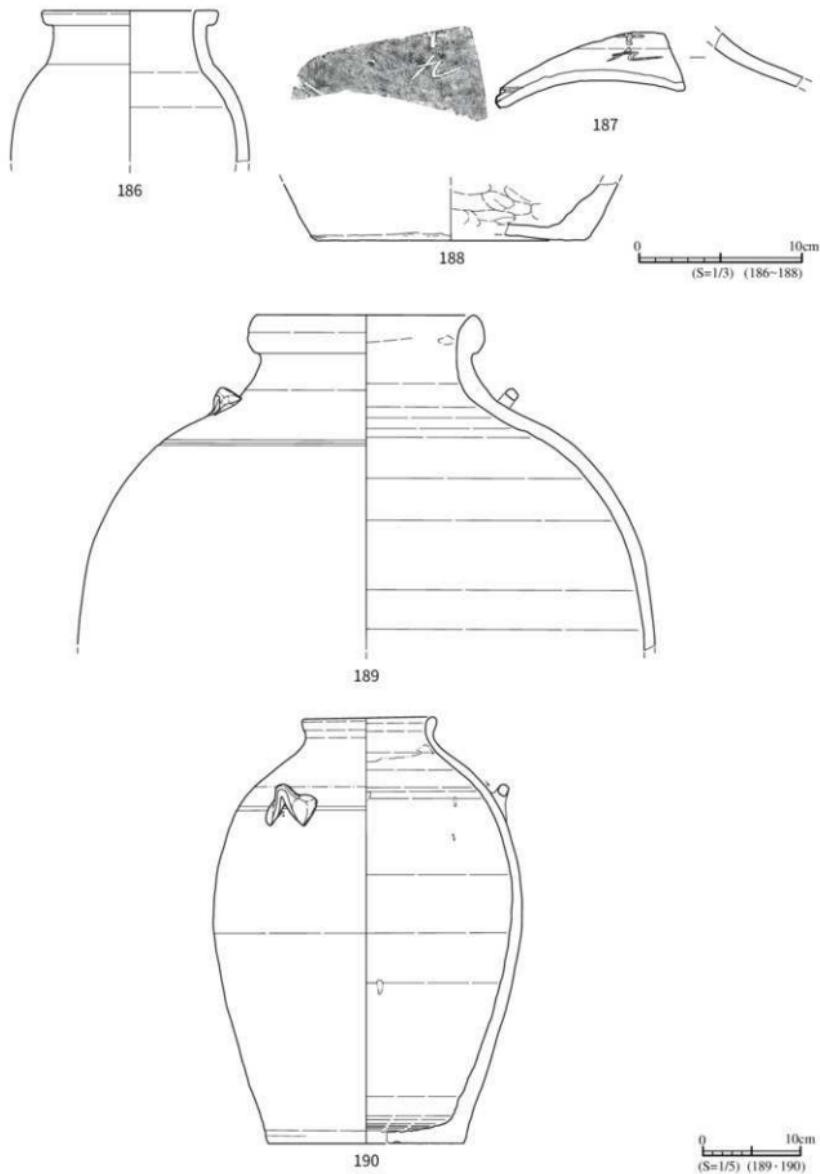
第39図 沖縄産施釉陶器 3



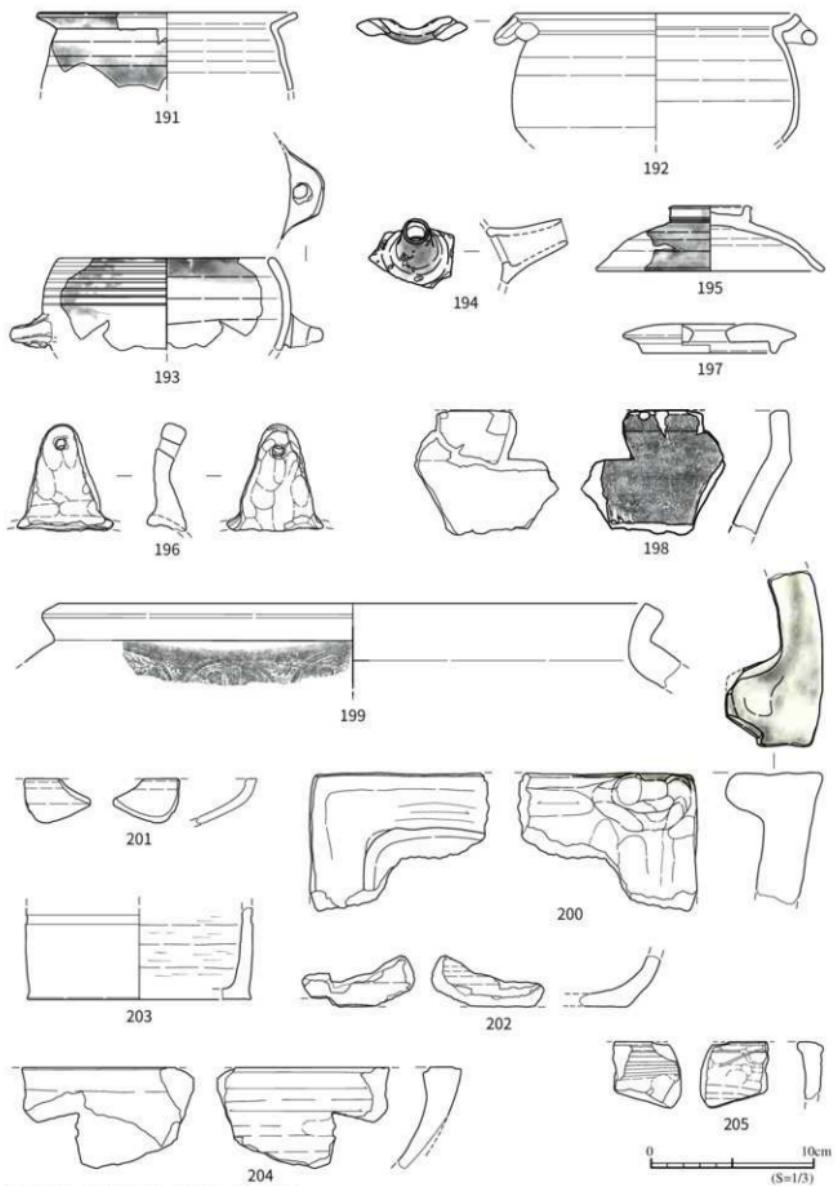
第40図 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器1



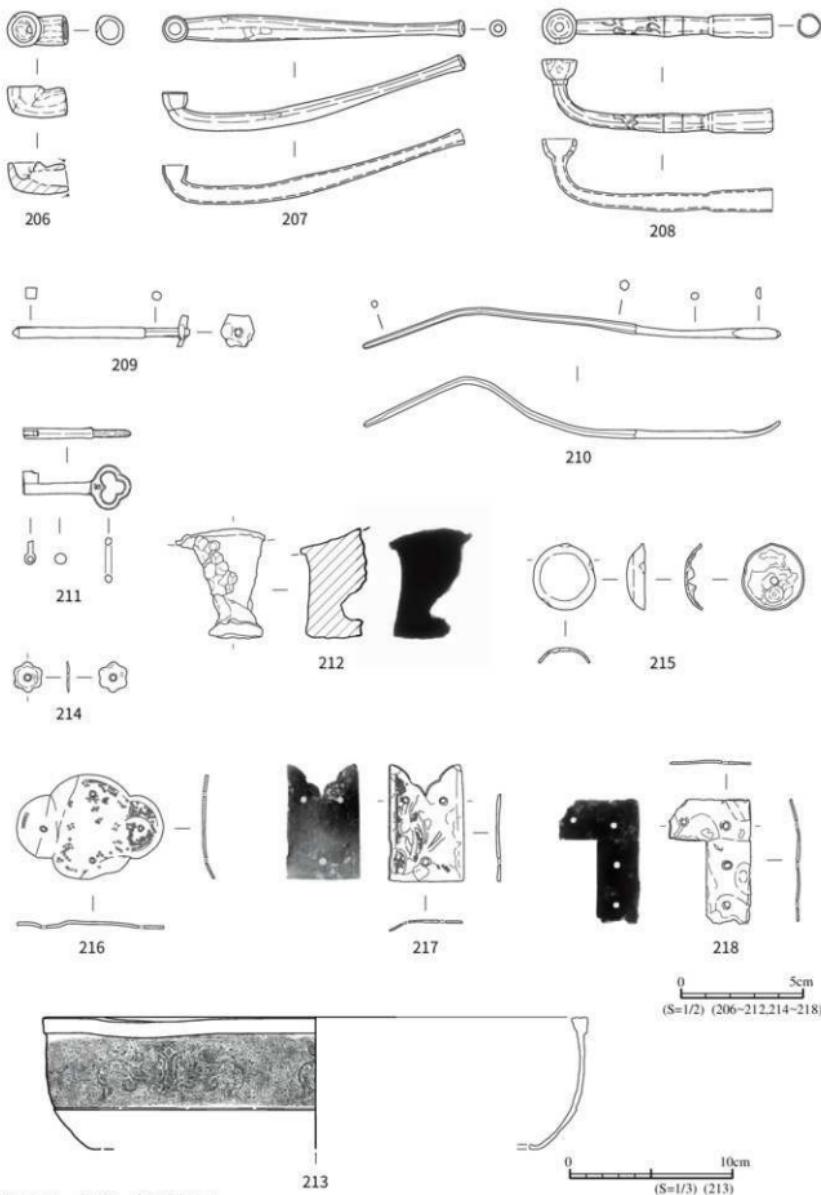
第41図 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器2



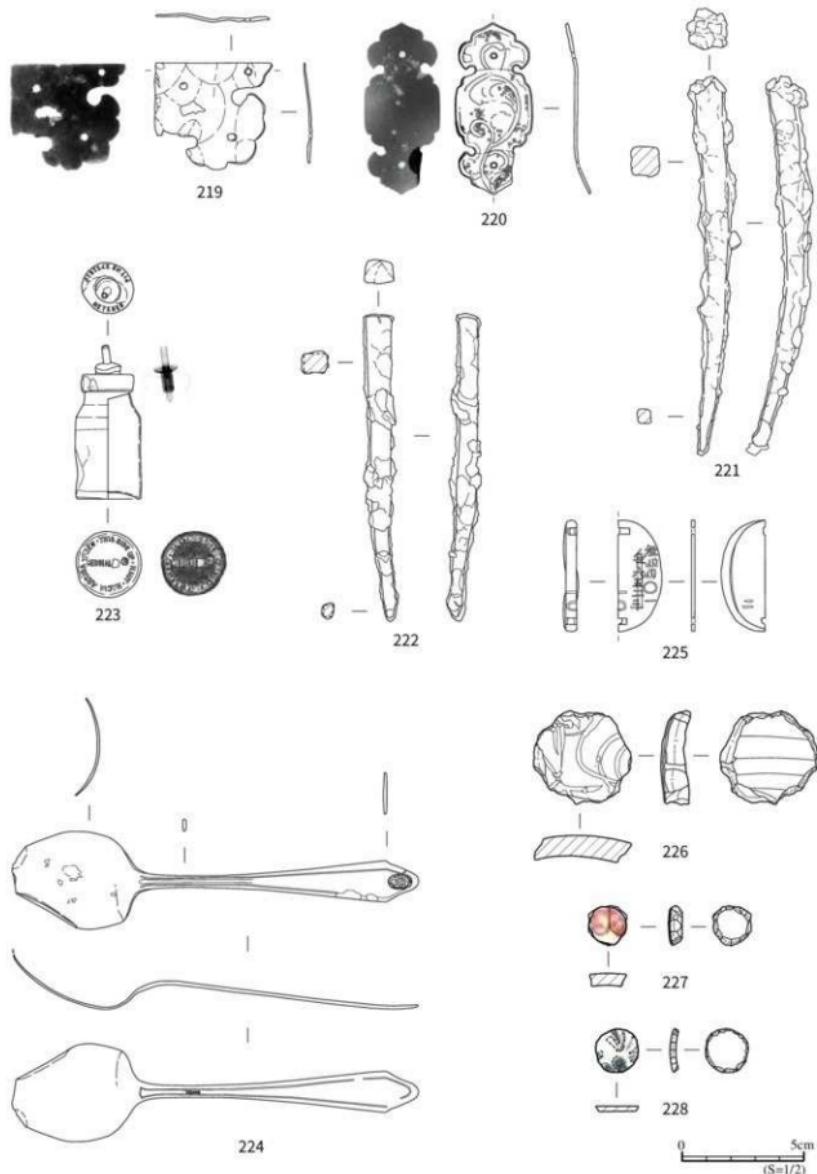
第42図 初期沖縄無釉陶器・沖縄無釉陶器3



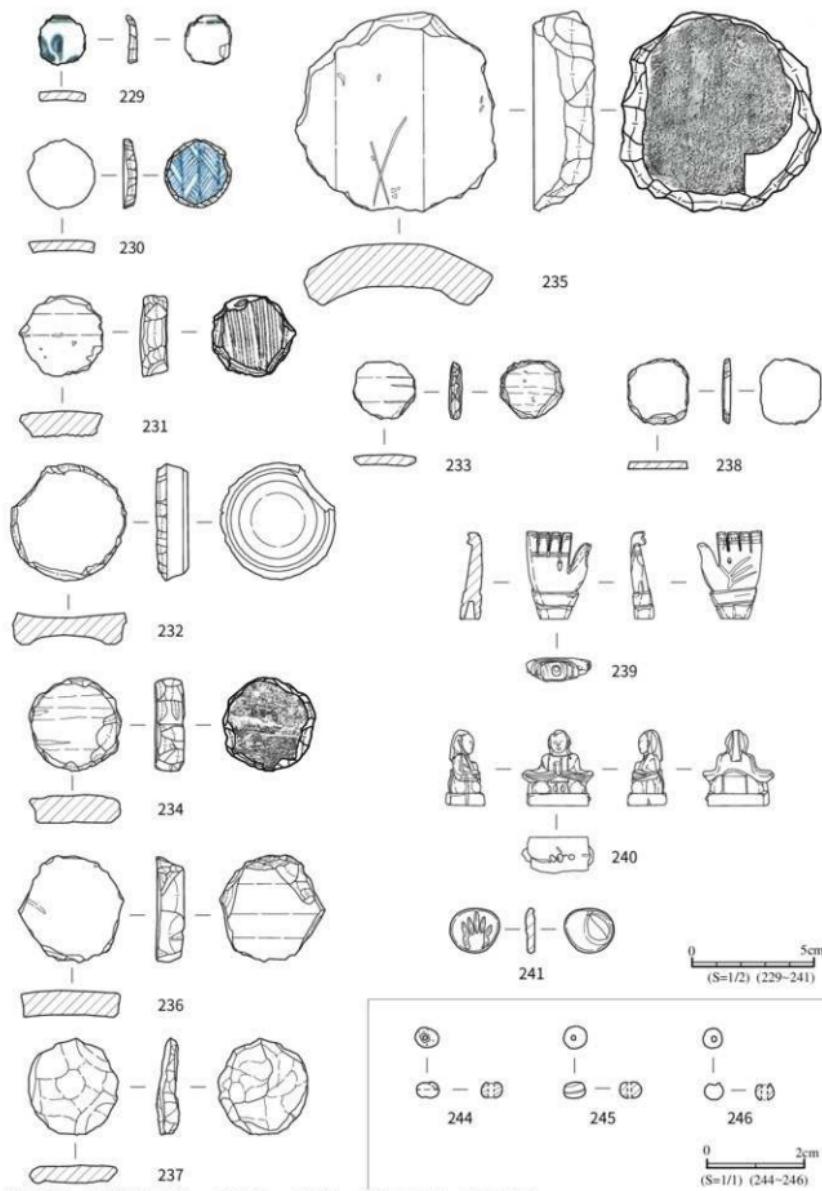
第43図 陶質土器、瓦質土器、土器



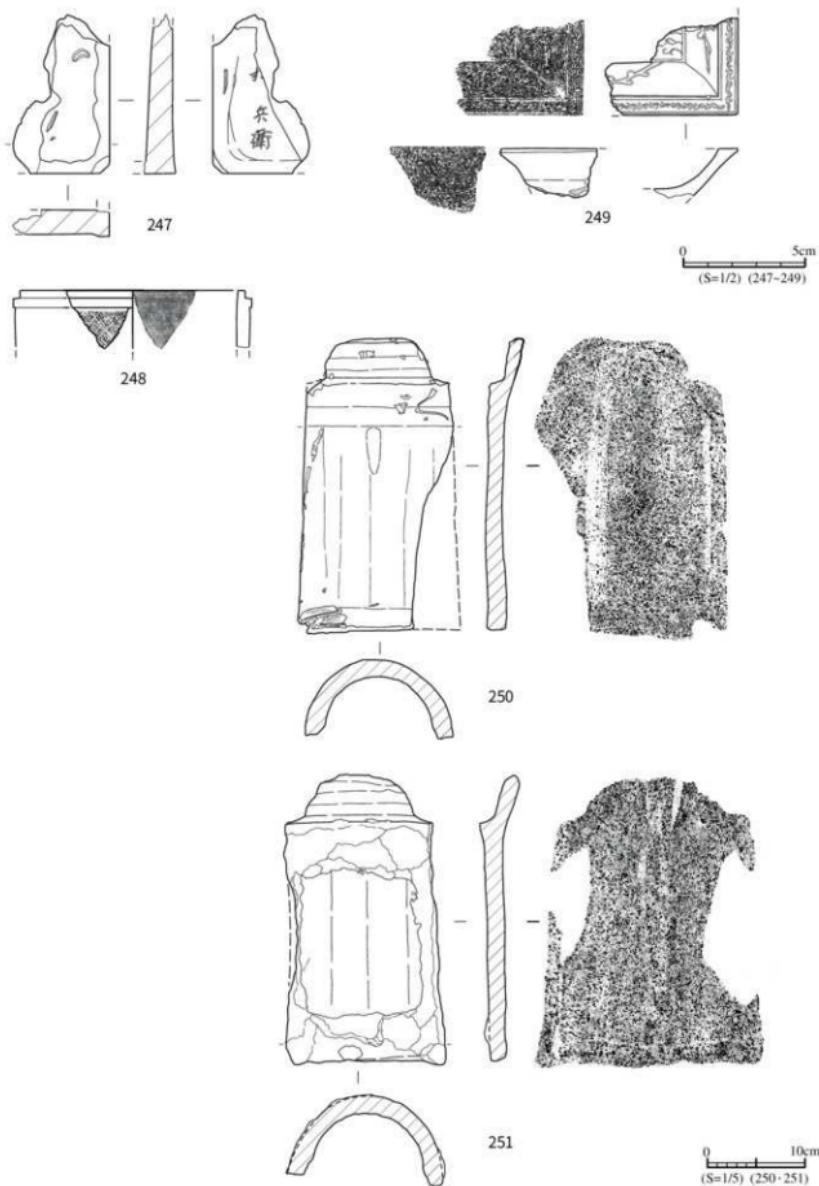
第44図 煙管、金属製品1



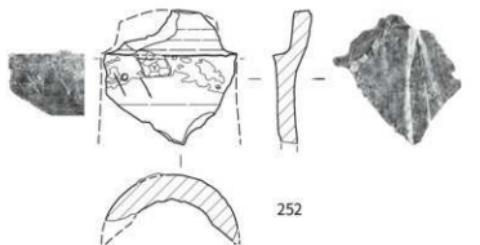
第45図 金属製品2、円盤状製品1



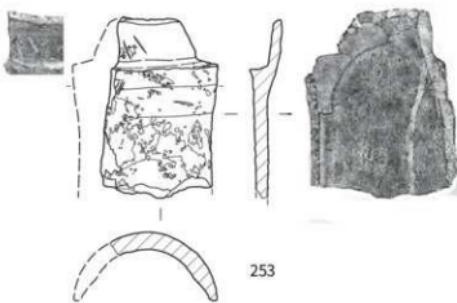
第46図 円盤状製品2、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉



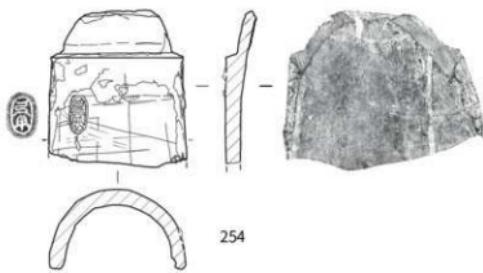
第47図 石製品、瓦1



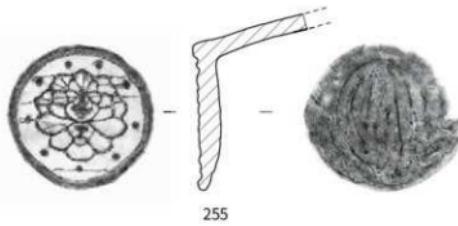
252



253



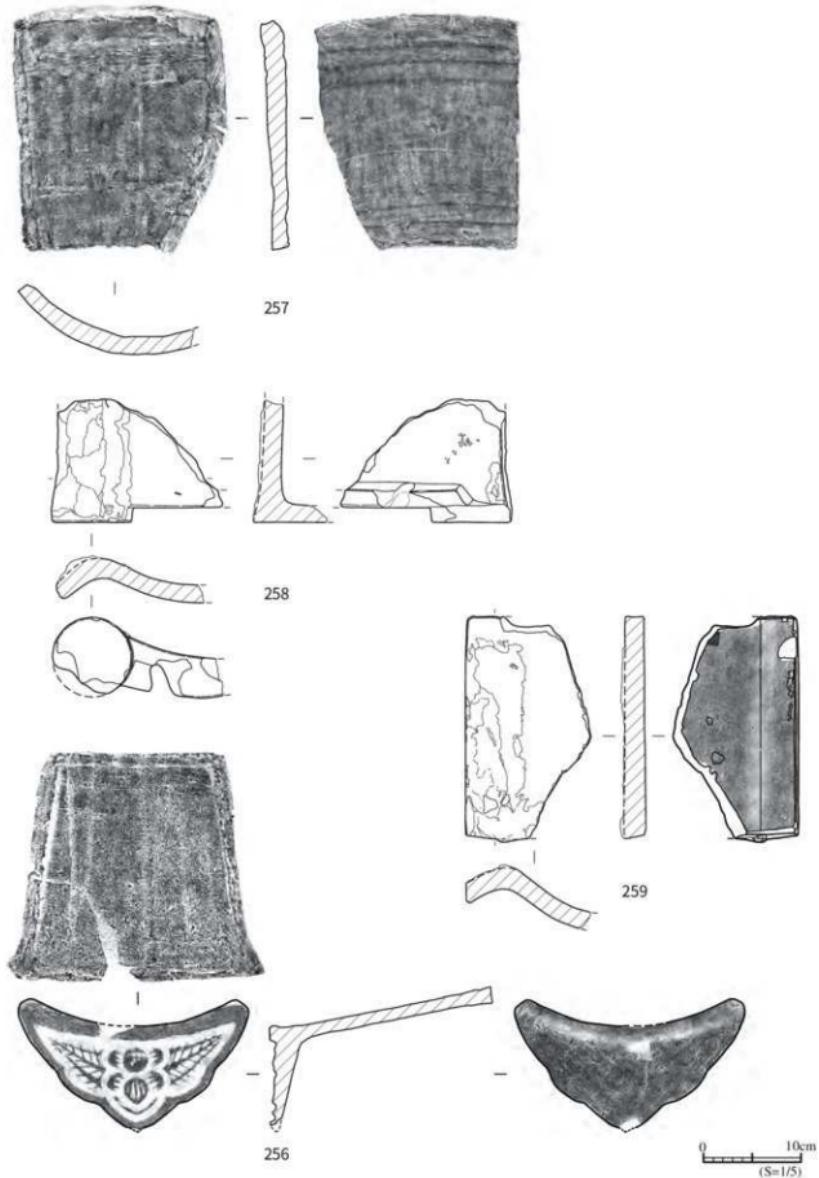
254



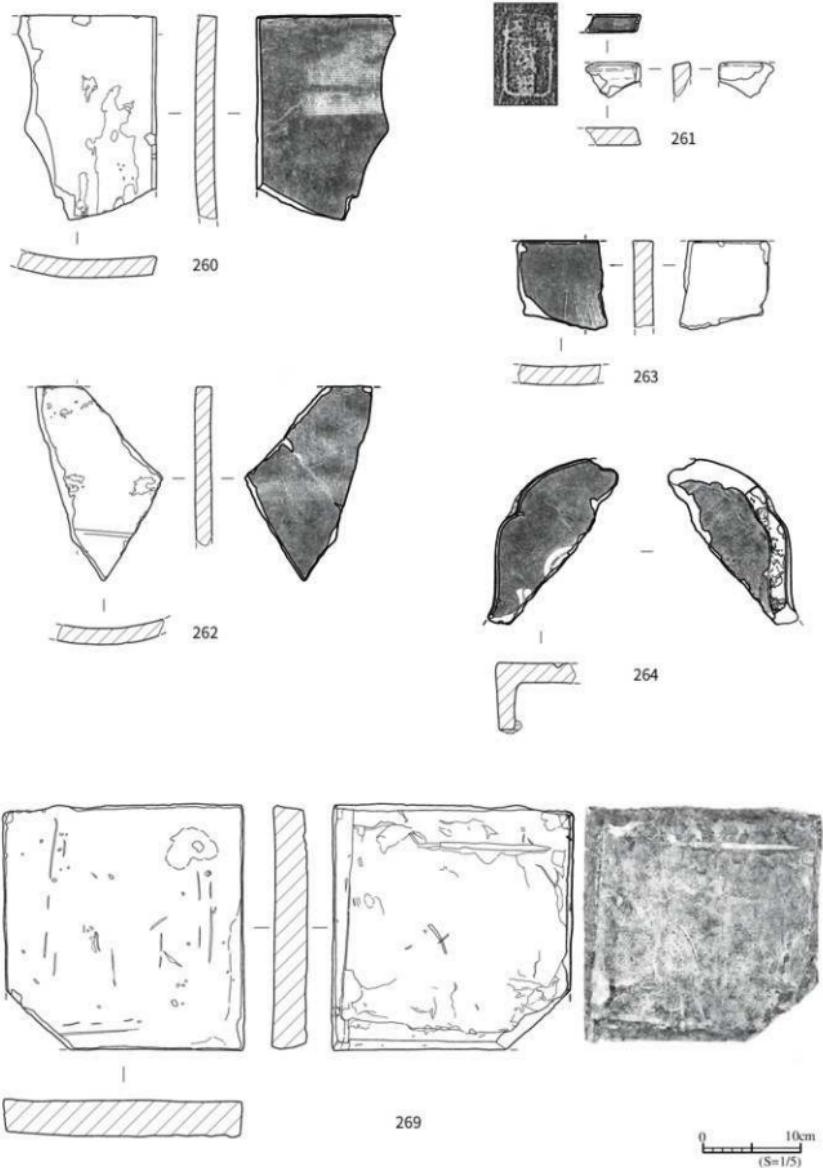
255

0  
 $S=1/5$   
 10cm

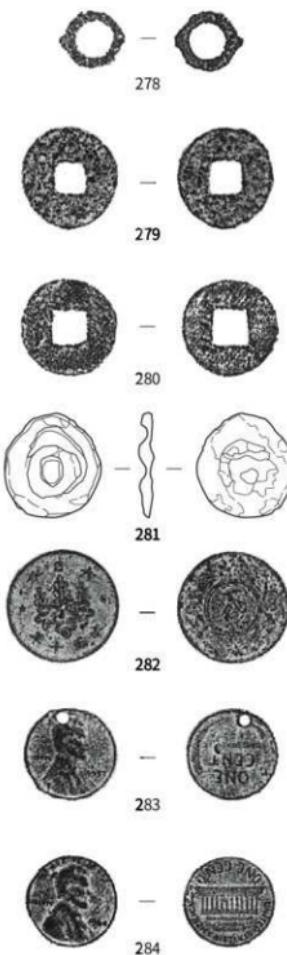
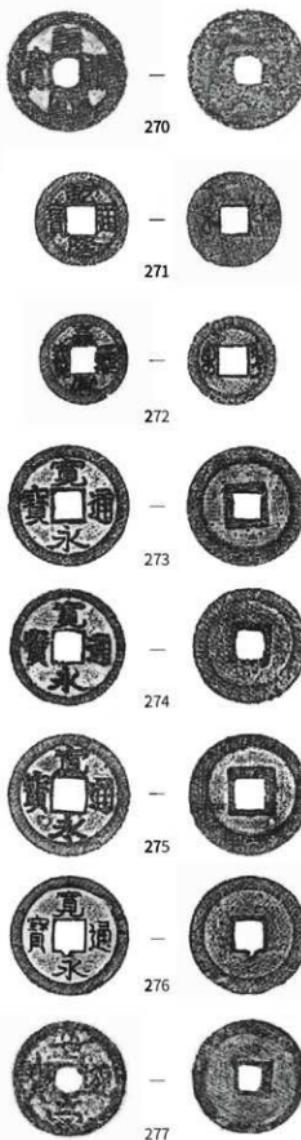
第48図 瓦2



第49図 瓦3



第50図 瓦4、磚



0 2cm  
(S=1/1)

第51図 錢貨



図版 20 中国産青磁、中国産白磁、中国産青花 1



図版 21 中国産青花 2



図版 22 中国産青花 3、中国産褐釉陶器 1



図版 23 中国産褐釉陶器 2、タイ産褐釉陶器、他の輸入陶磁器



図版 24 本土産陶磁器 1



図版 25 本土産陶磁器 2



図版 26 沖縄産施釉陶器 1



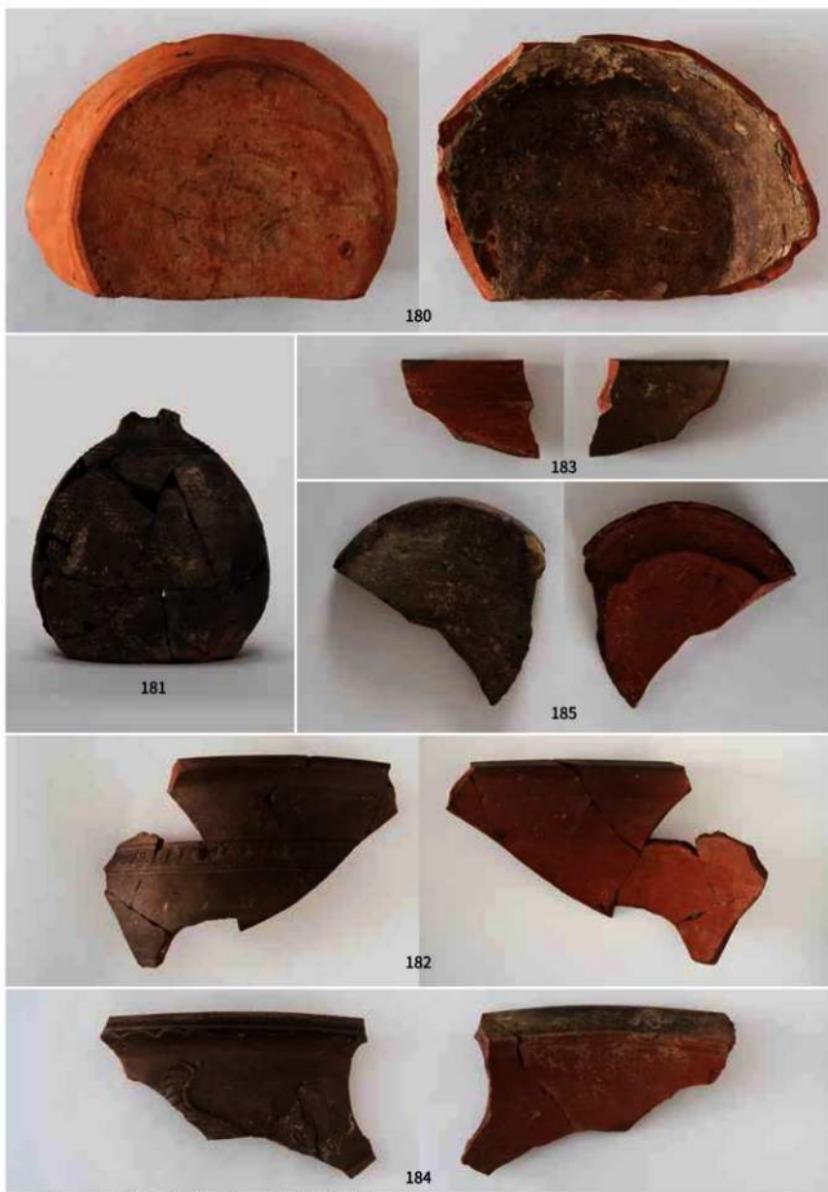
図版 27 沖縄産施釉陶器 2



図版 28 沖縄産施釉陶器 3



図版 29 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 1



図版 30 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 2



図版 31 初期沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器 3



図版 32 陶質土器、瓦質土器、土器



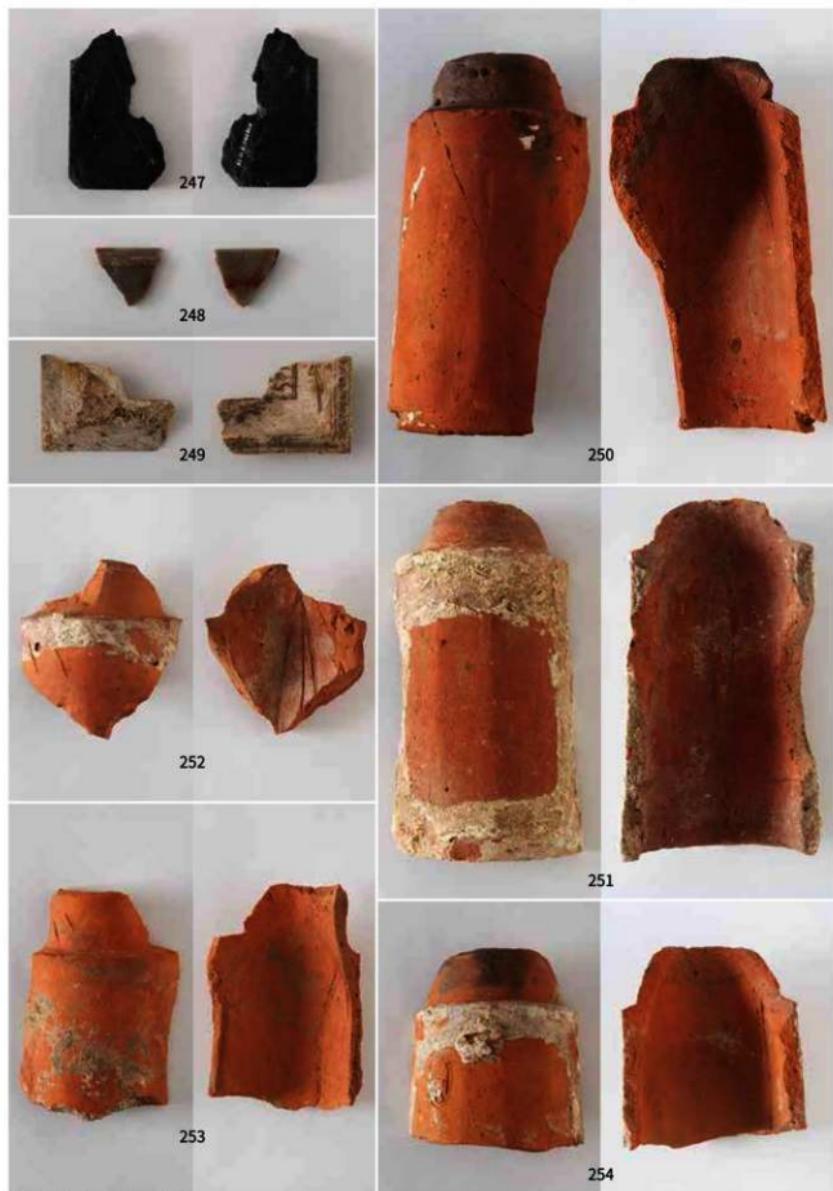
図版 33 煙管、金属製品 1



圖版 34 金屬製品 2



図版 35 円盤状製品、骨製品、土製品、ガラス製品、ガラス玉



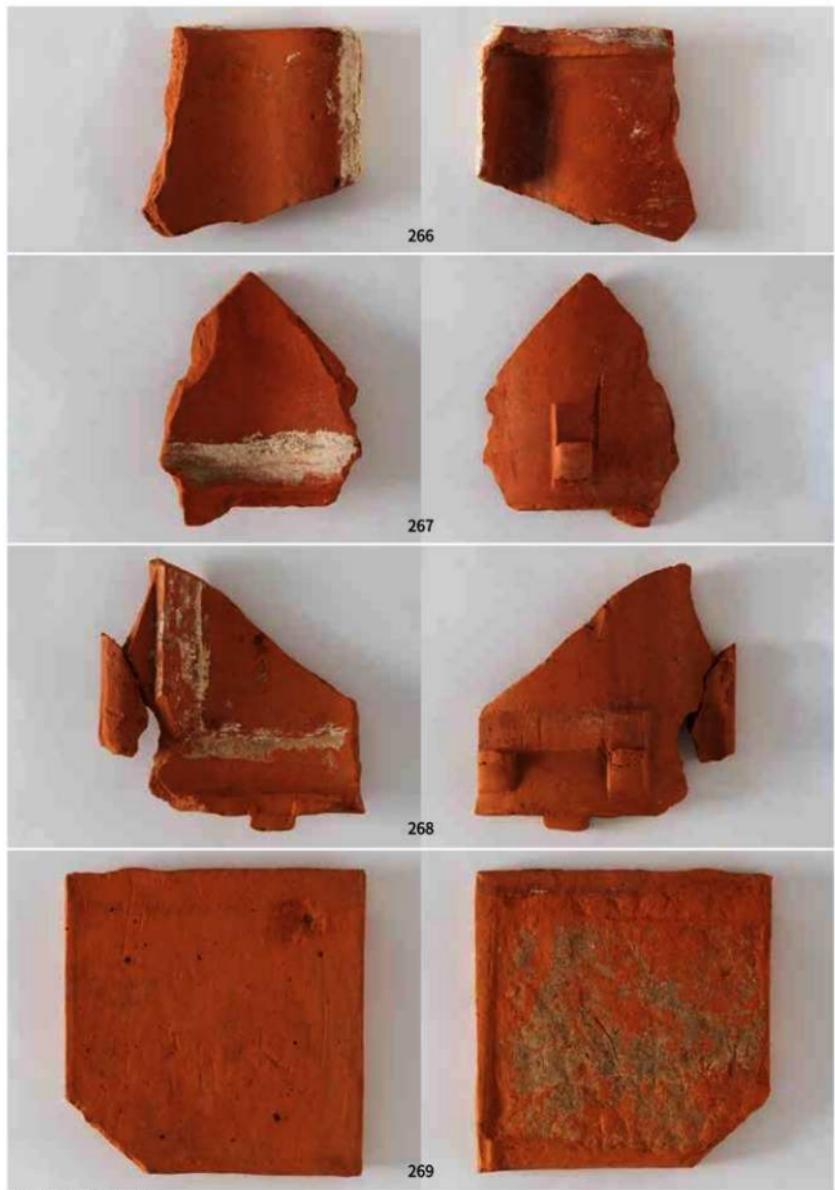
圖版 36 石製品、瓦 1



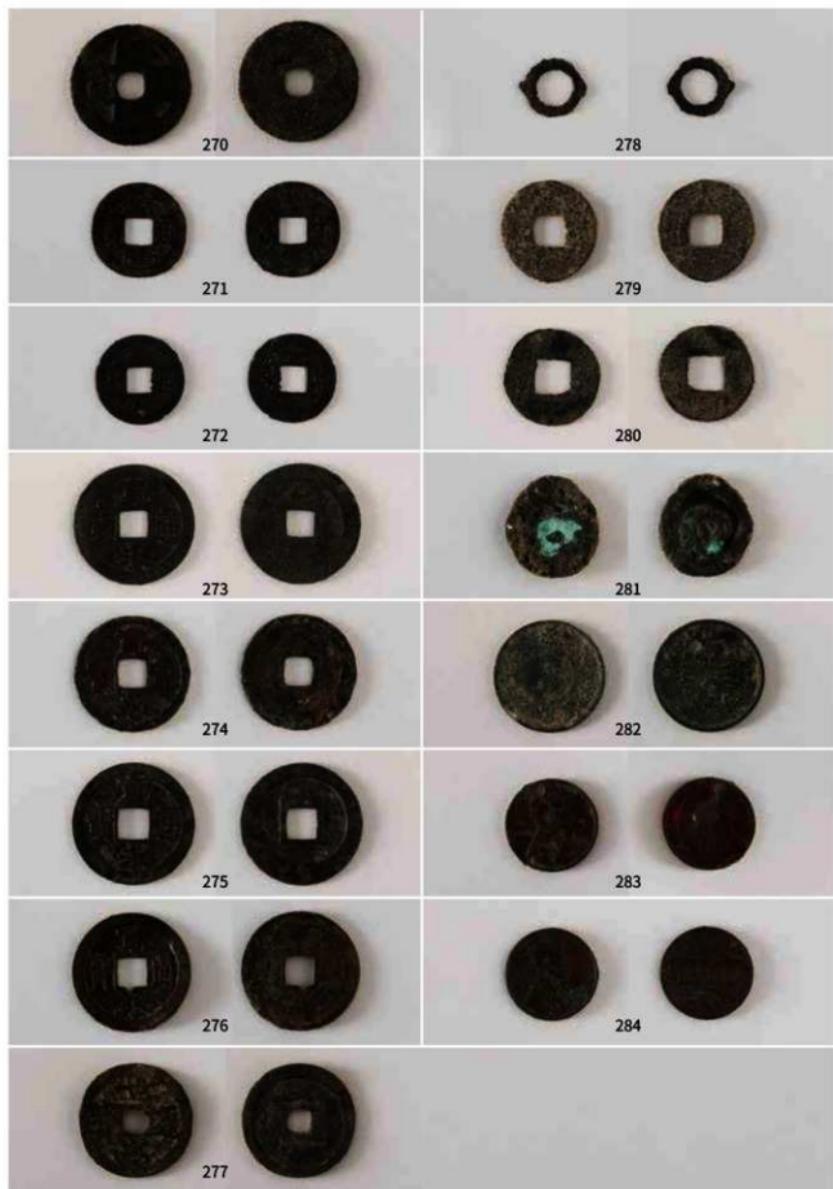
図版 37 瓦 2



圖版 38 瓦 3



図版 39 瓦 4、埠



図版 40 錢貨

# 第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

平成29（2017）および令和元（2019）年度の発掘調査にて採取した土壤サンプルについて、令和2（2020）年度に自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

本報告では、溜池2および円形石組1、方形石組1の土壤を対象に、古植生や遺構の使用状況に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・寄生虫卵分析・微細物分析を実施した。

## 第1節 試料

分析試料は、溜池内堆積土（試料番号1）と、円形石組1（試料番号2）、方形石組1（試料番号3）の計3点である。この全点を対象に花粉分析・寄生虫卵分析・微細物分析を実施した。

## 第2節 分析方法

### 花粉分析・寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、<sup>1,2</sup>重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、花粉・胞子および寄生虫卵を分離・濃集する。処理後の残渣を定容し一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子と寄生虫卵について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、花粉化石は島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を、寄生虫卵は佐伯ほか（1998）、齊藤・田中（2007）等を参考にする。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。また、100個体未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。さらに花粉化石群集の分布図も表示する。図表中で

複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を十で表示するにとどめておく。

### 微細物分析

試料500gを常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、それぞれ粒径4～0.5mmの篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や動物遺存体の他、主に径2mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。

種実の同定は、現生標本や中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体、植物片は重量を一覧表に併記する。動物遺存体の同定は、現生標本や図鑑類を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

## 第3節 結果

### 花粉分析・寄生虫卵分析

結果を第4表、第52図に示す。花粉化石の検出状況は、試料により大きく異なる。溜池2（試料番号1）は花粉化石の保存状態は悪いものの、かろうじて定量解析が行える程度の産出が認められ

た。木本花粉ではマツ属が多産し、次いでミカン科が多く産出する。ミカン科は表面の状態が悪いためミカン科で同定したが、形態的にはミカン属に近い。その他ではコナラ属アカガシ亜属なども認められる。草本花粉ではカヤツリグサ科が多く、イネ科、クワ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科、タンボボ亜科などを伴う。シダ類胞子は、イノモトソウ属などが多く認められた。なお花粉・胞子数は、堆積物1ccあたり800個程度である。

円形石組1（試料番号2）、方形石組1（試料番号3）の試料はいずれも花粉化石の産出状況、保存状態が悪い。認められる花粉は、木本花粉ではマツ属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属、イボタノキ属など、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、キク亜科、タンボボ亜科などである。シダ類胞子は、イノモトソウ属などが確認された。なお、花粉・胞子数は、円形石組1で100個/cc、方形石組1で300個/cc程度である。

寄生虫卵は、円形石組1から回虫卵が確認されたが、堆積物1ccあたり100個未満である。溜池2、方形石組1からは、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。

#### 微細物分析

結果を第5表に示す。3試料1.5kgを洗い出した結果、被子植物2分類群（木本のアカメガシワ属、草本で栽培種のイネ）4個の種実の他、シャジクソウ科の卵胞子1個、不明炭化物11個、炭化材3.6g（最大16.5mm）、炭化材主体1.4g、植物片0.06g、動物遺存体（ニシキウズガイ科、オニノツノガイ科？、ヒラマキミズマイマイ、ヒラマキガイモドキ、リュウキュウヤマタニシ、オナジマイマイ科、ベッコウマイマイ科？、マイマイ類、腹足綱（大型）、腹足綱、タイ科/ペラ科？、硬骨魚綱、哺乳綱）2.8g砂礫主体190.2gが検出された。以下、試料別状況を記す。

溜池2（試料番号1）からは、常緑または落葉小高木のアカメガシワ属の種子3個、沈水植物のシャジクソウ科の卵胞子1個、炭化材0.3g（最大6.2mm）、炭化材主体0.4g、植物片0.06g、池沼や水田などの水草や石の上に棲息するヒラマキミズ

マイマイの殻8個、水中の植物に付着するヒラマキガイモドキの殻13個、陸産貝類のリュウキュウヤマタニシの殻2個、ベッコウマイマイ科？の殻17個、マイマイ類の殻10個、腹足綱の殻17個、タイ科/ペラ科？の歯1個、砂礫主体10.1gが検出された。

円形石組1（試料番号2）からは、不明炭化物6個（うち2個花序？）、炭化材0.6g（最大8.9mm）、炭化材主体0.5g、陸産貝類のオナジマイマイ科の殻1個、ベッコウマイマイ科？の殻21個、マイマイ類の殻3個、腹足綱（大型）の殻3個、腹足綱の殻25個、硬骨魚綱の鰭棘等5個、硬骨魚綱の部位不明4個、哺乳綱の部位不明3個（うち1個骨端未化骨）、種類不明の歯1個、骨9個、砂礫主体111.8gが検出された。ベッコウマイマイ科？には透明～半透明を呈す、現生種可能性がある個体が含まれる。

方形石組1（試料番号3）からは、栽培種のイネの炭化穀1個、不明炭化物5個、炭化材2.7g（最大16.5mm）、炭化材主体0.6g、海産性のニシキウズガイ科の殻1個、オニノツノガイ科？の殻1個、陸産貝類のベッコウマイマイ科？の殻4個、腹足綱の殻9個、砂礫主体63.4gが検出された。

#### 第4節 考察

##### 溜池2

溜池2についてみると、花粉分析ではかろうじて定量解析が行える程度の産出が認められた。木本類ではマツ属が多産し、次いでミカン科が多く産出する。多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全てマツ属複雑管束亜属であった。日本に生育する複雑管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種類がある。このうち、アカマツとクロマツは、沖縄には自生していない。一方、リュウキュウマツは沖縄特産で、広く生育している。これらのことから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高い。また、ミカン科は保存状態が悪かったが、形態的にはミカン属に近い個体が確認されている。ミカン属には沖縄で自生・栽培されているヒラミレモン（シークヮーサー）が含まれる。よって、マツ属やミカン科は植栽されたリュウキュウマツ、シークワー

サーなどに由来する可能性がある。その他で認められたコナラ属アカガシ亜属などは、周辺の二次林などに由来する可能性がある。草本類ではヤツリグサ科をはじめ、イネ科、クワ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科、タンボボ亜科など、開けた明るい場所に生育する種を含む分類群が多く認められる。よって、これらは池周辺の草地などを反映していると推測される。

微細物分析の結果からは、常緑または落葉小高木のアカメガシワ属が確認されており、植栽樹の可能性を含めて、中城御殿周辺の二次林等の林縁に生育していたと考えられる。沈水植物のシャジクソウ科は、やや水深がある水域に生育することから、池内に生育していたと考えられる。池沼や水田などの水草や石の上に棲息するヒラマキミズマイマイ、水中の植物に付着するヒラマキガイモドキなど、淡水域に棲息する巻貝類が検出された。これらも池内の環境を反映していると考えられる。

### 円形石組1・方形石組1

花粉分析の結果、円形石組1、方形石組1のいずれの試料も、花粉化石の産出状況、保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1967；徳永・山内、1971；三宅・中越、1998など）。検出された花粉の多くは、比較的分解に強い種類やある程度の分解の影響を受けても同定可能な種類である。また、花粉よりも分解に対する抵抗性が高いシダ類胞子も多く認められる。これらのことから、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子は、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

わずかに認められた種類から、木本類のマツ属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属、イボタノキ属などは植栽や周辺の二次林などに、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、キク亜科、タンボボ亜科などは遺構周辺の草地などに由来すると思われる。

寄生虫卵は、円形石組1から回虫卵が確認されたが、堆積物1ccあたり100個未満である。当

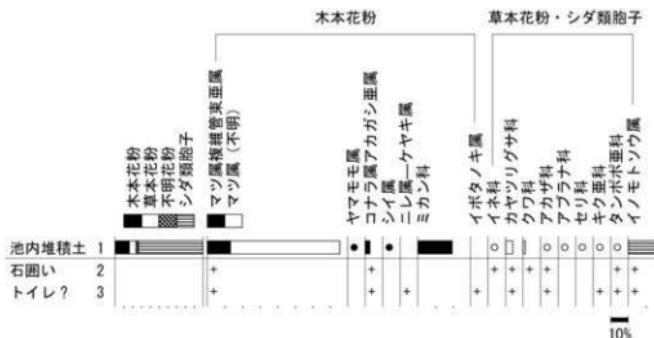
社でこれまで全国各地で実施した花粉分析結果では、遺構内や堆積層から微量の（1ccあたり数個～数十個）の寄生虫卵が検出されることはそれほど珍しくない。このような場合、ある程度の人口密度のある集落の汚染の範囲内と考えられる（金原ほか、1995など）。ただし、寄生虫卵の分解に対する抵抗性も花粉化石と同程度とされている（黒崎ほか、1993）。花粉化石の産状を考慮すると、寄生虫卵も分解の影響を受けている可能性がある。いずれにせよ、積極的にトイレ遺構を支持する結果とは言えない。

一方、微細物分析の結果を見ると、円形石組1からは、現生種が含まれている可能性がある陸産貝類、魚類、哺乳類の骨が確認されたことから、廃棄に伴う可能性が指摘される。また、方形石組1からは、栽培種のイネの炭化粧、海産性のニシキイズガイ科、オニノツノガイ科の可能性がある巻貝類の破片が確認され、これらも廃棄に伴う可能性がある。

なお、イネは中城御殿近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。

第4表 花粉分析・寄生虫卵分析結果

種類 試料番号	面積2			円形石組1			方形石組1		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
<u>木本花粉</u>									
マツ属複雑葉來属	14	3	5						
マツ属（不明）	67	7	21						
ヤマモモ属	1	-	-						
コウヤク属アカガシ亜属	3	2	1						
シノ属	1	-	-						
ニレ属—ケヤキ属	-	-	1						
ミカク科	21	-	-						
イボタノキ属	-	-	1						
<u>草本花粉</u>									
イネ科	2	1	-						
カヤツリグサ科	27	2	3						
クワ科	9	3	-						
アカザ科	5	1	2						
アブラナ科	3	-	-						
セリ科	1	-	-						
キク科	2	-	5						
タンボボ科	3	5	9						
<u>不明花粉</u>									
不明花粉	16	1	4						
<u>シダ類胞子</u>									
イノモトソウ属	110	19	54						
他のシダ類胞子	378	15	66						
<u>合計</u>									
木本花粉	107	12	29						
草本花粉	52	12	19						
不明花粉	16	1	4						
シダ類胞子	488	34	120						
合計（不透明度）	647	58	168						
<u>寄生虫卵（個/1cc）</u>									
回虫卵	0	<100	0						
寄生虫卵数（個/1cc）	0	<100	0						
花粉・胞子数（個/1cc）	800	100	300						
1) 寄生虫卵、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。									
2)<100=100個未満。									

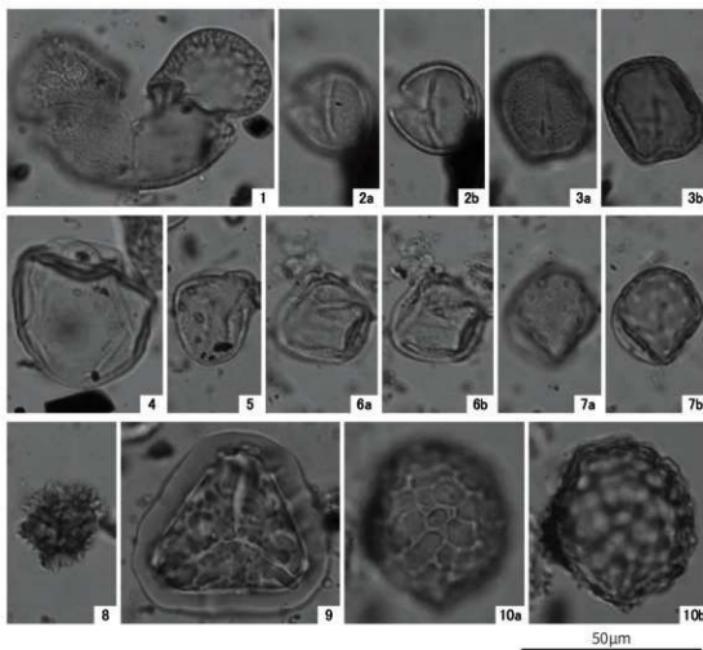


木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。丸印は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料において検出された種類を示す。

第52図 花粉化石群集

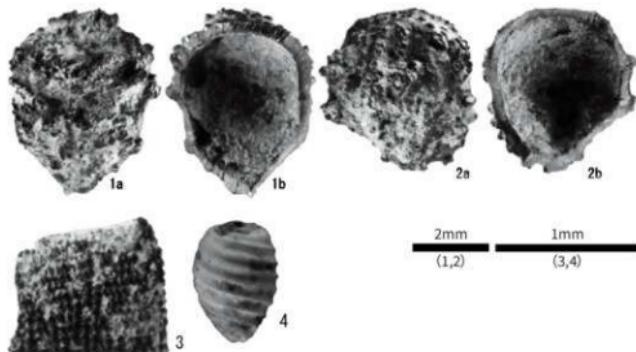
第5表 微細物分析結果

分類群・部位・状態 / 粒径	湖池2 円形石組1 方形石組1			備考
	1	2	3	
研究				
アカメガシワ属	種子	破片	3	-
イネ	度化稻	破片	-	1
車輪藻類				
シャジクソウ科	卵胞子	完形	1	-
不明炭化物		-	4	5
不明	花序?	完形	-	2
炭化材				
	6.16	8.91	16.54	最大径 (mm)
>4 mm	0.09	0.28	2.09	乾重 (g)
4-2 mm	0.24	0.34	0.61	乾重 (g)
炭化材主体	2-1 mm	0.18	0.28	乾重 (g)
	1-0.5 mm	0.20	0.16	乾重 (g)
植物片		0.06	-	乾重 (g)
動物遺存体				
腹足綱				
ニシキウズガイ科	殻	破片	0.22	0.07 乾重 (g)
オニツノガイ科?	殻	破片	-	1 海産性
ヒラマキミズマイマイ	殻	破片	-	1 海産性
ヒラマキガイモドキ	殻	破片	8	-
リュウキウシユヤマタニシ	殻	破片	13	-
オナジマイマイ科	殻	破片	2	-
ベッコウマイマイ科?	殻	破片	-	-
マイマイ類	殻	完形	17	4 陸産貝類, 石圓い:透明～半透明の個体を含む(現生種?)
		破片	10	-
腹足綱(大型)	殻	破片	-	3
腹足綱	殻	破片	17	25 9
硬骨魚綱			0.03	1.39 乾重 (g), 最大 25.69 mm
タイ科/ペラ科?	歯	破片	1	-
硬骨魚綱	鱗等	破片	-	5
哺乳綱	不明	破片	-	4
不明	不明	破片	-	3
	歯	破片	-	1 個: 骨端未化骨
砂礫主体	>8 mm	2.12	28.05	8.93 乾重 (g)
	8-4 mm	1.83	29.48	18.98 乾重 (g)
	4-2 mm	4.55	34.86	20.11 乾重 (g), 頁殻片, 骨片含む
	2-1 mm	3.46	8.83	7.73 乾重 (g), 頁殻片, 骨片含む
	1-0.5 mm	3.09	10.60	7.59 乾重 (g), 頁殻片, 骨片含む
分析量		500	500	500 乾重 (g)



1.マツ属(溜池2) 2.コナラ属アカガシ亜属(円形石組1) 3.ミカン科(溜池2) 4.イネ科(溜池2) 5.カヤツリグサ科(溜池2)  
6.クワ科(溜池2) 7.アカザ科(溜池2) 8.キク亞科(溜池2) 9.イノモトソウ属(溜池2) 10.回虫卵(円形石組1)

図版 41 花粉化石・寄生虫卵



1.アカメガシワ属種子(溜池2) 2.アカメガシワ属種子(溜池2) 3.イネ 稲(方形石組1) 4.シャジクソウ科 卵胞子(溜池2)

図版 42 大型植物遺体

## 第5章 総括

以上、平成27（2015）～29（2017）及び、令和元（2019）年度に実施した中城御殿跡発掘調査の報告を行った。ここでは、これまで行った報告を地区ごとに整理し、総括としたい。

### 前の空間

今回の調査では、正門の石牆西側端にあたる、トレンチ1にて調査を行った。道路拡張による石牆の移設工事を行うために、事前の遺構確認調査として実施した。以前の調査より確認されていた4号石垣（図版43-1）の約20cm下から、段上に30cm大の石が敷かれた層を検出した。近世以降の陶磁器類が主体となって出土しており、中城御殿を造営するために造成した箇所と考えられる。同様の状況は、平成23（2011）年度に行なった調査のトレンチ5北側、トレンチ7でも見られ（図版43-2、3）、正門西側の一帯を構成していたと考えられる。

### 上之御殿

中城御殿の北側には新御殿や北之御殿が位置する御内原の空間が広がっており、その西側には、石牆をはさみ上之御殿が存在したエリアが広がる。御内原よりも2mほど高くテラス状に整地された空間には、拝所が2か所と池を有する庭園、上之御殿と称される建物が1棟存在した。その規模や間取りは不明であるが、米軍の航空写真により、屋根の一部が木々に覆われた状態で確認できる（第53図）。上之御殿の機能について、明確な資料は現在のところ確認されていないが、大正9（1920）年に尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住むという記録があることから、王族の生活が営めるだけの施設が存在したことがわかる。

上之御殿の様相を示す遺構として、現在でも地表面に露出して残存しているものがいくつかあり、上之御殿入口の壁面となる石牆や庭園の一部、大岩の拝所跡など、当時の雰囲気を感じ

させるような遺構を見ることができる。また、平成22（2010）年度に行った調査では、御内原と上之御殿を繋ぐ入口となる門や階段跡などが確認されている。

今回の調査では、航空写真では木々に覆われているため確認できなかった上之御殿建物とその周辺状況を探るため、建物や拝所周辺、そして西と南北に調査区を設定し、遺構の確認調査を行なった。上之御殿の平場が広がっていたと見られる付近のトレンチ内からは、コンクリート基礎や、遺構から外されたと見られる石面、岩盤等が検出されるが多く、遺構の残存状況があまり良くない。当地は周辺地域の中でも高所に位置しており、砲撃の標的にされやすかったことと、戦後の開発時に大きく改変されたことが考えられる。以下に確認された各遺構の状況についてまとめる。

### 西側石牆周辺

上之御殿西側では、上之御殿内を東西に区画すると考えられる石牆が確認されている。石牆はトレンチ2・4・5で確認され、上之御殿の空間を南端から北端まで区画する。石の積み方はほぼ均一に20～30cm大の石灰岩が使われているが、トレンチ2南側の根石付近のみ60～70cmの大きな石が積まれている。南側は他に比べて天端付近の地表が高い標高にあり、石積みも高くなるため、崩落を防ぐために根石部分で他より大きな石を使用し支えたと考えられる。

石牆の一部では岩盤を加工して利用している部分も見られた。トレンチ2南端の石牆1・2接続部では、自然の岩盤に石積みの形状や積み方を合わせている様子が見られる（図版44-1）。また、トレンチ4の北側から検出された部分では岩盤が地面に対して垂直に削られ、壁面のように加工される（図版43-4）。岩盤の壁は石牆より30cmほど奥まった所に位置してお

り、その接続部の間には、上部に面をもつ平たい面石が配置される。一見石牆の天端の一部が残っているようにも見えるが、側面が石牆と並行せず、他の残存部と上面の角度も揃わないため、石牆とは別個の遺構と考えられる。面石は3つ残存しているのが確認され、南側から北へと下るように配置される（図版43-4）。岩盤の南隣には石疊が配置され、石疊の向かう先には石積み3・4が配置される。これらの状況から、上之御殿上段のテラスから、下段の石牆根石付近の地表へと降りるための階段が存在していた可能性が考えられる。根拠が薄弱で、飛躍した仮定となるが、石疊は階段入口の門部分となり、そこを通り西へ向かい、石積み3・4上に作られた踊場で進路を北に変え、そこから石牆に沿って下段へと降りる状況を想定できる。トレンチ5で確認された、石積みの孕んでいる部分は、調査時に崩落する可能性があつたため、孕んでいる部分のみ解体した。解体中に戦後のものと見られる薬瓶やスプーン、ポールチェーンなどの現代遺物が確認されたため、戦時中に破壊された石牆を何らかの目的で積み直したもの、土圧に耐え切れず、孕んだものと考えられる。また、孕みながらも崩落はしていなかったため、積み直してから短い期間の内に埋められたと考えられる。

石牆が埋められた時期については、石牆上部に堆積しているI層内からコンクリート基礎やレンガに混じって、1960年代頃のものと見られるジュースやビールなどのガラス瓶類が多く確認されていることから、琉球政府立博物館の建物が建設された時に造成されたものと見られる。この造成土は非常に厚く堆積しており、石牆から西に約8m、石牆根石付近の上之御殿当時の地表面から高さ約3mの範囲に広がる。そこからさらに西側へなだらかに落ちていく。博物館建設当時に、上之御殿エリアのテラス部分の敷地を広げるために大規模な造成を行ったことが想定される。

#### 北側石牆周辺

北側石牆周辺としたトレンチ6は、上之御殿内を南北に走る石牆1の北端に接続する地点から、上之御殿入口の石牆までの東西区間に設定したトレンチで、拝所の北側の広場に位置する。隣道との境界線となる石牆の検出が期待されたが、掘削を行ったところ、表土と造成層が主体で、明確に石牆と言える遺構は検出できなかつた。

調査区内に堆積していた表土は南側の浅い所で約60cm、北側の深い所で約1mと、南から北にかけて緩く傾斜しながらI層が堆積している状況が見られた。

トレンチ6の西側では、石牆1に接続する岩盤が、壁面のように成形された面が続いていることが確認され、その面が緩やかにカーブを描きながら西から北へと向きを変えている様子が確認できた（図版44-2）。

以上の状況から、北側の石牆が戦後の造成などにより破壊されていなければ、岩盤の面の方向と、上之御殿入口北の石積み北端を結んだライン上、トレンチ6より北側に位置することが予想される。また、上之御殿入口北の石積みの天端標高が約101.4mであるのに対し、トレンチ6北側のI層は標高約101.4～100.4mまで堆積しており、これらの状況から、北側石牆の天端は破壊されており、残存部があるならば標高100m以下にて検出される想定される。

#### 拝所周辺

上之御殿内の拝所とされる地点は、古写真のように大岩を覆うように石灰岩の階段で構成されており、上之御殿内の様相を写す資料として、現在のところ、唯一写真資料が残っている箇所である。

調査を行ったトレンチ10からは、階段の根石と考えられる石積み6が検出された。岩盤の突出した部分から石積み6までの距離は約120cmで、階段を作る幅としてはやや狭い印象を受ける。また、石積み6の加工面は荒く、古写真に見られるような丁寧な表面の加工がなさ

れていないため、本来は、石積み6の外周に、階段を構成する石積みが存在していた可能性が考えられる。

石積み6東側の下層に開けられた穴については、以前の調査時の聞き取り調査により、戦況が悪化してきた1945（昭和20）年3～4月頃、御殿に収められた宝物を分散して避難させるため、敷地内の数か所に穴を掘るなどして隠したことが情報として得られており、この穴もそのうちのひとつにあたる可能性がある。穴の内部には現代の造成層が堆積しており、御殿当時に収めたと考えられる遺物はみられなかった。

#### 庭園周辺

中城御殿当時は、古写真に残るような他の庭園部分同様、芝山を主体とした庭が構成されていたと考えられる。庭園周辺の調査開始当初、溜池は地表面に露出していた溜池1のみだと想定していたが、掘削を進めると溜池1より約50cm低い標高から溜池2を検出した。溜池2内の堆積は、池の底と考えられる泥質の土の直上に、瓦礫の層が厚く堆積しており、戦後の造成によって埋められたとみられる。博物館当時の平面図と溜池の平面図を重ねると、建物の屋根が溜池2の一部にかかっているため、首里市役所などが建てられた時期には、溜池2は埋められていたと考えられる。

溜池1と溜池2の接続部には溝が作られ、溜池1に溜まった水が許容量を超えると溜池2に流れ込むような構造になっていたが（図版15-5）、雨などにより実際に溜池1から溢れるまで水が溜まる状況になると、反対の東側の端から水があふれ出ているため、実際に溝が接続部として機能していたかについては不明である。

溜池の南側の1mほど標高の上がった地点に庭園基盤部が位置する。基盤部の岩盤は水平に掘削された部分と、自然面のまま残されている部分が明瞭に分かれしており、意図的に高低差が作られていた（図版44-3）。庭園基盤部から地表面までの土の堆積は約10～20cmと薄くなっており、溜池の上部に見える景色は、所々

に岩盤が露頭する、なだらかな小山が形成された状態だったと考えられる。航空写真に見られるように、上之御殿は木々に覆われた状態だったため、庭園部も植栽された状況だったと考えられる。溜池2最下層の、池底の泥と考えられる土のサンプルで花粉分析を行った結果、池内に生息していたと考えられる沈水植物や淡水域に生息する貝類などの、池の状況を示す花粉に加えて、マツ属やミカン科の花粉が多く検出されている。これら分析の状況から、池周辺には樹木が植栽されていた痕跡がみられる。また、庭園基盤部分の前面に多く見られるピット群の性格については、小規模な樹木を、土をかさ増しして植栽するためにあけられた可能性が考えられる。また、池付近の岩盤にも水平に削られている面があり、鉢植えなどの植物を配置していた状況も考えられる。

#### 上之御殿建物周辺

今回調査を行ったトレント12では、航空写真および屋根伏図から、建物の北側付近と推測される地点の調査を行った。上之御殿エリアの中でも最も造成による攪乱が激しく、遺構の保存状況が悪い状況で、戦後以降のものと考えられるコンクリートの基礎などが、地表面から1mほど深さに広がっていた。現代の平面図と合わせると、上之御殿はコンクリート製建物によりほぼすべてが覆われており、この時期の造成によって遺構が破壊されたものと見られる。

破壊を免れた遺構の中に中城御殿当時のものと考えられる石列及び石組がある。

トレント12北側から検出した石疊1は、中城御殿当時に露出しており、当時の標高を示すものと考えられる。また、石疊1に隣接する石列2は、石疊から庭園まで、途中で途切れながらも一直線に延びているため、上之御殿南北約22m間の地表標高を推測できる。石疊のある北側で標高約100.80m、庭園付近の南側で約101.00m前後に位置する。2点間の距離と高低差から、その傾斜角は約0.5度となる。東西については、確実に地表面だったと考えられる溜池1・2の

縁部分で見てみると、溜池1の東側地点では約101.20m、溜池2の西側部分では約100.00mとなり、2点間の約15mの高低差は約20cmとなる。傾斜角は約0.7度と、東側が若干高くなるが、東西南北を見ても、上之御殿の地表は水平に近い平面で構成されていたと考えられる。

方形石組1は、上部が破壊されているものの、四方を壁となる面石で囲み、底を石疊状の敷石で埋める構造になっている。底の標高は約100.24mとなっている。方形石組1の標高は、想定される上之御殿の地表面よりも約50cm以上は低いと考えられ、同標高にモルタルで塗り固められた部分が接続することから、地下に水を留めておく機能があったと考えられる。トイレ跡などの可能性があるため、寄生虫卵分析を行ったが、結果として寄生虫卵は検出されなかつたため、現時点での機能を断定することは難しい。

以上、平成27（2015）～29（2017）、令和元（2019）年度に実施した中城御殿跡発掘調査報告を行った。これまで述べてきたように、建物付近に関しては戦争による破壊や、その後の造成により、遺構はほぼ消滅しているといつてい状況にあった。前の空間や御内原のように建物が群立している状況ではないこともあり、遺構や遺物から上之御殿の様相を探るのは難しいと考えられる。一方、建物以外の敷地境界付近、特に西側石牆付近の遺構は良好な状態で保存されており、上之御殿の当時の状況をある程度把握できたと考えられる。

最後に、調査及びに資料整理作業に際しては多くの方々に力を貸していただき、また指導・助言を賜った。記して感謝申し上げたい。



1. 平成 5 年度調査時検出 4 号石垣（西より）



2. 平成 23 年度調査時検出石敷（北から）



3. 平成 23 年度調査時検出石敷（西から）



4. 石牆 1 岩盤接続部（西から、トレンチ 4 北側）



5. 石牆 1 岩盤接続部（上空東から、トレンチ 4 北側）

図版 43 遺構検出状況 1



1. 石牆1・2岩盤接続部（トレンチ2、北西から、写真左：石牆1、右：石牆2）



2. 岩盤加工部（トレンチ6、西から）



3. 施工基盤岩盤加工部（トレンチ7、西から）

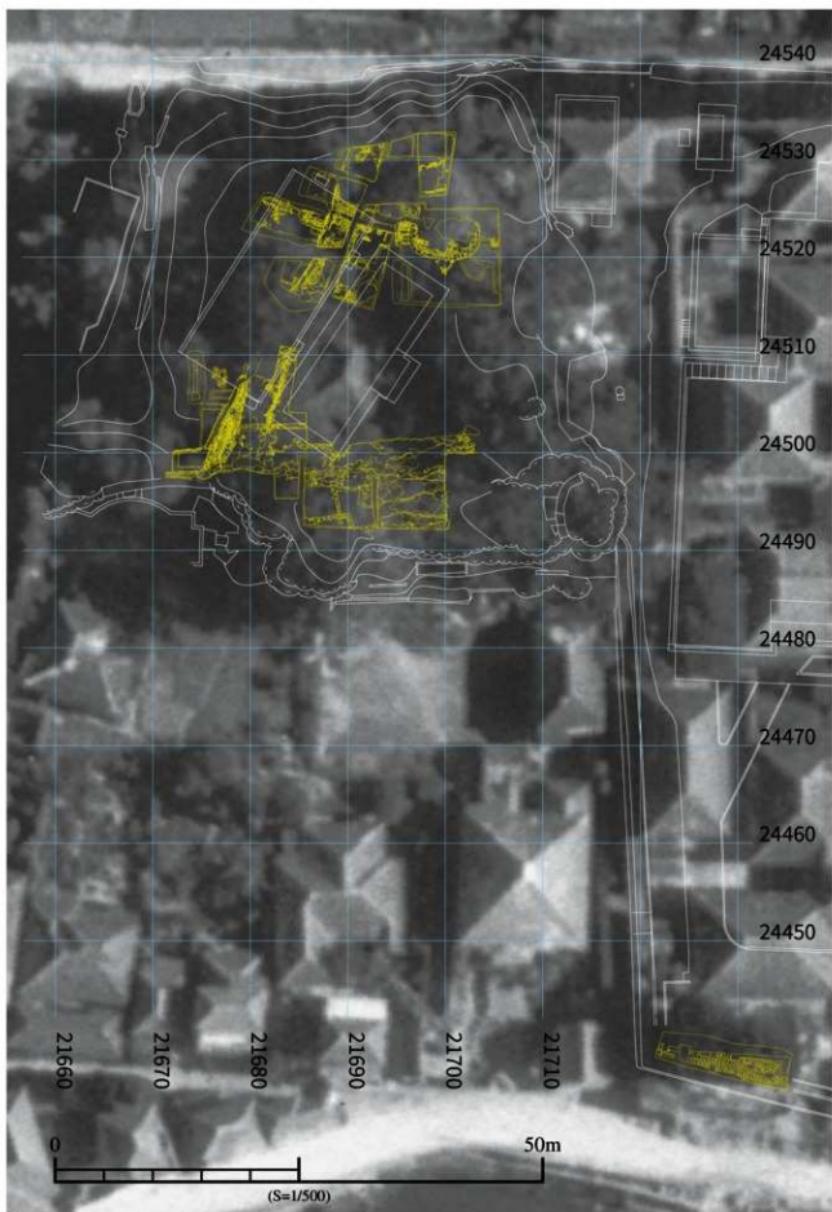


4. 方形石組1（トレンチ12、上空南から）



5. 方形石組1検出部壁面（トレンチ12、北から）

図版 44 遺構検出状況 2



第 53 図 上之御殿遺構図と戦前航空写真の合成

# 引用・参考文献

## 表紙

沖縄風土記刊行会編 1970『首里古地図』

## 第2章

### 第1節 地理的環境

都築昌子 2005「龍のひそむ島—近世琉球の風水—」『沖縄県史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会

球陽研究会編 1974『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成 5 角川書店

真栄平房敬 1983『首里』『沖縄大百科事典 中巻 ケ～ト』沖縄タイムス社

### 第2節 歴史的環境

真栄平房敬 1983『中城御殿』『沖縄大百科事典 下巻 ナヘン』沖縄タイムス社

沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿—石牆工事にかかる第一次発掘調査—』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿—石牆工事にかかる第二次発掘調査—』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿—石牆工事にかかる第三次発掘調査—』沖縄県立博物館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(Ⅰ)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター

調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター

調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター

調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報

告書(4)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第67集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(5)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第84集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『中城御殿(首里高校内)ー首里高校内校舎改築に伴う発掘調査ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第93集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第95集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 第3章

### 第4節

#### 1 中国産青磁

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(2)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第69

集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 2 中国産白磁

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008『沖縄における貿易陶磁研究』『沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 3 中国産青花

東京国立博物館 2009『染付 藍が彩るアジアの器』東京国立博物館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

京都国立博物館 2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社

## 4 中国・タイ産褐釉陶器

向井亘 2003『タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代』『貿易陶磁研究No.23』日本貿易陶磁研究会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－一二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008『沖縄における貿易陶磁研究』『沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 5 その他の輸入陶器

中国産色絵

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

中国産黒釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集 沖縄県立埋蔵文化財センター

紫砂

沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『首里城跡－御内原東地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第88集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 6 本土産陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』佐賀県立九州陶磁文化館

北谷町教育委員会 2016『平安山原A遺跡』北谷町文化財調査報告書 第38集 北谷町教育委員会

那覇市立壺屋博物館 2016『朝鮮人陶工来琉四〇〇年記念一六一六年 琉球陶始四〇〇年』那覇市立壺屋博物館

## 7 沖縄産施釉陶器

佐賀県立九州陶磁文化館 1998『沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『首里城跡  
一錢蔵地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵  
文化財センター調査報告書 第 77 集 沖縄県  
立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(7)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

#### 8 初期沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡  
一御内原北地区発掘調査報告書(1)一』沖  
縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54  
集 沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣力 2013『17世紀前半～中葉の琉球陶器に  
ついて－「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の  
影響－』『鹿児島考古 第 43 号』鹿児島県考  
古学会

#### 9 沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(2)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(3)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

#### 10 陶質土器

曾根信一 1983『アカムヌー』『沖縄大百科事典  
上 ア～ク』沖縄タイムス社

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡  
一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻  
門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一』  
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第  
3 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(3)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡  
一御内原北地区発掘調査報告書(2)一』沖  
縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69  
集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(7)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

#### 11 瓦質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡  
一御内原北地区発掘調査報告書(2)一』沖  
縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69  
集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『首里城跡  
一錢蔵地区発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵  
文化財センター調査報告書 第 77 集 沖縄県  
立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(7)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

#### 12 土器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡  
(I)一首里杜館地下駐車場入り口新設工事  
に伴う緊急発掘調査一』沖縄県立埋蔵文化財  
センター調査報告書 第 2 集 沖縄県立埋蔵文  
化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(3)一』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報  
告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

#### 13 煙管

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿  
跡一県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報  
告書(7)一』沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査報告書 第 102 集 沖縄県立埋蔵文化財セ  
ンター

#### 14 金属製品

沖縄県教育委員会 2008『沖縄の金工品関係  
資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第

- 4集 沖縄県文化調査報告書第146集 沖縄県教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第95集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 15 円盤状製品  
上原静 2004「考古学からみた沖縄諸島の遊戲史」『グスク文化を考える世界遺産国際シンポジウム＜東アジアの城郭遺跡を比較して＞の記録』今帰仁村教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 16 骨製品・土製品  
骨製品  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 土製品  
川田壽文 2010「IV 遺構と遺物 3 江戸時代 2) 遺物 B 土製品」『新宿区内藤町遺跡－新宿御苑大温室の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告
- 第246集 東京都埋蔵文化財センター  
17 ガラス製品・ガラス玉  
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 18 石製品・石器・石造製品  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡・真珠道跡－首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第51集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
有銘倫子 2011『沖縄県内における遺跡出土硯』『南島考古 第30号』沖縄考古学会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 19 瓦・埴  
上原静 2008『沖縄諸島における琉球瓦の再編年』『沖縄国際大学総合学術研究紀要 第11巻第2号通巻第14号』沖縄国際大学総合学術学会  
坪井利弘 1977『団鑑瓦屋根』理工学社
- 20 銭貨  
永井久美男 1996『日本出土銭總覽』兵庫埋蔵銭調査会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 第4章

- 藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』アクリアコーラル企画 p.155
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 1995『大宮坊跡(廻跡)における自然科学的分析 史跡石動山環境整備事業報告II』石川県鹿島町教育委員会 pp.51-70
- 黒崎直・松井章・金原正明・金原正子 1993「糞便堆積物の分析—特に寄生虫卵分析について—」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp.115-115
- 三宅尚・中越信和 1998「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究6』pp.15-30
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 p.824
- 中村純 1967『花粉分析』古今書院 p.232
- 中村純 1980「日本産花粉の標徴 I II(図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12,13集』p.91
- 中山至大・井の口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑(2010年改訂版)』東北大出版社 p.678
- 佐伯秀治・升秀夫・早川典之 1998『臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラスオールカラー版一』株式会社メディカルサイエンス社 p.162
- 齊藤崇人・田中義文 2007『寄生虫卵殻の形態分類』『徳永重元博士献呈論集』パリノ・サー・ヴェイ株式会社 pp.407-416
- 島倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集』p.60
- 鈴木庸夫・高橋冬・安延尚文 2018『草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる734種増補改訂一,ネイチャーウォッキングガイドブック』誠文堂新光社 p.303
- 徳永重元・山内輝子 1971『花粉・胞子・化石の研究法』共立出版株式会社 pp.50-73
- 氏家宏・兼子尚知 2006『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)那覇及び沖縄市南部

地域の地質』独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター p.48

## 第5章

- 山里銀造 1983「庭園」『沖縄大百科事典 中巻 ケーツ』沖縄タイムス社
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(5)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第84集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと							
書名	中城御殿跡							
副書名	県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（8）							
卷次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第109集							
編著者名	田村 薫、奥平大貴、久場大暉、島袋桃子、國吉ななせ、バリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	令和3年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'."	調査期間	調査面積	調査原因	
なかぐすくうどぅんあと 中城御殿跡	おきなわけん なはし 沖縄県那覇市 しゅり おおなかちょう 首里大中町 ちゅうじょう 1丁目 1~3番	472018	—	26° 13' 15"	127° 43' 05"	2015.6.1~12.18 2016.10.12~11.11 2017.8.2~2018.2.28 2019.6.25~12.4	334 m <sup>2</sup> 130 m <sup>2</sup> 130 m <sup>2</sup> 179 m <sup>2</sup>	県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
中城御殿跡	屋敷跡	近世～現代	石積み 配石 石牆 石列 石疊 井戸 溜池 庭園 方形石組 円形石組 石敷き	中国産青磁 中国産白磁 中国産青花 中国・タイ産褐釉陶器 その他の輸入陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 初期沖縄産無釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器 瓦質土器 土器 煙管 金属製品 円盤状製品 骨製品・土製品 ガラス製品・ガラス玉 石製品・石器・石造製品 瓦・埠 錢貨				
要約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870 年から 1945 年まで存在していたが、沖縄戦で焼失した。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は、中城御殿の遺構残存状況を確認する目的で行われ、石牆や石疊、庭園などの遺構が良好な状態で検出された。							

---

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 109 集

## 中城御殿跡

— 県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書(8) —

発行年 令和3(2021)年3月31日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター調査班  
〒 903-0125

沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098 (835) 8751・8752

印 刷 沖縄県自分史センター株式会社  
〒 903-0804

那覇市首里石嶺町4丁目 288 番地

---

沖縄県立埋蔵文化財センター 2021 Printed in Japan

許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

# 首里古地圖

本圖は1970年に作成されたものである。これまで半世紀に亘る歴史から現存するまでにして、  
地図を複数枚の上に重ねておらず、この地図を唯一の一枚である。

ところが、この地図も時代を経ていて、内側ははだしく、城郭のものには變ることさえ  
出来ず。まったく適用したえない状態になっていた。現存写真によると、丸世御殿（まいしやん）が  
現存する事などして、この地図を内側にしたことが挙げている。尚ほ、現存は現用できないので、  
現存写真を参考して、各町名を書きこむこととした。この地図は、現存する現用している、  
現存しないもの等、現存する現用しているものと現存しない現用していないものと、  
この地図の範囲は、現存する現用しているものと現存しない現用していないものと、  
現存する現用していないものと現存しない現用がないものである。

当時ともう現存しないものは、現存する現用していないものである。

この地図の範囲は、現存する現用がないものである。

よく難解して書きあらためたものである。（原手不詳）

